

なりと。是等の天人が衣類を用ゐざるは、赤裸々は無垢に相應するが故なり。

二百八十一。われ無垢につきて天人と語れる處多し、而して之をきく、無垢は萬善の實體にして善の誠マコトに善なるは其中に含める無垢の分量に比例す、従ひて證覺シヤクの誠マコトに證覺シヤクなるは、只その無垢の中より發し來る時にのみ限り、愛と云ひ、仁と云ひ、信と云ふも亦然り、是故に無垢ならざれば、人は天界に入るを得ず、主が次の如く云ひ給へるは此義によれり、曰く、「幼兒を我に來らせよ彼等を禁いさむる勿れ、神の國にをるものは斯の如きものなり、我まことに汝等に告げん、凡そ幼兒の如くに神の國を受けざるものは、之に入ることを得ざるなり」と(馬可傳、第十一章、一四、一五。路加傳、第十八章、一六、一七)。幼兒とは他處に於ける如く、此にも亦無垢なるものを云ふ。無垢の情態は主又之を馬太傳に(第六章、二五より三四)記し給へり、されどこは只相應によりてのみなりと知るべし。

善の善なるは、無垢其中に在る時のみなりと云ふは、萬善は主より來り、而して無垢とは主の導く所とならむと志すにあればなり、われ又之をきく、無垢にあらざれば眞を善と和合し、善を眞と和合すること能はずと。故に天人もその心に無垢の境涯を得ずば天界の天人となるを得ず、そは何人も眞を以て己れにある善と和合せしむるにあらざれば、天界を其中におくこと能はざればなり。善と眞との和を天的婚姻と云ふは是故にして、天的婚姻即ち天界なり。われ又之を聞く、まことの婚姻は無垢の愛の上に成立するものにして、その故は夫と妻との心の中にある善と眞との和合、即ち是れ婚姻な

ればなりと。天界における善と眞との和合、地上に降り來るとき、こゝに婚姻の愛と云ふ形式にて現はれ出づ、何となれば婚姻の常事者は、善と眞とを代表せる其心の如く、互に亦相愛すればなり。故に婚姻の愛には一種の稚氣的無垢の嬉戯あり。

二百八十二。無垢は天界の天人にとりては、善の實體なるが故に、主より來る所の神善は無垢そのものなるや明かなり。そは天人の中に流れ入りて、其の内底を動かさし、彼等をして天界一切の善を享け得べき心の下地を作り、又之に順適せしむるものは此神善カミノマコトなればなり。幼兒の場合におけるも亦これに似たり、彼等の内分は管に主よりする無垢の内流によりて形成せらるゝのみならず、又絶えず天愛の徳を享くるやうに順適し、且つ其心の下地を作り行くものとす。そは前に云へる如く、無垢は萬善の實體なるが故に、その徳れ人を動かすや、その人の内底よりすればなり。故に一切の無垢は主より來るものなるや明かなり、聖言の中に主を呼びて羊と云へるは是がためなり、蓋し羊は無垢を表はせり。無垢は天界萬善中の最奥底に存するが故に、之を感ずるものと心を動かすや、例へば最奥の天界の天人が將に來らむとする時の如く、彼は茫然自失して、歡喜の心に堪へざらむとす、而して此歡喜は世上一切の歡喜の比倫に絶えざる所なり。われは經驗よりして之を言ふ。

二百八十三。無垢の徳にあるものは皆無垢の動かすところとなる、何人と雖、此徳にをる限りは、それだけ動かさるゝ也。されど無垢にをらざる者は、しかく動かさるゝことなし、是理によりて地獄

界にあるものは全く無垢と反対せり、彼等は實に無垢の何たるを知らず、而して其之に反対するの甚しきや、無垢なるものを見れば、彼等之を害せんとするの情に燃ゆ、故に彼等は小兒を容るゝ能はず、もし之を見ることあらば、忽地に殘忍の心を燃やして之を害はんことを願ふ。故に知るべし、我想は、從ひて自己の愛は無垢と相容れざることを。總て地獄界に在るものは我像の中にをれり、故にまた自己の愛にをるものとす。

○天界における平和の情態のこゝ。

二百八十四。天界の平和を實見せざるものは、天人が居る所の平和とは如何なるものなるかを知覺するを得ず。また人間は其の肉體に在る限りは、天界の平和を享くる能はず、故に之を知覺する能はず、そは人間として知覺する所は自然界に屬するものに過ぎざればなり。もし天界の平和を知覺せんとせば、想念比上において、肉體の桎梏を脱却し、超越して、精靈の裡に住し、而して後天人と伍せざるべからず。われは此の如くにして天界の平和を知覺したるにより、今之を記述するを得る也。されど人間の文字の充分ならざる、われはそのあるまゝを此に記す能はず、只之を神に満足せるものが樂しむを得る所の安心の境涯と比較して、その髣髴を記すに止まる。

二百八十五。天界に兩個の内幕あり、無垢と平和となり、之を内幕と云ふは、主より直接に起り來るが故なり。無垢は天界の萬善の由りて來る所、而して善の喜びは平和より來る。善として喜びの之に添はざるはあらず、而して此善と此喜びと、共に愛より來る、そは善とはその愛する所の謂にして、喜びは之を知覺するときに感ずるものなればなり。故に之を推して、此等兩個の内幕、即ち無垢と平和とは主の神愛より起り來りて、天人を其内底より動かすことを知るべし。無垢は善の内幕たることは、前章天界における天人の無垢の状態を説けるときに見たれば、今平和とは無垢の徳より起る内幕の喜びなることを説くべし。

二百八十六。先づ平和は如何にして來るかを説かん。それ神的平和とは主にあるものにして、神格そのものと、主にある神的人格とが融合せる結果なり、而して天界における平和の神的なる所以は、主より來るが故にして、此平和は主と天界の天人との和合せる結果なり、細かに云へば、各天人中の善と眞との和合より來る也。之を平和の由りて來る處とす。之によりて天界における平和とはこゝにある一切の善を、その内底より動かして、之に福祉を與ふる所の神格なること、故に天界における一切の喜びの源なることを明むべし。平和は、其實性において、主の神愛より來る神的喜びなり、即ち主が天界及びそこにある一切のものと和合し給ふより來る所の神的喜びなり。此喜びを主は天人の中に感じ給ひ、天人は之を主によりて感ずるを平和と云ふ。之によりて天人は一切の福祉と歡喜と幸福とを有す、即ち天界の喜びなるものを有するなり。

二百八十七。平和の由りて来る處、彼の如くなるにより、主を呼びて平和の君と呼び、又平和は彼より來り、彼に平和ありと云ふなり。天人をまた平和の天人と云ひ、天界を平和の所住と呼ぶことは次に引用する所を見よ、「一人の嬰兒我等のために生れたり、我等のために與へられたり、政事は其肩にあり、其名は奇妙、また講士、また大能の神、永遠の父、平和の君と稱へられん、其政事と平和は増し加はりて限りなし」と（以賽亞書、第九章、六、七）。耶蘇曰く、「われ平和を爾曹にのこす、わが平和を爾曹に與ふ、我與ふる所は世の與ふる所の如きにあらず」と（約翰傳、第十四章、二七）。曰く、「われ此事を汝等に語りしは、汝等をして我にありて平和を得させん爲なり」と（約翰傳、第十六章、二三）。曰く、「エホバその面を擧げて汝を顧み、汝に平和を賜へよ」と（民數紀略、第六章、二六）。曰く、「平和の天人いたく哭く、大道あれ廢る」と（以賽亞書、第三十三章、七、八）。曰く、「正義の功は平和なるべし、而してわが民は平和の家に住むべし」と（以賽亞書、第三十二章、一七、一八）。聖言の中に言へる平和とは神的及天的平和を云ふものなることは其他の文中平和を云へる處を見れば亦明かなり（即ち以賽亞書、第五十二章、七。第五十四章、一〇。第五十九章、八。耶利米亞書、第十六章、五。第二十五章、三七。第二十九章、一一。哈基書、第二章、九。撒加利亞書、第八章、一二。詩篇、第三十七章、三七、及び其他）。平和は主と天界とを表はし又天界の喜びと善における歡喜とを表はすが故に古代における請安の語は「汝に平和あれよ」ありき、これ今日も尙傳ふる所なり。主其弟子を外に派

遣し給へるとき、主は次の如く云ひて、此請安の語を允准し給へり、曰く、「人の家に入らば先づ云へ、此家に平和あれよ。もしこゝに平和の子あらば、爾曹の平和は此に留るべし」と（路加傳、第十章、五、六）。又主の使徒に現はれ給へるとき、「爾曹に平和あれ」と云ひ給ひぬ（約翰傳、第二十章、一九、二一、二六）。聖言中にエホバ平安の香を嗅ぎ給へりとはあるは又平和の情態を表はせる也（出埃及記、第二十九章、一八、二五、四一。利未記、第一章、九、一三、一七。第二章、二、九。第六章、八、一四。第二十三章、一一、一三、一八。民數紀略、第十五章、三、七、一三。第二十八章、六、八、一三。第二十九章、二六、八、一三、三六）。平安の香とは天國の意義によれば平和を知覺するの謂ひなり。平和とは神格そのものと、主に於ける神的人格との融合を表はし、又主が天界、及び教會、及び天界の萬物、及び主を攝受する教會における萬事との和合を表はすが故に、安息日は此等の事情を追憶せんがために設けられ、平安、即ち平和の義を以て其名となし、教會の最も神聖なる表像となれり。是の故に主は自ら呼びて安息日の主と云ひ給ふ（馬太傳、第十二章、八。馬可傳、第二章、二七、二八。路加傳、第六章、五）。二百八十八。天界の平和とは、天人が居る所の善其ものを内底より動かして、之に福祉を加ふる所の神格を謂ふものなるが故に、天人も其生涯の善徳中にをりて其心歡喜に充つるにあらざれば、あからさまに平和の何たるかを知覺することあらず、又眞を聞くとき、其善と一致するを見て、心に快暢を覺ゆることなく、善と眞との和合を感得するに當りて、心に快活の情を覺ゆることなければ、天人

は平和の何たるかを知覚することあらず、而して平和は是よりして彼等が生涯における一切の行爲と想念との中に流れ入り、此に喜びとなりて外に現はる。

平和の性質と分量とは諸天における天人が在る所の無垢の度如何によりて一様ならざるは、無垢と平和とは相並びて歩行するものなればなり。そは上に言へる如く、天界一切の善は無垢より來り、此善に添へる一切の歡喜は平和よりするに由る。故に前章にて天界に於ける無垢の情態に關して言へる所は、亦此に移して平和の情態につきて言ひ得べきは明かなるべし。蓋し無垢と平和とは、善と之に伴へる歡喜との如く、相連合せり、何となれば善を感じるは、之に伴へる歡喜により、歡喜を知るは之を生ずる善によればなり。故に最奥、即ち第三の天界にある天人は平和の第三度、即ち最高級に在るものなるを明むべし、そは彼等無垢の第三度、即ち最高級に在ればなり。下層の天人に至りては無垢の度を下るが故に、平和の度におけるも亦一層を下れるは明かなり（二八〇を見よ）。

無垢と平和とは、善と其歡喜との如く、相離れざるものなることは、小兒につきて、之を見るを得べし、即ち小兒は無垢なるが故に、亦平和に在り、平和に在るが故に、彼に在りては、一切のもの悉く遊戯三昧なり。されど小兒の平和は外的平和なり、内的平和に至りては、内的無垢の如く、唯證覺の中にのみ存せり。故に善と眞との和合の中にのみ存せり、而して是和合即ち證覺の源なり。天界又は天人の平和と雖も、吾等もし善と眞との和合より成れる證覺の裡に在り、隨ひて神に安んずるの自

識を有せんには、われらの上にもあるを得べし。されどわれら此世間に生息するうちには、此の如き平和も只内分のうちに潜み居るに止まり、その充分に發揚せらるゝは、身體を離れて天界に入るときと知るべし、何となれば其時内分啓くればなり。

二百八十九。神の平和は主が天界と和合するより來り、殊に各天人の上に善と眞との和合するより來るものなるが故に、天人もし愛の情態に居れば、亦平和の情態に在るとなすべし、其時彼等の上に善と眞との和合あればなり。天人の情態の次第を逐ふて變轉することは、既に見たる所なり（一五四より一六〇）。復活せんとする人間の場合においても亦これに類せることあり。此人の上に善と眞との和合あるときは、（これ殊に誘惑の後に起る）彼は天界の平和より來る所の歡喜の情に充つるものとす。此平和は春時の朝又は曉に比すべし、日將に上らむとして、夜既に明け、地上一切の生物また自ら新ならんとす、植物の香ひ、天來の露に移り、柔かなる春時の氣候は土地を豊沃にし、又人の心を長閑ならしむ、そのかくの如き所以は春時の朝又は曉は天界における天人の平和と相應すればなり。

二百九十。われは又平和につきて、天人と物語れるとき言ふ、世間にては國々の間に交戦、争闘なく、人々のうちに冤仇、不和復た起らざるべきを平和と云ひ、又胸に憂慮なく心に安息を得るとき、殊に事業の成功より來る所の寧靜、歡喜の情を以て、内的平和なりと信せりと。されど天人云ふ、憂慮を除けるとき、又は事業の成功せるとき、人の心に感ずる所の安息、寧靜、歡喜の情態は、平和を構

成する要素の如く見ゆれども、若しそのうちに天界の善徳なくば、しか云ふを得ず、そは善を離れたる處に平和なければなり。何となれば平和なるものは主より流れ出で、人心の最内底に入り、これより更に流れ下りて、その下方面に入り、是に始めて内心の安息と外心の寧靜とを生じ、之よりして喜びを感ずればなり。惡に居るものには平和あらず、萬事その意のままに成るときは、彼等のうちに安息あり、寧靜あり、歡喜あるに似たれども、そはたゞ外的にして内的ならず、その心の裡には冤仇、憎惡、報怨、殘忍など云へる多くの惡念常に燃えをるが故に、おのれを喜ばざる者を見るときは、其心直ちに此等の情態中に入りて、驅けめぐり、もし別に恐怖の念の之を遏むることなくば、惡念は必ず一時に破裂すべし。故に彼等の歡喜なるものは狂癡の裡に住すとなすべし、善に居るものゝ歡喜に至りては證覺の中に住めり、其差異は天界と地獄との如し。

○天界と人類との和合のこと。

二百九十一。萬善は神より來りて人間よりせず、故に何人も、如何なる善ありとも、之を己れに歸すべからざるは、教會の知る處なり、而して惡の惡魔より來ることも亦其知る所なり。故に教會の教説に従ひて説く者は云はく、凡そ善行あるもの、及びその言ふ所、説く所敬虔の情に充てるものは、神に導かるゝものなれど、惡を行ひ、不敬を言ふものは、然らずと。是等の事は、人と天との和合あり、

又地獄との和合あらざれば起り來らざる處にして、而して此和合は人の意性と智性との上に生ずるものならざるべからず、そは人の其身を動かさし、其口にて物言ふは、意と智とに由ればなり。今この和合の何たるかを述べべし。

二百九十二。われらの身には、各つきそへる善靈と凶靈とあり、この善靈によりて、われらは天界と和合し、凶靈によりて地獄と和合す。是等の精靈は天界と地獄界との中間に位せる精靈界にあり。こは後來殊に説く所あるべし。是等の精靈、人間に來るときは、先づ其記憶中に入り、而して後其想念中に入るものとす、凶靈は記憶及び想念中にある惡しき事物の間に入り、善靈は善き事物の裡に入り來る。されど自らは其人間と相俱なることを少しも知らず、しかも彼等人間と俱るときは、すべて其人の記憶と想念とを以てわが所有と信せり。又彼等は人間を見ることなし、そは吾が太陽界にあるものは、彼等が視覺の對境とならざればなり。

主は精靈をして其人間と相伴へることを知らざらしめんため、其心を用ひ給ふこと頗る深し、何となれば、彼等若し之を知らむには、人間と相語ることあるべく、而して凶靈は彼を滅ぼさんとすべければなり、蓋し凶靈は地獄界と和合せるものなるが故に、只一圖に人間を滅ぼさんと願ふの外、他事あらず、而して凶靈は常に人の心靈、即ち其の信と愛とのみならず、其肉體をも舉げて滅ぼさんと願ふ也。されど彼等若し人間と相言ふことなくば、此の如きことあらず、彼等は此時其思ふ所、其相互

に語る所の、果して人間より出で来るものなるや否やを知らざるなり。何となれば彼等の相互に物言ふはその實人間より出来る所なれども、彼等はこれを以て自分の裡よりするものなりと信せり。而して何人も己れに屬する所を重んじ、且つ之を愛するが故に、精靈は自ら之を知らざれど、人間を愛し且つ重んぜざるを得ざるなり。人間と精靈との間にこの和合あることは、わが多年不斷の経験によりて充分に知悉する所にして、われは之より確實なるものあるを知らず。

二百九十三。地獄界と交通せる精靈も亦人間につき添へり、そは人間の生るゝや直ちにあらゆる惡の裡に陥ればなり、故に人間當初の生涯は全く是等精靈の手裡にありと云ふべし。されば人間にてもしおのれと相似たる精靈の、これにつき添ふことあらざれば、彼等は活くるを得ず、又諸惡を離れて、正に歸るを得ざるなり。人間が凶靈によりておのれの生命を繋ぎ得ると同時に、善靈によりて之より脱離するは是の事由に基けり。而して人間は又此兩者の徳によりて、平衡の情態を保持し、此の故に自由の意志あり、以て惡を去りて善に就くを得べし、又その心の上に善を植ふ付くるを得べし、人間若し自由の情態にあらざれば、このこと決してあり得べからず。されど一方には地獄界より來れる精靈の活動するあり、他方には天界より來れる精靈の活動するありて、而して人間はこれら兩者の中間にありて、兩個の壓力の間に挟まるにあらざれば、此の如き自由あらざるべきなり。われ又次の如く示されたり、曰く、人にして、其遺傳よりせる所、從ひて自我に屬せるところを分有するが故

に、その生命あるものとせば、これら有する限り、人は惡に在るを以て其生命となさざるべからず。而して又人に自由なきときは生命あることを得ず。又善を以て人に強ゆるを得ず、強いらるゝものは内に止まらず、但自由に攝受せる善のみ人の意志の上に根を下して、さながら己れのものゝ如くなるべし、是を以て人は地獄界と天界とに涉りて兩つながら交通ありと。

二百九十四。天界と善靈との交通とは如何なるものなるか、地獄界と凶靈との交通とは如何なるものなるか、從ひて人間と天界及び地獄との和合とは如何なるものなるか、是れわが今説かんとする所なり。精靈界に在る一切の精靈は、天界又は地獄界との交通を有せり、即ち凶靈は地獄界と相通じ、善靈は天界と相通せり。天界の諸團體に分るゝ如く、地獄界も亦諸團體に分れ、各精靈は何れかの團體に屬し、それよりの内流によりてその存在を繼續し、又かくして其の團體と行動を一にするものとす。而して人間と精靈との間に和合あるが故に、人間は亦天界或は地獄界と和合す、即ち彼が情動又は愛の上より見て、其所屬せる團體と和合す。何となれば天界の諸團體は、善と眞とに對する情動如何によりて、各區分せられ、地獄界の諸團體は惡しきと偽りとに對する情動の如何によりて相分るればなり。天界の諸團體に關しては既に述べたる所なり（四一より四五、及び一四八より一五一）。

二百九十五。人間に付き添へる精靈は、情動、即ち愛の上より見て、人間とその性質を同じふせり。善靈は主の人間に付き添はし給ふ所なれども、凶靈は人間の自ら招く所なり。而して人間と共なれる

精靈は、人間の情動の轉變につれて亦轉變するものにして、赤子の時には赤子の精靈之に伴ひ、幼時には幼時の精靈あり、青年時及成人期には亦その時期に伴へる精靈あり、老年に及ぶるときも亦然り。即ち赤子の時代には無垢の情態に在れる精靈之と共なり、従ひて此精靈は無垢の天界、即ち最奥、第三の天界と交通す。青年時及び成人期の精靈は眞と善との情動に在り、隨ひて智恵に在り、第二、中間の天界と交通す。老時の精靈は證覺及無垢に在り、最奥、第三の天界と交通す、されど此の精靈は唯歸正し、復活し得べき人間にのみ相伴ふものにして、主の與へ給ふ所なり。歸正、復活し難きものに至りては、然らず。善靈は出來得る限り人間をして惡を離れしめんがため彼等に伴へども、彼等と直接に和合せるものは、地獄界と交通せる凶靈なり、彼等はかくして己れと相似たる精靈に伴はれをれり。彼等若し自己を愛し、利益を愛し、報冤を愛し、姦淫を愛せば、彼等は亦是種の惡念に定めたる精靈と俱なり、此の如き精靈は實に是等の惡しき情動中にその住處を定むるものと云ひ得べし。人もし善靈によりて惡を制し得ざるときは、是等の凶靈の煽動する所となるべく、而して此情動の所主となるに比例して、凶靈は此人にすがりて退かざるべし。かくて惡人は地獄界と和合し、善人は天界と和合す。

二百九十六。人間は天界の形式の外に在るが故に主の人間を統制し給ふは精靈を経て也、何となれば人は地獄界よりする諸惡の間に生れ出で、全く神的順序に背ける情態に在ればなり。故に彼はまた順序の裡に復歸せざるべからざる要あり、而して此復歸は間接に精靈を経ざれば成り難し、されど人間にして始めより天界の順序に従へる諸善の中に生れ出でたらんには、此の如き要あらず、何となれば此場合には人は精靈を経て主の統制し給ふ所とならず、順序そのものに由り、隨ひて一般の内流によりて統制せらるればなり。人間は其想念及び意志よりして其行動に發する諸事物、即ちその言語と動作とに關しては、此内流の統制する所となる、何となれば此等は自然の順序に従ひて流るゝものにして、人間に伴へる精靈は此の如きものを有せざればなり。動物も亦精靈界よりする一般の内流の統制する所とす、蓋し彼等の生活は本來の順序中にあるものにして、彼等は理性を有せざるにより、之を乖戻し、之を破毀するを得ざるなり。人間と動物との區別の何たるかは既に見たる所なり(三九)。

二百九十七。天界と人間種族との和合につきて尙ほ知らざるべからざる事は、主自ら天界の順序に従ひて各人の内底並びに終極點中の諸事物に流れ入り給ふこと是なり。主は人をして天界を享くべき準備をなさしめ、彼が終極點にある事物を其内底よりして統制し給ひ、又これと同時にその内底にある諸事物を終極點よりして統制し給ふ、かくして人はすべての事に就きて主と相繋がると謂ふべし。主よりのこの内流を直接内流と云ふ、かの精靈を経て來る所の内流は之を間接内流と云ひ、その繼在は前者によるものとす。主自らよりする直接内流は、主の神的[。]人格より發して人間の意性中に入り、これより其智性に入り、かくてその善に入り、その善を経てその眞に入る、即ちその愛に入ると云ふ

も同じ、此愛を経て後その信に入る、而して此次第は顛倒すべからず、まして此内流の愛なき信に入り、又善なき真に入り、又意よりせざる智性に入るが如きはこれあらず。此神の内内は永遠にして断ゆることなく、善なるものは善にをりて之を受くれども、悪しき者は然らず、何となれば彼等は或は之を拒み、或は之を塞ぎ、或は之を曲ぐればなり。故に彼等の生涯は正じからず、これを靈的意義における死と云ふ。

二百九十八。人間に伴へる精靈は、その天界と和合せるものと、地獄界と和合せるものを問はず、彼等の記憶、及び之に随従せる想念よりして人間に流れ入ることあらず、何となれば彼等若し自己の想念よりして人間に流れ入らんに、人間は彼等に所屬せる事物を以て、わが所屬と信する外なかるべければなり、こは既に見たる所なり(二五六)。されど善と真との愛よりする情動は天界より來り、彼等を経て人間に流れ入り、悪と偽りとの愛よりする情動は地獄界より來り、彼等を経て人間に流れ入る。故に人間の情動にして、その流れ入り來る所のものと相一致せんには、彼はその一致する限り之を其想中に攝受すべし、何となれば人間の内的想念は全く其情動即ち愛と相適應するものなればなり、されどかゝる一致なきときは、この攝受あらず知とるべし。かくの如くにして想念は精靈を経て人間に流れ入ることなく、只善に對する情動、及び惡に對する情動のみ彼等をへて流れ來るが故に、人間に選擇の力あるや明かけし、蓋し彼は自由を有すればなり、かくて彼は亦其想念の上におい

て、或は善を受け、或は惡を拒み得べし、何となれば彼は聖言によりて善の何たり、惡の何たるかを知ればなり。情動によりて想念の裡に受け納むるものは、人間、之を攝入すれども、情動によらずして想念中に入り來んとするものは、彼のために攝入する所とならず。是によりて人間の上に天界より來る善の内流と、地獄界より來る惡の内流との何たるかを會し得べし。

二百九十九。われは又許を受けて、人間の掛慮、悲傷、及び内心の悲苦—之を鬱憂と云ふ—は如何にして起るものなるかを知り得たり。尙第一情態にをりて、未だ地獄と和合せざる精靈は、(此事につきては、後に精靈界を説くときに更に記すべし)物の不消化にして腐敗せるもの、たとへば胃中にありて腐爛せる食物の如きを好むが故に、もし人身中に此の如きものあれば、彼の精靈此處に居るを喜び彼等の惡しき情動に任せて相互に物言ふ。彼等の言語より來る情動、此處より起り始めて人のうちに流れ入る、此情動もし其人自らの情動に逆へば、此に悲苦あり、鬱憂あり、掛慮あり、されど此情動もし互に一致するときは、此に喜意あり、快適あり、是等の精靈は胃臟の附近、或は左、或は右、或は下、或は上にあり、又近く現はるゝことあり、離れて現はるゝことありて、其現前一様ならず、こは彼等のをる所の情動時に相同じからざればなり。心の掛慮はかくの如くにして起るものなることは、わが多くの經驗によりて、之を知り、之を慥むるを許されたる所なり。何となればわれは是等の精靈を見、之を聞き、これより起る掛慮を感じ、且つこれと物言ひたればなり。而してこれ等の

精靈逐ひ退けらるゝとき、掛慮止み、その歸り來るに及びて、掛慮また舊に復するのみならず、その或は近づき、或は遠ざかるに従ひて、心の掛慮亦或はまし、或は減するを知覺したればなり。是によりてわれは良心の何たるを知らざる者が、（こは彼等實に何等の良心をも有せざるが故なり、）何故に其心痛を胃臓の邊に歸せんとするかを明にせり。

三百。天界と人間との和合は、人間と人間との和合の如くならずして、人の心の内分との和合なれば、かくて又その人の靈的、即ち内的人格との和合なり。されど此に亦相應によりて、人間の自然的、即ち外的人格と和合することあり、此和合につきては、後章、天界と人間とが、聖言によりて和合することを説くとき、更に述ぶる所あるべし。

三百一。天界と人類との和合、及び人類と天界との和合は、兩々相倚りて繼存するものなることは、亦後章にて述ぶべし。

三百二。われは天界と人類との和合につきて天人と語れるとき、われ云ふ、教會の人は實に萬善は神よりし、天人は人に伴へることを口にすれども、天人と人間との和合を眞實に信するものは稀なり、まして天人は彼が想念及び情動の中に在りと云ふことにおいてをやと。天人之に答へて曰ふ、われらは世間に斯の如き信仰あり、又如斯き言句の尙あるを知れり、而して殊に怪しむべきは、教會の中に此の如きことあること是也。教會には聖言あり、聖言は彼等に天界の事、天界の人間に和合すること

につきて教ふ、而して此和合の性質たるや、精靈もし人間と相俱なることなくば、人間は至小の事物をも思惟する能はず、又何等の靈的生涯をも營む能はざるなりと。天人又曰ふ、何故に此事に關して人間は知る所なきかと云ふに、彼は生命の原始實在と相連結することなく、たゞおのれによりてのみ生活し得るものと信じ、また此連結は諸天界に縁りて存するものなることを知らざればなり、而かも此連結にして一たび絶えんには、人間は直ちに斃れて死せざるを得ず。もし人にして事實そのまゝに、萬善は主より來り、衆惡は地獄より來ることを信せんには、彼は己れにある善を以ておのれの功となさざるべく、又おのが身の上に惡を招くことなかるべし。何となればかくして彼は其思ふ所、その爲す所に善なるものあれば、之を主に回向せんとすべく、又その身に衆惡の流れ入らんとすることあれば、之を其由て來る所の地獄界に棄去るべければなり。されど人は天界及び地獄界より流れ入るものあるを信せず、かくて一切その思ふ所、及び志す所を以て、悉く己れに有り、おのれよりすとなすが故に、惡は之を己れに攝入し、而して善の己れに流れ入るものは、おのが功となして之を汚濁するに至るものとす。

○聖言によりて天界の人間と和合すること。

三百三。内的道理によりて思索するものは、萬物は諸の介在者によりて元始と連結し、この連結

天界の地獄

以外に出づるものは、すべて消滅し去ることを見るべし。何となれば彼等にして一たび思を此に運らすときは、何ものも自己によりて繼在すること能はず、必ず自己以前に存在せるものによりて繼在す、即ち萬物は元始によりて繼在することを知るべければなり。而して此の自己以前に存在するものとの連結は、猶ほ結果と有力因との連結に似たり、何となれば有力因を其結果より離し去れば、結果は消散して無有に歸すべければなり。識者は此の如く思索せるが故に、彼等は次の道理を見たり、而して言へり、曰く、繼在とは永續不斷の存在にして、萬物は元始によりて繼在す、即ち萬物は元始によりて存在するが故に、其存在は永續にして斷ゆることあらずと。されど如何にして萬物は各自己以前に存在するものと連結し、それより進みて一切萬物の源たる元始と連結するかは數言の盡す所にあらず、蓋し此の連結は不同にして多様なるによる。故にわれはたゞ概説して曰ふべし、自然界と靈界との間に連結あり、故に自然界の萬物と靈界の萬物との間に相應あり(一〇三より一一五)、又人間の萬事と天界の萬事との間に連結あり、これよりして亦その間に相應ありと。この事につきては上をよ。(八七より一〇二)

三百四。人間の創造せらるゝや、彼と主との間には連結あり、和合あれども、天界の天人との間には只伴侶の關係あるのみ。かく人間と天人との間に只伴侶の關係のみありて、和合なきは、人間の創造せらるゝや、その内分に於ては、天人と相同じきによる。内分とは心なり、即ち人間には天人と同意性あり、天人と同じき智性あり。故に人若し此世にあるとき、天則に従ひて生息せば、彼は死後天人となり、天人的證覺を得べし。故に人の天界と和合すと云ふは、主との和合、及び天人との伴侶を言へるものと知るべし。そは天界の天界たるは、天人の本分之をなすにあらずして、主の神格によればなり。天界は主の神格によりて成ることは既に見たる所とす。(七より一二)されど人は又天人が有せざる所を有せり、彼はその内分より見て靈界にをるのみならず、之と同時に其外分より見て彼は自然界にをれり。自然界にある外分とは、人の自然的、即ち外的記憶に屬するもの、想念と之よりする想像とに關する一切の事物を曰ふ、概して言へば、人間の智識及び學問、之より來る悅樂及快感の、すべて世間的風味を帶ぶるもの、又肉體の感官に屬する諸快感、及び感覺、言語、動作を併せて、すべて之を人の外分となす。是等は皆主より來る神的内流が止まる所の終極點における諸事物なり、何となれば神的内流は中間に止まらずして、其究極の處にまで進行すればなり。是によりて知るべし、神的順序の究極する處は人間に在ることを、又人間はその終極點なるが故に、又その根底となり、基礎となることを。主よりの神的内流は、此に言へる如く、中間に止まらずして終極點に達するが故に、又内流が通過する中間とは天人の天界にして、その究極する處は人間に存するが故に、又此連結中に入らざるものは何ものも存在するを得ざるが故に、天界の人類と連結し、和合するや、兩々相倚りて繼在するものなるを明め得べし、即ち天界を離れたる人類は鈎なき鎖の如く、又人類を

離れたる天界は礎なき家の如くなるを明め得べし。

三百五。されど人は其内分を天界に背けて、天界との連結を断じ、却て之を世間と自己とに向け、自己を愛し、世間を愛するにより、従ひて彼は其身を退けて、復た天界の根底となり、基礎となるを得ざらしめたるにより、主はこゝに一個の媒介を設けて、是を天界の根底及び基礎となし、又之によりて天界をして人と和合する所以とならしめ給へり、此媒介を聖言となす。されど聖言の如何にして此の如き媒介となるかは「天道密意」中處々に説けり、之を抜萃して小冊子となせるを「黙示録に記せる白馬につきて」と云ふ、又「新しきエルサレム及びその天的教説」と云へる書の附録にも此事を言へり。

三百六。われ之を天界より聞けり、曰く、太古の民は其内分、天界に向へるより、直接の黙示を受け、之がため主は當時人類と和合し給へりと。されど其後はまた此の如き直接の黙示なく、たゞ相應によれる間接の黙示あるのみなり。何となれば當時一切の禮拜式は相應より成りて、其頃の教會はこれがために表像的教會と呼ばれたればなり。當時の人は相應及び表像の何たるかを熟知したり、即ち彼等は地上の萬物は天界及び教會に在る靈的萬物に相應することを知れり、此に相應と云ふは表像と同じ義なり。故に彼等が行へる禮拜式の外形をなせる自然的事物は、すべて彼等の想念をして靈的ならしむる所以にして、従ひて天人と合一する所以のものなりき。其後、相應及び表像に關する知識亡

ぶるに至りて、聖言は書されぬ、而して聖言の中にある一切の語句と其意義とはみな相應の理を含めるが故に、このうちに靈的即ち内的意義の潜めるありて、天人は此意義にをれり。是故に人は聖言を讀むに當り、文字の義、又は外的意義によりて之を知了すれども、天人は内的即ち靈的意義によりて之を知了す、そは天人の想念はすべて靈的なれども、人間の想念は自然的なるによる。而して此等兩個の想念は實に甚しく相違する如く見ゆれども、其相應する點より察すれば、兩者一なりと云ふべし。故に曰ふ、人間自ら天界より退きて、その連鎖を破りし以來、主は聖言の媒介によりて、天界と人間とを和合せしむるの途を開き給ひたりと。

三百七。天界が聖言によりて人間と和合する様子は、之より引用せる言句によりて説明すべし。黙示録中に「新しきエルサレム」を此く記せり、曰く「われ新しき天と、新しき地とを見たり、先きの天と先きの地は既に過ぎ去れり。われ聖き城なる、新しきエルサレム、神の所を出で、天より降るを見る、城は四方にして長さと闊と同じ、天人竿を以て城を測りしに一萬二千ファートルングあり、長さ、闊、高さ皆相等し。又其石垣を測りしに、人の度に従へば、百四十四キユビットあり、人の度は天人のと同じ。石垣は碧玉にて築き、城は清らかなる玻璃の如き、純金にて造り、城の石垣の礎は各様の寶石にて飾れり。十二の門は十二の眞珠なり、城の衛は澄徹る玻璃の如き純金なり」と。(第二十章、一、二、一六より一九、二一。)此等の語句を讀む人は、只之を文字上の意義によりて會せり、即

ち目に見ゆる天は、地と共に滅びて、新しき天現れ、而してエルサレムの聖城は、新しき地に下り來るべく、すべて其城の量度は此に記せる如くなるべしと思へり。されど人間に伴へる天人の之を會するは、全くこれと異れり、そは彼等、人間の自然的に會する所を、靈的に會すればなり、彼等の會する所によれば、新しき天と新しき地とは、新しき教會のことにして、神の所より出で、天を下り來るエルサレム城とは、主が示し給へる天界の教説なり。其長さ、闊、高さ、相等しくして各一萬二千フアローングと云ふは、此教説中の諸善、諸眞を合はせて言へるなり。城の石垣とは此教説を守護せる諸眞なり。石垣を測るに、人の度、又は天人の度に從へば、百四十四キユピットありとは、守護を主とせる諸眞を悉く擧げたるものにて、又其性相を言へるなり。其眞珠より成れる十二の門とは、能導の眞を言へり、而して眞珠そのものも亦此の如き眞を表はす。寶石より成れる石垣の礎とは、かの説教が由りて立つところの諸知識を云へる也。城及び其衝を造れる清く透れる玻璃に似たる黄金とは、愛の徳を云へり、教説と其諸眞とは愛によりて透明となるものとす。天人が此等の事物を知了すること此の如くなるが故に、人間の知了する所と同じからざる也。人間の自然的概念は天人に入りて靈的概念に轉化し、聖言中の文字、例へば新しき天、新しき地、新しきエルサレムの城、その石垣、石垣の礎、及び其の丈量と云ふ如きをば、天人は文字の意義によりて會得することを知らざるなり。されど天人の想念と人間のとは、相應の理によりて、兩者同一なるものとす、猶ほ甲者の口にて言ふ所

を、乙者之を耳に聽きて言者の語句と聽者の之を會得するときの如く、聽者は必ずしも其語句に留意せざれども、其意義は則ち之を會得するなり。此の如くにして天界の聖言によりて人間と和合する方を明むべし。今又聖言中より一例を引かむに、以賽亞書に云ふ「その日エジプトよりアッシリヤに通ふ大路ありて、アッシリヤ人はエジプトに來たり、エジプト人はアッシリヤに行き、エジプト人はアッシリヤに事ふべし。其日イスラエルはエジプトとアッシリヤとを共にし、三つ相並び地のうへにて、福祉を享くるものとなるべし、萬軍のエホバ之を祝して言ひ給はく、わが民なるエジプト、わが手の工なるアッシリヤ、わが産業なるイスラエルは福ひなるかな」と。(第十九章、二三より二五。)是等の文句を讀むで、人間は如何に思索し、天人は如何に思索するかを明らめんとせば、聖言の文字的意義と其内的意義とを見るべし。文字の意義によりて、人間の解するところによれば、エジプト人とアッシリヤ人とは神に歸向して、神は之を容れ給ひ、彼等はまた遂にイスラエルの人民と一になるべしとなり。されど天人は之を内的意義によりて解して云ふ、此處には靈的教會に屬する人のことを、内的意義によりて記せり、即ちイスラエル人とはその靈的方面を云ひ、エジプト人とはその自然的方面を云ひ、アッシリヤ人とは此等兩者の中間にある理性的方面を云へるなりと。されど文字的意義と靈的意義とは、相應によりて一なるが故に、天人は此の如く靈的に思惟し、人間はかの如く自然的に思惟するとき、此の兩者は、殆ど心靈と肉體との如くに、相和合するものとす、また聖言の内的意義

はその心霊にして、その文字的意義はその肉體なり。聖言はその全般を通じて此の如くならずと云ふことなし、故に聖言は天界が人間と和合する所以の媒介にして、その文字的意義はこれがために一個の根底となり、基礎となることを明むべし。

三百八。聖言の媒介に由りて、天界はまた教會以外、聖言あらざる處に在るものと和合す、何となれば主の教會は普遍にして、苟くも神格を承認し、仁恵を躬行するものは、皆之と其道を同じうするものなればなり。此の如き人は亦其後天人に誨へられて、諸の神眞を受く。尙此事に關しては、則に異教人のことを説く處にて詳述すべし。主の眼より見れば、地上における全教會は、天界の如く、亦一個の人間に似たり（五九より七二）。されど聖言の現存する處、此聖言によりて主を知れる教會は、この人間の心臓と肺臓とに該當せり、全身中の諸臟腑及び諸肢體は、すべて心臓と肺臓より出で來る様々の連鎖によりて、其命脈を繋ぐものなることは、人の皆知る所なるが、聖言の現存せる教會以外に居りて、その生存を全ふせる人類も、亦此の如くにして其身を保ち、かの人間の諸肢體を構成するものとす。天界が聖言によりて遠隔の人と和合することは、また中心より四面に擴がり出づる光に譬ふべし、そは聖言の中には神的光明ありて、主は天界と共に此裡にあり、而して此く主の現在し給ふによりて遠隔の人も亦この光明中に入ればなり。もし聖言ならむには、此の如くならざるべし。是の理は前に天界の形式に關して言へる所を見れば更に明かなるべし、そこには一切の會同と交

通とは此形式によりて繼存するものなることを述べおきたり。靈的光明に在る者は此密意を會得すれども自然的光明に在る者は之を會得せず。何となれば靈的光明に在る者は、自然的光明にのみ居る者の見ざる所を見、又は僅に一個朦朧たる物體として見る所の無數の事物をも分明に看得すればなり。

三百九。此の如き聖言もし此地上に付與せられざりしならむには、此地上の人は天界より分離せるなるべく、而して人もし天界より分離せんには、彼は遂に理性的ならざりしなるべし。何となれば人の理性は天界の光の内流によりて存在するものなればなり。又此地上の人は直接の默示を受け、これによりて神眞の上に教を受くること、他の地球上の住民の如くなる能はざる所以は、（他の地球上における住民につきては、別に「吾太陽系中の諸地球及び其住民のこと」と云ふ小冊子に記述せり、）此地球上の人は、他の地上の人よりも一層世間的物事、從ひて外的物事の裡にあり、而して默示を受くるは内的物事なればなり、もし外的物事にして之を受くることあらんも、眞理はこれによりて會得せられざるものとす。此地上にある人の性格、此の如くなることは、教會内の人を見て明かなるべし、彼等は聖言によりて天界と地獄との事を知り、又死後の生命の事を知れども、其心には尙之を否めり、而して此部類の人のうちには、學識他に秀でたるものあるが故に、彼等は他に勝れて證覺ありと思はるゝなるべし。

三百十。われ嘗て聖言につきて天人と物言へることあり、曰く、ある人は其文體の單純なるを見て

之を輕んじ、其内的意義の如きに至りては少しも知る所あらず、是の故にその裡に此の如き高妙なる證覺の藏れをることを信するものなすと。天人曰ふ、聖言の文體は文字上の意義よりすれば單純と見ゆれども、その精妙なるは物の比倫に堪へたるなし、何となれば神的證覺は、それが全般の意義のうちに包藏せらるゝのみならず、又其各語句の間にも包藏せられて、天界に耀きわたればなりと。その意に云はく、神的證覺は神眞なるが故に、天界の光明なり、それは神眞は天界に耀きわたればなり（二三二）。天人又曰く、此の如き聖言なくしては、わが地上の人は天界より光明を享くることなかるべく、又天界は彼等と和合することあらざるべし。何となれば此和合は天界の光明、人間に現存する度に比例して存し、従ひて神眞は亦聖言によりて彼に現はるべければなり。地上の人、この和合は聖言の自然的意義に相應せる靈的意義によりて行はるゝことを知らざるは、何故なりと云ふに、それは彼等は天人の靈的想念及び言語の何たるを知らず、又人間の自然的想念と言語と相異なることを知らざるに由る。されど之を知るにあらざれば、人は内的意義の何たるかを少しも知る能はず、また和合は之によりて成ることを知る能はずと。天人又曰ふ、人若し聖言を讀むに當りて、此の如き意義あることを知り、此知識を本として思索することあらんには、彼は内的證覺の中に入るを得て、天界との和合一層周密なるに至るべし、それは彼の概念はかくして天人のと相似たるものとなるべければなり。

○天界と地獄とは人類よりなること。

三百十一。基督教國にては天界と地獄とは人類よりなることを知る人なし、何となれば彼等は天人は始めより天人として創造せられ、こゝに天界の起原を開けりと信すればなり、而して又惡魔、即ちサタンなるものはもごは光明の天人なりしも、神の旨に逆ひたるより、其一類と共に天界を放たれ此に地獄界起れりと信すればなり。基督教國に此の如き所信ありと聞きて、天人は愕然たりき、殊に天界の事を説くは、教會における教説の第一義なるに拘らず、之を知るものあらずと云ふを聞きて、天人は愕然たりき。されど此の如き無知行はるゝが故に、主は今や天界及び地獄に關して數多の事物を人間に示さんと思ひ給へり、而して教會の末期に近づけるため、日に重なり行かんとする暗黒も此示現によりて、出來得る限り消散せられんとするを見て、天人は其心竊かに之を喜べり。此理由により、天人はわれをして其口を藉りて下の如く告白せんことを願へり、曰く、全天界を通じて一個の天人の始めより天人として造られたるはあらず、又地獄界に一個の惡魔の始めは光明の天人として作られ、その後、事ありて地獄に投げ棄てられたるはあらず、天界と地獄とにおける一切のものは人類より來らずと云ふことなく、天界には世間にあるとき天界の愛と信とに居れるもの住し、地獄には地獄の愛と信とに居れるもの住す、而して惡魔と呼び、サタンと呼ぶは、地獄の全般に與へられたる名なり。

後方にある地獄には凶鬼住めり、之を惡魔と云ひ、前方にある地獄には凶靈住めり、之をサタンと云ふ。此等兩種の地獄界の何たるかは後章に説くべし、天人云ふ、基督教國が天界と地獄との住民に關して、かくの如き妄想を抱くに至れるは、聖言中のさせる言句を解するに、只文字上の意義のみを以てして、之を明にし、之を開くに聖言中にある至純の教説を以てせざりしによるものとす。されど聖言を解するに當りて、只其文字上の意義の外、至純の教説より來る一道の光明を以て之を照すことなくば、心様々に擾れて、無明、異端、及び譸詭の淵に沈まざれば止まず。

三百十二。教會の人に此妄信ある今一の理由は、最後の審判の日にあらざれば、何人も天界或は地獄に行かずと信するによる。此審判の日につきては、彼以爲らく、其時はすべて目に見ゆるもの皆滅びて、新しきもの生れ來り、心靈はその肉體に歸るべく、而して人は此合體によりてまた人として生息するならむと。此所信中には又一個の所信あり、曰く天人は始めより天人として創造せられたるなりと、何となれば、何人も世界の終の日まで地獄或は天界に出で來ることなしと信する者は、天界と地獄とは人類よりなることを信するを得ざればなり。されど事實は彼が所信の如くならず、このことを彼に知らせんため、われは許を得て數年の間、天人の伍に入るを得、又地獄に居るものと相語るを得たり、時には朝より夕に至りて絶ゆることなかりき、かくてわれは天界及び地獄の事を知るに至りぬ。わが此く實驗するを許されたるは、教會の人をしてまた永くその妄信に安んずることなからし

めんがためなり。妄信とは審判の日における復活、此日に至るまでの靈魂の状態、及び天人と惡魔とに關する妄信を云ふなり。此の信仰は偽りなるものゝ上に立つが故に、其裡に暗黒あり、自家の智慧のみによりて、これらのことを思索するものは、これによりて疑惑の淵に沈み、遂には不信の徒となるべし。何となれば彼等その心のうちに曰はむ、天は此の如く大なり、星辰は此の如く多し、日と月と、みな之を併せて如何で亡滅し、消散することあらむや。又諸星は地球よりも大なりと云ふに、如何にしてかかれら天より地に落ち來るとすべき。又虫に食はれ、腐爛に亡び、風塵に散らされたる肉體、如何にしてまた之を心靈の上に集めんとするか、而して心靈は此間何處にありとせんか、又心靈にして一たび肉體に在りし時の知覺を離れなば、何を以て心靈となすべきか。尙此外之に似たる疑問少しとせざれども、皆會得すべからざるが故に、皆亦信すべからずと。此の如くにして多くの人は之がため死後に於ける心靈の生命に關する信仰、天界と地獄とに對する信仰、又從ひて、教會の信條における其他の諸事物に對する信仰を失ふに至る。此の如く信仰を失ふに至れる事實は、下の如く云ふものあるを見て明かなるべし、曰く、誰か天界より來りて、吾等に此事果して然るを告げたるか、地獄とは何か、此の如きもの果してありや、人は火にて永遠に苦しめらるべしとは何か、審判の日とは何か、我等は空しく此日を待ちて既に數百世をへたるにあらざるかと。彼等は尙此外多くの疑問を抱けるが、そのうちには皆不信の意を含めり。

此の如く信するものは、世間智に基きて、學殖あり、博聞なりと稱せらるゝ人々のうちに多く、これがために直心純信の人をも擾亂し、誘惑して、神、天界、永久の命、及び其他之に屬せる諸事項に關し、彼等を地獄に等しき暗黒の裡に導き去らんも圖られず、是の故に主はわが心靈の内覺を開き給ひ、かくしてわれを許して、其肉體にある時知れる一切の人々と死後相語るを得せしめ給へり。此會談は其人によりて或は數日に亘り、或は數月、或は數年の長きにも及べり、われはまた此外多くの人々と相語り、その數、百千人の上に出でたりと言ふも尙少なきを覺ゆべく、その中には天界に居る者も多く、また地獄に居る者も少なからざりき。われは又死後二日を経たる人々と相語れることあり、われ彼等に告げて、葬儀今正に行はれ、埋葬の準備成れりと云ひしに、彼等答へて、われらが世にありしときわれらのために、肉體となり、またその諸官能となりてわれらの用をなせるものを、われらが今棄て去りたるは、當然の事なりと云へり、彼等またわれに請ひて世に告げしめて曰ふ、彼等は死せず、尙生けり、而して其人間たるは依然として昔時に異ならず、彼等は只甲世界より乙世界に移れるまでなり、また何等の失ふ所あるを知らず、そは彼等是一個の形體とそれに屬せる諸感官とを有すること以前の如くなれば也、又その智性と意性とにおけるも、更に舊時に異れるを見ず、想念、情動、感覺、願望、皆亦その嘗て世に在りしときと相似せずと云ふことなければなりと。

死後尙未だ多くの日數を経ざるものは、自ら其始めの如く猶活ける人間なること、生前と相似たる

情態に在るを見るや、(何となれば死後における最初の生活状態は、世に居たる時の如くにして、その是れより或は天界に行き、或は地獄に行くは、多少の轉變を経たる後なればなり、)其尙活けるを喜ぶの情新なるもの多し、而して彼等曰ふ、「かくの如くなるべしとは、われらの信せざる所なりき」と。彼等は死後の生活状態に關して、嘗て彼の如く不知にして盲目なりしを見て、驚くこと一方ならず、特に教會の人は、世上一切の人に勝れて、是等の事物に關して明白なる思想を有すべきに、却て此く不知にして盲目ならむとは、これ彼等の深く驚ける所なり。是に於てか、彼等始めてその何が故に不知にして盲目なりしかを悟れり、そは彼等世間及び肉體に關する外的事物の爲に、其心を用ひ、其心を勞するの甚しき、天界の光明を仰ぎ見ること能はず、又教會の説教以外に出で、其事理を洞觀する能はざりしが故なり。そは人もし今の世における如く、肉體的世間的物を愛する時は、それ以外に出で、見る所あらむと思ふとも、只暗黒のみありて、その裡より流れ入り來るべければなり。

三百十三。基督教より來る學者の多數は、其死後尙一箇の形體中に在りて、衣服を着け、屋裡にあること、猶ほ世間の時のごときを見て愕然たらざるはなし、而して彼等はその嘗て死後の生命、靈魂、精靈、天界、地獄などのことにつき思索せる處を想ひ起して、自ら慚愧して措く所を知らざる也、曰く、われらが思索せる所は誠に痴なりき、信に純なるものが有する所の證覺は我等のに優ること數層なりきと。嘗て上述の如き概念を固執して動かさず、萬づの事物を自然の上のみ歸し去れる學

者ありき、此人檢校せらるるとき、われ之を見たるに、その内分は全く塞がり居たれども、其外分は開けをれるを以て、かれは天界を仰ぎ見ることを得ざりしも、世間と地獄とは彼の見得る所なりき。何となれば人はその内分の開くる限り、天界を望み得れども、若し其内分を閉ちて外分のみ開けをらむには、彼が望み見る所は只地獄あるのみなればなり。その故いかに云ふに、内分は天界の萬物を攝受するより成り、その外分は世間の萬物を攝受するより成るに由る、而して世間を受くると同時に天界をも受けざるものは、地獄を受くるものとす。

三百十四。天界は人類よりなることを益々明め得べき今一つの事實は、天人の心と人の心と相似たることにして、兩者は共に天界を受けん爲めに造られたるものなり。そは人の心は亦天人の心の如く、證覺を得るに足ればなり。されど人の心は世間にありて物質的形體のうちに居るを以て、天人の心における如き證覺は、之を得ること能はず、そは此形體の裡に在るときは、人間の靈的想念も亦自然的なるべければなり。されど人の心にして一旦其肉體との連結を離るるときは、此の如くならず、其思索は既に自然的桎梏を脱して靈界に入れば也。而して其思索一たび靈的となれば、自然の人間が嘗て不可解、不可説となしたる諸事物をも思索するを得て、遂に天人の如き證覺を有するに至るべし。故に知る、人間の内界をなせる、所謂の心靈なるものは、其實性において、一個の天人なることを（五七）、而して其物質的形體を離るゝに及びて、心靈は亦天人の如き人體的形式中に入ることを。（天人

は人體的形式の圓滿なる者なることにつきては、七三より七七を見よ。）されど若人間の内界にして、上に開けずして下のみ開くることあらんには、物質的形體を離れて後、彼は尙人體的形式を具ふるも、その恐るべき相を示すは、惡魔の如くなるべし、何となれば彼は仰いで天界を見る能はず、唯俯して地獄を望むのみなればなり。

三百十五。神の順序に就きて教を受けたるものは、何人と雖、人間の造られたるは天人とならむがためなることを解せざるはなかるべし。何となればこの順序の終極點をなせるは人間にして（三〇四）、天界及び天人の證覺よりするものは、此終極點に至りて始めて形態を具へ、此處にて刷新し、増殖すべければなり。神的順序は決して中途にして止まるものにあらず、また終極點に至ることなくして何物をも形成するものにあらず、何となればかくするときは神の順序は充足し、圓滿するを得ざるべければなり、故に神の順序は必ず終極點に達せざれば已まず、而してその此に達するや、このもの自ら形態の中に寓し、此形態より集め得たる方便によりて、自ら刷新し、自ら益々増殖するものとす。これを成すは即ち生殖作用なり。故に天界の養育園は此の終極點にありと謂ふべし。

三百十六。主の昇天は曾にその心靈につきて言ふべきのみならず、亦其肉體につきて言ふべき也、蓋し主の尙世間に在ませし時、彼はその人的性格の全分を擧げて光榮あるもの、即ち神的ならしめ給ひたればなり。主が父より得給ひたる靈魂は、その自性において、神格そのものにして、而してその

肉體は靈魂即ち父に像されるものなれるが故に、これ亦神的なり。是を以て主は何人とも異りて、その靈魂と肉體と共に昇天し給へり。こは諸弟子のため主の明かにし給へる所とす、即ち彼等主を見たる時、一個の精靈ならむと思へるにより、主は曰く、「わが手とわが足を看て我れ自らなるを知れ、われを摸でよ見よ、精靈は汝の吾あるを見る如くに肉と骨あらざるなり」と。(路加傳、第二十四章、三七より三九。)主は此文句によりて、其心靈において一個の人格なるのみならず、亦その肉體に於ても然ることを告げ給へるなり。

三百十七。人は死後尙生くること、又彼等が世間にて營める生涯の如何によりて、或は天界に行き、或は地獄界に行くものなることを世に知らせんため、われは死後における人間の状態につきて、多くの事物を知るに至れり、こは下に其序を追ひて精靈界の事を言ふとき記すべし。

○天界における異教徒、即ち教會外の人の事。

三百十八。普通人の説く所によれば、教會の外に生れて異教徒或は異邦人と呼ばれるものには、救済の道なし、何となれば彼等は道知らず、従ひて主を知らず。而して主を離れては別に救済の途なければなりと。されど主の仁愛は普遍にして、一人をもあまさざるが故に、異教徒と雖、亦これのみによりて救済せらるるものなることを知らむを要す、彼等の生れて實に人間たることは、教會内の者と異なることなく、但後者は其數において比較的少きのみ、而して前者の主を知らざるは、必ずしもその過にあらざるなり。何人と雖、苟も明徹せる道理によりて思索せんには、世上未だ嘗て地獄の爲にとて生れ出でたる者あらざるを見得べし、そは主は愛の本體にして、其愛は一切を救はむとの願なればなり。故に主は方便を設け、一切の人をして何かの宗教に歸依せしめ、これによりて神格と内的生涯とを認識せしめんとし給ふ。もし人各、其宗教上の信仰に従ひて生涯を營まんには、彼はその時神格の方位に向ひて進む者なるが故に、その生涯は内的なりと謂ふべし。かく神格に向ひて進む者は、それだけ世間に反くが故に、彼は世間を脱離し、従ひて世間的生涯、即外的生涯を脱離するものとす。

三百十九。異邦人も亦基督教民と同じく救はるることは、人は何によりて天界を成就するものなるかを會得する時、亦分明なるべし。何となれば天界は人のうちにあるものにして、人もし己が胸中に天界を有せば、天界またこゝに入り來るべければなり。人のうちにある天界とは、神格を是認して、之が導くまゝとなるを云ふ、そは各宗教の第一要義とする處は神格を是認するにあらずと云ふことなればなり。神格を是認せざる宗教は宗教にあらず、如何なる宗教と雖、禮拜に關する教誡を有し、これによりて如何に神格を禮拜すべきかを教へざるはなし、是れ其禮拜の神の意に稱ふものならんことを欲してなり。而して人若し之を其心に銘し、かくして之を志し、之を愛せば、それだけ彼は主の導く所となるものと謂ふべし。異邦人にして基督教民の如く有道の生涯を營むものあり、又之よりも

勝れたる生涯をなすもの多きは人の知る處なり。人の有道的生涯を送らんとする動機に二つあり、一は神のためにし、一は世上の人のためにする是なり。神のためにする有道的生涯を靈的生涯と云ふ。兩者は其外相を同じうすれども、其内相に至りては全く異なれり。神のために有道的生涯を營むものは、神の導くまゝなれども、世上の人の爲に有道的生涯を營むものは只自力を頼むもの也。一例を擧げて之を説明せんに、此に一人あり、宗教に背くが故に、随ひて神に背くが故に、敢て害を隣人に及ぼさずとせば、此人は靈的動機によりて悪を作さざる人也。されど若し或は法律を恐れ、或は名聲と體面と利益との損亡を恐れ、随ひて自己及び世間のための故に、害を他人に加ふることなしとせば、こは自然的動機によりて悪を作さざるなり。後者の生涯は自然的にして、前者のは靈的なりとすべし。有道的生涯を送るに靈的動機よりするものは、そのうちに天界を有すれども、只自然的動機よりするものは天界を有せず。その理如何と云ふに、天界は上より流れ來りて、人の内分を啓き、其内分よりして外分に流れ入れども、世間は之に反して下より流れ來りて、外分を啓けども内分は啓かざればなり。蓋し自然界より靈界に向ふ内流あらざれども、靈界より自然界に向ふはこれあり。故に若し世間を納るゝと同時に天界を享くることなくば、人の内分は啓けざる也。是によりて何人が能くそのうちに天界を有し、何人が此の如くなる能はざるを明らめ得べし。されど甲者のうちにある天界は必ずしも乙者の天界と同じからず、そは善に對する情動、随ひて眞に對する情動は、人によりて各々相

異ればなり。神の爲めの故に、善に對する情動あるものは、神眞を愛す、蓋し善と眞とは互に相愛して、和合せんことを願ふに由る。是の理を以て異教徒は、其の世にあるや、至純の眞理にあらざれども、尙愛の力によりて之を他生に享くるを得るものとす。

三百二十。異邦人中より來れる一箇の精靈あり、其世に在るや、彼が宗教上の信仰に従ひて、仁の徳を行じたり、かれ基督教徒の諸精靈が信仰箇條につきて論究するを聞きて、(精靈の論究は人間のよりも一層完全にして且つ明敏なり、特に善と眞とを論究するときに、その然るを見る、)何の故に此の如く論究するかを怪みて曰ふ、「われは此の如き事を聞くを好まず、汝等が論究する所は、只其目に見ゆる所と偽りとに過ぎざるなり」と、かくして彼等を論じて曰ふ、「われもし善ならば、善そのものよりにして、眞の何たるかを知り得べく、而してわが知らざる所は、われこれを學び得べし」と。

三百二十一。次の事實は様々の方法によりてわが知り得たる所なり、即ち異邦人のその宗教的信仰によりて有道なる生涯を營み、順良遵從にして、互に仁恵を施し、かくして多少良心の何たるかを知られるものは、他生に攝受せられ、こゝにて信より來る諸善及び諸眞につきて、殊に親しく天人の教誡を蒙り、而して此教誡を受くるや、彼等は其身を行ふに恭謙、智慧、證覺を以てし、輒く諸眞を享けて之に順應せざるはあらず。彼等は信より來る諸眞に逆ひて、自ら虚偽の理義を造らざりしにより、また之を脱却する要なし、まして主に對して只平人の看をなすに過ぎざる、多くの基督教徒の如く、

主に對して邪見の想を抱くにおいてをや。異邦人は、多くの基督教徒に反して、もし神、人となり給ひて、而して自ら世に現はれ給へりと聞くときは、直ちに之を是認して、主の前に拜伏して曰く、「神は全く自らを現はし給へり、そは彼は天地の神にて人類は彼の有なればなり」と。主を離れては救済の道あらずと云ふは一個の神眞なり、而して之を解して、其救済は只主のみより出で來るものとすべし。宇宙の間には多くの地球ありて住民之に滿てり、されど彼等の中には主嘗て吾地上にその人格を化現し給へる事を知るもの極めて稀なり。されど彼等は人間の形態を有するものとして神格を崇拜するにより、彼等はまた主の攝受して導き給ふ所となる。此事につきては「宇宙における諸地球」と云へる小冊子を見よ。

三百二十二。異邦人の中には、基督教徒の如く、亦證覺あるものあり、率直なるものあり。彼等は如何なるものなるかを知らむため、われは許されて兩者と相語ふこと或は數時、數日に涉ることを得たり。今の時には昔時、殊に古代教會の時に於ける如き證覺の人またあらず。古代の教會はもと亞細亞洲の大部分に擴がりて、宗教はこの中より起り、それより數多の國民に傳へられぬ。われはその何人なるかを知らむため、それらの人々と親しく相語るを許されたり。その中に一個の人あり。此人は其頃の賢者の一人として學者界に知られたるものなるが、われは此人と様々の事を語れり。彼はシエロなりきと信すべき情由あり。われは彼が賢者なるを知るにより、彼と共に證覺、智慧、順序、聖言

のことを語り、最後に主の事を語れり。證覺につきては彼言ふ、人生の實際を離れて證覺なし、人生に屬せざるものにして證覺とすべきものなしと、智慧につきてはこは證覺より來る、順序につきては、こは至上の神よりするものにして、これに従ひて生息するを證覺あり、智慧ありとなすと、彼は云ふ。又聖言につきては、われ彼がために、豫言者中の語を讀み聞かしたるに、彼喜ぶこと一方ならず、特に一々の名、一々の語字、皆内の事物を表はさざるなきを見て大に悦び、而して今日の學者は此の如き研究を喜ばずと云ふを聞きて、彼は愕然たりき。こゝにおいてわれは明かに彼が想念の内分開けをるを見たり。彼曰ふ、わが力に餘りて、一層神聖なるものを、わが心に知覺するが故に、われは此以上をきくを得ず、そはわれかくの如く内分の上に感ずればなりと。われ遂に主につきて彼に告げて曰はく、主は人間となりて生れ給ひたれど、主を産めるは神なり、曰く、主の人格は物質的ならずして、神的なり、曰く、宇宙を統制するは主なりと。彼之に答へて曰ふ、「主につきてはわれ亦多くの事物を知れり、而して人間若し救ふべくば、此外に方便あるべからざるは、わが獨得の論理によりて感ずる所なり」と。此間善からざる基督教徒ありて、様々の邪説をなしたれど、彼は少しも心に介することなくして曰ふ、「これ怪しむに足らず。彼等肉體の生涯を送れる時、此事につきて、甚だ不當なる概念の感染する所となれり、故に之を一掃し去るにあらざれば、彼等は眞理を確定する諸概念を是認すること、猶かの未學者の如くなる能はず」と。

三百二十三。われはまた許を受けて其他の古人と物語るを得たり、彼等は皆其頃の優れたる賢者なりき。わが始めて彼等を見たるときは、彼等はわが正面に當りて遠く隔りたる處に居たりしが、彼等は其處よりしてわが思想の内分及び數多の事物を分明に知覺せり。彼等は人の想念中にある一個の概念を基として、これよりその全系統を發見し、而して之を充たすに、證覺上より來りて人を歡喜せしむべき事物と、之に兼ねて美はしき表像とを以てするを得るなり。是に由りてわれは彼等が優れたる賢者なることを覺え、又彼等の果して古賢なるよしを告げられたり。彼等次第に近づきて、わが邊りに來りたれば、われ彼等の爲めに少しく聖言を讀みきかしたるに、彼等の歡喜は一方ならず、このときわれは彼等の歡喜そのものを知覺したるのみならず、亦彼等が之を樂しむことをも知覺したり。この歡喜の情は、重もに、彼等が今聞ける所の聖言のうちには、すべて天的、靈的事物を表像し、指示することを見たるによるものとす。彼等曰ふ、彼等の尙世にありける時、彼等が思索、言語、文書は、皆此の如き性質を帶び、彼等はこれを研究するを以て證覺の對境となしたりと。

三百二十四。されど今日の異邦人に至りては、また此の如き證覺あらざれど、其多數は率直なる心ばせを有せり。而してその相互に仁惠を旨とし來りたるものは、他生にて證覺を享く。今此等の人々につき一二の例を擧ぐべし。われ士師記の第十七章及び第十八章中にて、ダン人がミカよりかれの彫める像とテラピムと、レビ人を取り去れる記事を讀めるとき、こゝに一人の異邦人の精靈ありて、

其世にありし時は、かの彫める像を崇拜せるものなるが彼は心を用ひてわが讀める所の記事、即ちダン人がミカに向ひてなせること、ミカより其彫像を取り去れること、之がためミカは如何ばかり悲しみたることなどを聞き、彼は悲嘆やる方なく、其心の苦しみに堪へずして、茫然自失せる如くなりき。われは彼の哀しみを知覺し、又同時に彼が一切の情動の無垢なることを知覺したり。基督教徒の精靈も亦此にありけるが、彼等は之を見て、彫める像を拜せるものが如何にして斯く哀憐無垢の情動を起し得るかを怪しめり。程へてよき精靈あり、彼に語りて曰へるは、汝彫める像を拜すべからず、汝は嘗て人間なりしが故に、わがかく言ふを會し得べし、汝はまた彫める像のことを思ふべからず、これ以外に出で、全天地の創造者、主宰者なる神のことを思ふべし、此神は即ち主なりと。彼は之を聞きて、その心に崇拜の念を起したるが、その内的情動われに傳はり來り、われはこれによりて彼が心を見得たるに、その情の神聖なる基督教徒のよりも更に一層なるを覺えたり。是によりてこれを見るに、異邦人は今日の基督教徒よりも天界に入ること更に容易なるや明かなりと云ふべし、路加傳中主の宣へる所によれば「また人々西や東、北や南より來りて神の國に産するならむ、その後の者は先に、先の者は後になるべし」と(第十三章、二九、三〇)。何となればかの精靈がをりし情態より察するに彼は信に屬する所の萬事をその身に吸ひ入れ、内的情動を以て之を享け得べければなり。彼には愛より來れる哀憐の情あり、而してその無智なる處に一種の無垢あり、既に此の如きもの、その

心に現存するときは、信に屬する諸事（ちゆうぐのこゝ）は特に意を用ゐずして、そのうちに攝受せられ、従ひて悦樂の之に伴ふあるべし。この異邦人は其後天人の群に入れり。

三百二十五。或る朝遠く合唱の聲を聞きしに、これより出づる諸表像によりて、われは其支那人なることを知れり、そはこれらの表像は羊毛を被れる牡羊の如きもの、黍の饅、黒檀の匕などにて、これと共に浮城の如きものを、わが心に觀じたればなり。彼等はわが邊り近く來らむことを願ひ、而して彼等の近づくや、其心を打明けんため只我とのみ居らむことを願へり。されど彼等は獨り居るにあらず、又彼等の獨り居らむと願ふを喜ばざるもの外にあり、そは彼等は皆客人なればなりと云ひ聞かされぬ。彼等之を聞きて、彼等のはかに喜ばざるものあることを覺えたれば、彼等或は隣人を犯したるにあらざるか、或は他人に屬せるものを己れの所有となせることなきかと、心に危ぶみ始めぬ。而して他生にありては一切の想念互に交通するが故に、われは彼等の此く不安を覺ゆるに至りたるは、彼等が或は他のおのれを喜ばざるものを害せることなきかと思ひ、自らうちに耻づるの情あり、又之と同時に其他の尊重すべき諸情動を抱けるより來れるものなることを見得たり。是故に彼等には仁惠の心あるを明むべし。其後間もなくわれは彼等と物語り、遂に主のことに言ひ及びぬ。われ主を基督と呼ぶるとき、われは彼等の心のうちに之を嫌惡するの情少しく動くを覺えたり、此情の起りは、彼等世にあるとき、基督教徒の生涯は彼等のよりも不善にして、且つ仁惠において缺くる所あるを見た

るに在り。されどわれ基督を呼びて只主と云へるときは、彼等はその内心よりして動かされき。其時天人彼等に告げて、基督の教説は、全世界における如何なる教説にも優りて、愛と仁とを主眼とすれど、之によりて生涯を營むものは甚だ多からずと云ひぬ。異邦人の中には、此世にあるとき、會談と風聞とによりて、基督教徒の生涯の善からざるを知り、又彼等が姦淫、憎怨、争鬭、飲酒など異邦人が嫌惡する所の諸罪惡（是は彼等が宗教の本義に乖けるが故に、）を行ふことを知れるものあり。是等の異邦人はその他生に行くに當り、他の人々よりも信仰上の諸眞理を受くるに躊躇するを常とす、されど天人は彼等に告げて曰ふ、基督の教説と信仰そのものは、全く此の如き罪惡を教ふることなけれども、基督教徒中には主の教説に従ひてその生涯を營むもの、異邦人に比して多からずと。異邦人等、是等の事情を知了するとき、始めて信仰上の諸眞理を受け收めて、主を禮拜するに至れども、之を他の人々に比すれば、之を行ふこと迅速ならず。

三百二十六。或は肖像、或は塑像、或は彫める偶像の形態によりて、何れかの神を崇めたる異邦人は其他生に入るや、一部の精靈は彼等の幻想を除き去らんがため、自ら彼等がさきに崇め來りたる神又は偶像に代りて、彼等を引見するを常とす。彼等此の如く精靈と俱なること數日にして後、また退き去る。人間を崇めたるものも、亦時に其人又は其人に代れるものと引見する所となることあり。例へば多數の猶太人は、アブラハム、ヤコブ、モーゼ、ダビデの引見する所となるが如し。かくして彼

等が崇めたる人物も亦彼等の如くにして、何等の助けをも彼等に與へ得ざることを悟るに至れば、彼等はその心に耻づる所あり、その後彼等は在世中の生涯如何によりて、各其居るべき處に導き去らるものとす。天界の異邦人中にて最も愛せらるゝは亞弗利加人なり、そは彼等が天界の諸善と諸眞とを享くること、他に優りて平易なるものあればなり、彼等は殊に從順と呼ばるゝを欣びて、有信と呼ばるゝを欣ばず、そは彼等曰ふ、基督教徒は信仰上の教説を有するが故に、之を呼びて有信と云ひ得べからむも、彼等自らは然らず、彼等は未だその教説を受け收めざるなり、即ち彼等の言によれば、彼等は未だ之を受くるに堪へざるなりと。

三百二十七。われ又古代の教會に居たるものと相語れり、古代の教會とは洪水以後に存立して、アツシリヤ、メソポタミヤ、シリヤ、エデオビヤ、アラビヤ、リビヤ、エジプト、タイル及びシドンを併せたるフイリシヤ、及びジヨルダン河の西岸における土地を通じて、諸國に廣がれる教會を云ふ。當時この教會の人は主の將に來らむとするを知り、信仰上の諸善をその身に吸ひこまされたれども、尙墮落の境涯を出でずして、偶像の徒となり了れり。彼等は左方の前面、暗き處に居り、憐れなる状態にありき。彼等の言語は筒の如くにして其音調一なり、而して理性的思想に至りては殆どなし。彼等の言へるは、彼等此處に在ること數世、時には外に出されて、他の爲めに賤しき用を爲すことありと。われ彼等を見て數多の基督教徒の身の上に思ひ到りぬ、是等の基督教徒は外面こそ偶像の徒なら

ざれども、その内面は則ち然らずと云ふことなし、彼等は自己と世間とを崇めて、その心に主を否めり、此の如きは他生において如何なる運命の待つ所となすべき。

三百二十八。主の教會は全地球に擴がりて普遍的なること、此に在るものは各自の宗教的所信に從ひて、仁の徳に住めるものなること、聖言の存在せる教會に屬し、これによりて主を知るに至れる教會内の人と教會外の人とを對比するに、教會内の人は猶ほ人身の心臓及び肺臓の如くにして、身中一切の臟腑と肢體とは、其形態、位地、連絡の如何によりて、様々に其活動の原力を肺心の兩機關より得ることは、既に見たる處とす(三〇八)。

○天界における嬰兒のこと。

三百二十九。教會内に生れたる嬰兒のみ天界に來りて、教會外に生れたるものは來らずと信するものあり、そは教會内の嬰兒は洗禮を受け、これによりて教會の信仰中に收め入れられたればなりと。されど此の如く信する者は、人は洗禮によりて天界又は信を受け收むるものにあらざることを知らざるなり。洗禮は只一種の表號と記念とに過ぎず、人は復活すべきもの又教會内に生れたるものは復活し得べしと云ふことを表示するに過ぎず、蓋し此に聖言なるものあり、聖言の中に神眞あり、此神眞によりて復活は遂げられ、又こゝに復活を行ひ給ふ主を知るを得なければなり。故に知るべし、一切

の性に出づるものに似たり。天人はまた其靈的慈愛の情をみたすに足るほど、多くの嬰兒をもてり。此天界は巨人の前額の前面に位して、正に諸天人が主に向ふ所の線内、即ち經線内に存せり。此天界の位地のこゝに存する理由は、一切の嬰兒は直接に主の守護を受くるものなればなり、而して第三天を占むる所の無垢の天界は彼等の裡に流れ入るものとす。

三百三十三。小兒の性情は各異なれり、靈的天人と同じきあり、天的天人と同じきあり、天的性情を有せるものは其天界の右方に在り、靈的性情を有せるものは左方にあり。一切の小兒は天界即ち巨人の眼に當れる局處にをれり、左眼の局處には靈的性情を有せる小兒をり、右眼の局處には天的性情を有せるものをれり、そは靈國にをる天人は左眼の前面に當りて主を看、天國にをる天人は右眼の前面に當りて主を見ればなり、(一一八を見よ)。嬰兒は巨人即ち天界の眼に當る局處にをるが故に、主は彼等を直接に見給ひ、直接に守護し給ふや明かなりと謂ふべし。

三百三十四。天界の嬰兒は如何にして薰陶せらるゝかを簡短に記述すべし。彼等はまづ教母によりて言語を學ぶ、その當初の言語は只情動の音調に過ぎざれども、次第に分明となりて終に想念上の諸概念こゝに入り來る。何となれば先に此事を説けるとき(二三四より二四五)見たるが如く、一切天人の言語は情動より來れる想念上の諸概念より成るものなればなり。是等の嬰兒が無垢の心より出づる諸情動中に先づ取り收めらるゝ事物は、彼等の眼前に在りてその心を欣ばす底のものなり、而して此

等の諸事物は靈的根源より來るものなるが故に、天界の諸事物は之と同時に亦彼等に流れ入るべし。而して彼等はこれによりてその内分を開き、日に圓滿の域に進まんとす。彼等此第一期を過ぐれば、他の天界に移されて、教師の誠ゆる所となり、それより次第を遂うて益々進む。

三百三十五。嬰兒は其能力を量り、主として表像によりて誨えらる。是等の諸表像の如何に美はしく、又之を内より見るとき、如何に證覺に富めるものなるかは、何人も信じ得ざるほどなり、此の如くにして、其精神を善徳より獲來る所の智慧は、漸を逐ひて嬰兒の心中に植付けらるゝものとす。われは許されて兩個の表像を見るを得たるが故に、今之を記述して、以てこれ以外の表像の如何なるものなるかを推し得るの材料となすべし。天人はまづ主の墓より上天し給ふを表像し、また之と同時に主の神格と人格とを融合するを表像したるに、その方法の巧妙なる、到底人間の證覺の及ぶ所にあらず。而かも此方法は無垢にして、嬰兒の會得するが如きものなりき。天人は又主の概念を表現せずして墓のみの概念を表現したることあり、主の概念全然なきに非ず、されど殆ど之を知覺し難きほどに遠ざかり居れり。そは墓の概念のうちには自ら葬儀に關する概念も亦交はり居るものなるに、天人はかくの如くにして之を除き去りたればなり。其後天人は心を用ひてその墓の中に、頗る透明にして水に似たる氣體的のものを入れたり、彼等はこれにて洗禮の際における靈的生命を表はせるなり、而して彼等の之を表はすや、虚實亦其宜しきに稱へるものありき。われ又主の縛められたるものゝ中に下

り給へるを表現し、又主が彼等を率ゐて上天し給へるを表現せるを見たるに、其方法の思慮に富みて、且つ敬虔の念深き、物のこれに比すべきなきを覺えたり。其中特に人をして稚兒的なるを思はしめたる一事は、彼等が頗る柔かにして弱く、殆ど見分け難きほどの細網を下し、之にて主の上天し給ふを引上げたるに在り、されど彼等は如何なる部分においても、その表像の靈的にして、天界の意義を離るゝことなきを思ひて、常に小心翼翼として是れ度めり。此外又彼等の中に行はるゝ諸表像を以て、嬰兒の心に稱へる遊戯の如くに仕込み、これによりて彼等に眞の何たるを知らしめ、又善に對する情動を惹き起さしむ。

三百三十六。此に嬰兒の智性は如何に纖弱なるかを示すべし。われ嘗て主の禱を言へるとき、嬰兒の智性より出でわが想念上の概念に傳はり来る内流を覺えたり、而して此内流を見るに、その纖弱にして軟柔なること、殆んど情動のみより來れるものに似たり。而してわれはまた之と同時にかれ等の智性が主によりて啓かるゝことを觀察したり、そは彼等より出で來る所の内流は、實に彼等のうちを經過して流れ來るものゝ如くに感せられたればなり。主は又嬰兒の概念中に流れ入るとき、重もに其の內的なるものより始め給ふ、そは嬰兒は成人の場合における如く、未だ嘗てその概念の梗塞せられたることあらざればなり。彼等は未だ嘗て邪偽の理義に迷はされざるが故に、眞を會するに當りて何等の妨害を感せず、又未だ嘗て不善の生涯を營まざるが故に、善を享け、從ひて證覺を享くるに當

りても亦何等の妨害を覺えず。故に嬰兒は死後直ちに天人的情態に移ることあらず、漸を逐ひて善と眞との諸知識を積み、これによりて天人の境涯に導かれるゝことを明むべし、是は總て天界の順序に稱へるものなり。嬰兒の性情は、其最も微細なるものに至るまで、悉く主の知り給ふ所なれば、善よりする諸眞と眞よりする諸善とを受くるに、その最も個體的なるものに至るまで、彼等が本然の性情の動く處に従はずと云ふことなし。

三百三十七。天人は嬰兒の性情に順ひて彼等を樂しまし、喜ばしむると同時に、如何にして彼等をして天界の事物を吸ひ收めしむるかは、又わが爲めに示されたり。われ許を受けて嬰兒を見たるに、彼等は麗はしき衣類に纏はれ、其胸邊を花束にて飾り、その纖弱なる兩腕をもこれにてからみたるが、其花は天界の色彩に輝きて最も愛すべかりき、われ又嘗て嬰兒が侍女に伴はれ、教母と共に樂園を歩めるを見たり、此樂園は頗る美はしく飾れるが、樹木はまだ多からず、園亭あり、桂樹に蔽はれたる石垣あり、又道ありて奥庭に通せり。嬰兒は前に言へる如き装にて、この花園に入り來るや、花の層々として入口の上邊に重なるもの、最も心ゆくまで輝きわたれり。此にて彼等が悅樂の如何なるものなるかを明らめ得べく、又彼等は此の如き樂しむべき喜ぶべき、事物によりて、無垢と仁惠とより來る所の諸善中に導き進めらるゝを明らめ得べし、而して此等の諸善は主が絶えず嬰兒の心中に注ぎ入れ給ふ所なり。

三百三十八。嬰兒が或る物體を見るとき、如何なる概念を有するかは、他生に行はるゝ交通の方法によりて、わが知るを得たる所なり。即ち彼等は總ての事物を生けるものと思へり、故に彼等が概念中の概念にはすべて生命あり。われは又嬰兒が小かなる遊戯を樂しむを見て、その思想は地上における嬰兒のと殆んど同じきを覺えたり、そは彼等には未だ成人の如き省察の力あらざれば、彼等は生なしと云ふは何のことたるを解せざればなり。

三百三十九。嬰兒の性情に、或は天的なるあり、或は靈的なるありと云ふことは既に言へり。天的性情を有するものと靈的性情を有するものとは容易に區別するを得べし。前者は其思想、言語、舉動頗る柔和にして、すべての事は只主と他の嬰兒とに對する愛の徳のみより流れ出づるが如く見ゆ。されど靈的性情の嬰兒は此の如く柔和ならず、彼等が一切の言行に一種の搖動あり、鳥の翼の如し。こは彼等が怒り惱むことなどあるを見て明かなるべし。

三百四十。天界にては嬰兒は永く嬰兒にして、此の如き情態にて常に天人の間にをれりと思ふ人多からむ。天人の何たるを知らざるものは、教會堂裡の繪畫又は塑像に幼兒を以て天人を表像せるを見て、其所説を確めんとすべし。されどこれ事實にあらず。天人の天人たるは智慧と證覺とにあり、嬰兒にして未だ智慧と證覺とあらずば、彼等は天人と伍すべし、されど彼等は未だ天人にあらず。彼等の天人となるは、彼等が智慧と證覺とを有するに至る時なりとす。此に驚くべきは、嬰兒は此時復た舊

時の嬰兒にあらずして、成人となることこれなり、何となれば其性情には絶えて稚兒の跡を留めずして、今や成熟せる天人的性情を具有すればなり、而して此の如き結果は智慧と證覺とより出でたるものとす。小兒はその智慧と證覺とにおいて圓滿となるに従ひ益々成熟の境に進む、少年、青年の場合におけるも亦然り、何となれば智慧と證覺とは、實にそのうちに靈的滋養を含めばなり、彼等の心を養ふものは亦其身を養ふものなり。こは相應の結果にして、身體の形式は内分の外に發現したるものに過ぎず。此に知らざるべからざるは、天界の小兒は成人の第一期より以上に老ゆることなく、永遠に此情態に居ることこれなり。此事の果して然るかを知らむため、われは亦許しを受けて、幼時より天界にて薰陶を受け遂に成人となれるものと相語るを得たり、又小兒のとき相知れるものゝ、其後長じて青年となれるに際し、復たこれと相語れることあり、われは彼等よりその時期を逐ひて彼等は如何なる生涯を送るものなるかを聞けり。

三百四十一。無垢は天界における萬物を受くる所の器なること、嬰兒の無垢は善と眞とより來る一切の情動を容る所の平面なることは、上に天界における天人の無垢のことを言へるとき明にしたる所なり(二七六より二八三)。其處にて無垢とは、己の力を頼まず、只主の導くまゝなるを願ふ心なること、又人はおのが自我の念より離るゝに比例して主の自我中にあるものなることを言へり。主の自我を呼びて主の正道及び徳性と云ふ。されど嬰兒の無垢は至純の無垢にあらず、嬰兒には未だ證覺あ

らざるなり、至純の無垢とは證覺なり、何となれば證覺あるものは何人も主の導く所となるを欣べばなり、即ち主の導く所となると云ふも、證覺ありと云ふも同じ事なり。故に嬰兒は外的無垢より進みて內的無垢に導かるゝものとす、外的無垢とは嬰兒が當初の情態にして、之を嬰提的無垢と云ひ、內的無垢とは證覺の無垢にして、嬰兒が受くる一切の教誨は、之を究極となし、これに向ひて進む。かくして彼等一たびこの證覺的無垢の域に到れば、是に到るまでそれが爲めに一種の平面となれる嬰提的無垢は、彼等と和合し了るべし。

嬰兒の無垢の如何なるものなるかは、わが見たる所にては、木質の如きものにて表像せられたり。此もの初めは殆ど生氣なかりしが、眞を知り善を感ずること益、圓滿なるに従ひて、次第に活氣を帯ぶるに至れり。其後無垢の至純なるものは、頗る美はしき嬰兒の活氣にて充ちたるが、赤裸々なるにて表像せられぬ。何となれば如實に無垢なるものは最奥の天界にあり、従ひて主の處に最も接近し、他の天人の眼には恰も嬰兒の如く見ゆればなり。而して其中には寸糸をも掛けざるがあり、そは裸體にて耻づる所なきを以て無垢の表像となせばなり、猶ほ極樂園に於ける最初の男女の如し（創世紀、第二章、二五）。故に彼等一旦その無垢の情態を失ふや、彼等は其裸體なるを愧ぢて自ら隠るゝに至れり（第三章、七、一〇、一一）。一言にして曰へば、天人は益、證覺あれば益、無垢にして、益、無垢なれば、益、嬰兒の如く見ゆるものとす。聖言に嬰提を以て無垢を表はすはこれがためなり（二七八を見よ）。

三百四十二。われ天人に問ひて、嬰兒は、成人の如く、實際に不善を行はざるが故に、罪惡を脱離せるものなるかと云ひしに、天人答へて曰ふ、然らず、彼等は成人と同じく惡にをれり、否、惡以外に出づることあらず。其天人の如くなりて惡を離れ善に歸するを得るは、もとより主に由るものなれども、打見たる處にては、己れよりして善にをるものゝ如く覺ゆるなり。故に天界にて成育したる小兒の、自ら見るの明なくして、誤りて其の所有の善を以て、主より來るものとなさず、却ておのれよりするものと思ふことあらむを恐れて、彼等は時に祖先以來の諸惡に導き戻さるゝことあり。而して彼等此事に關する眞事實を知りて、之を是認し、之を信仰するに至りて、始めて此處より脱離するを得。嘗てある王者の子にして、幼時に死して、天界に人となれるが、此の如き過失に陥れることありき。此に於て彼はその由りて生れ來れる諸惡の中に、また引き戻されたるが、われ此時彼が生涯より出づる圓相のうちに入りて、之を見るに、彼は他に對して其威を擅にせんとするの性格を現はし、又姦淫の事を輕視せんとせり、此の如き諸惡は、彼等之を父母より傳へたる所とす。其後、彼はもと此の如き性質のものなりし事を是認するに及び、彼は再びもとの天人の群に還ることを許されぬ。他生にては何人も遺傳的罪惡の爲めに罰せらるゝことなし、これ彼が自ら爲せる所にあらざれば、彼が罪過とならず、彼が處罰は、彼自ら爲す所の罪惡による、即ち彼はその遺傳的罪惡をわが生涯のうちに入

れ納むるとき、彼は罰せらるゝなり。小兒が成人となるに及びてその遺傳的罪惡の情態に還さるゝことあるは、これ彼等を罰せんとあらず、只彼等をして、もし自己のみよりせんには、彼等は惡のほか何ものをも有せざることを自覺せしめんとてなり、又彼等と相伴へる地獄界より、彼等の救出されて、天界に至るは主の慈愛によること、彼等が天界にあるは己れの功德によらずして、只主によりてのみなること、又かくして彼等は他の面前に己が善徳を誇るべからざること、これらの事を自覺せしめんとてなり。何となれば自ら其善に誇るは、相互に愛するの徳に背き、又信より來る眞と相反すればなり。

三百四十三。われ屢、嬰兒と合唱の席に連なれることありき、彼等は未だ全く嬰提の域を出でざりしが故に、其唱ふ所は纖弱かたがくして前後相整はず、相互の間に一致を見るときは、彼等其後次第に成育するに及びては、また此の如きことあらずなりぬ。此に驚くべきは、われと俱なれる精靈が嬰兒をして自ら語らしめんと勤むるを禁する能はざりしこと、これなり、そは是の願は諸精靈が本來具有する所なればなり、われはまたかゝる時には小兒の毎に彼等に反抗して、語るを好まざるを見き、而して此拒絶と反抗の中には多少憤怒の情を含めるが如きことをもわが屢々知覺せる所なりき。されど彼等の自由に談話するを許さるゝに及びて、彼等が語る所は、只「是ならず」と云ふに過ぎざりき。われきく、こは嬰兒の誘惑にして、彼等をして曾に偽り及び不善に抗するの習慣を養はしめんためのみならず、亦他の勸誘によりて思惟し、言語、動作することなからんため、即ち主を除きては、何人も彼等を左右し得ざらしめんためなりと。

三百四十四。上記述せる所にて、天界における嬰兒の教誨の如何なるものなるかを明め得べし、即ち眞よりする智恵と善よりする證覺とによりて、彼等は天人の生涯に導かるゝこと、而して此生涯は主を愛し、相互を愛するの謂にして、無垢其中にあることを明め得べし。地上における小兒の教誨は、多くの場合において、如何ばかり天界におけるものと相違するかは、次の例にて見るべし。われ嘗て大なる都會の或る街にて小兒の喧嘩せるを見たるに、其ほとりに集り來れる群衆、之をよき見世物の如く思へり、又彼等の語るを聞きしに、小兒等は其親に勵まされて、かくは争へるなりと。善き精靈と天人とはわが眼を借りて之を見、嫌忌の情を生ずること甚しく、われは彼等の戰慄せるを覺えたり、彼等をして殊に此の如く嫌忌の情を起さしめたるは、小兒の兩親が之を勵ましてかく相争はしめたりと云ふに在りき。彼等曰く、兩親が幼時より既に小兒をして主より得たる相互の愛と一切無垢の心を殺さしめ、却て之を憎惡、報仇の中に導き入るゝこと此の如きものあり、故に小兒を只相互の愛のみ存する所の天界より遠離せしむるは其父母自ら致す所なり、彼等若し其子のよからむことを願はゞ、此の如きことを慎まざるべからずと。

三百四十五。小兒のときに死するものと、成人になりて死するものとの相違を此に説くべし。成人

になりて死せるものは、世間的及び物質的下界にて獲取せる平面を携へて他生に入り来る。この平面とは即ち彼等の記憶と之に伴へる肉體的且自然的なる情動とを云ふなり、このものは定住して且つ寂然たれども、死後その人の想念は此上に流れ入るが故に、想念のために終極の平面となるものとす。故に此平面の如何により、又その上に横はれる諸事物と理性との相應如何によりて、其人の死後の本性は定まるべし。されど嬰提の時に死し、天界にて教誨せらるるものは、此の如き平面を有せず、只靈的且自然的平面のみこれあり、そは彼等未だ嘗て物質的下界と世間的肉體とよりして何物をも獲取せざればなり。故に彼等には是等の事物より來れる粗惡の情動なく、又此情動より來れる想念なし、彼等は一切の事物を天界より受くるを以てなり。加之、小兒は世間に生れたることを知らず、只管天界に生れたるものゝ如く信せり。故に彼等は靈的に生れたる外、別に生誕するものあるを知らず、而して靈的に生るゝとは善と信との諸知識により、又智慧と證覺とによりて生るゝの義なり、人の人たるは此に由るものとす。而して是等の事物は皆主よりするが故に、天界の嬰兒は實に主にのみ屬するものと信じ、且つしか信するを喜ぶなり。されど地上に成育せる人と雖、もし其肉體的にして世間的なる愛、即ち自我と世間との愛を捨て、之に代うるに靈の愛を以てするときは、天界に成育せる嬰兒の如く亦圓滿なるを得べし。

○天界における達者と愚者とのこと。

三百四十六。天界においては、達者の優りて光榮あり、また尊貴なるべしとの信仰世に行はる、何となればダニエル書（第十二章、三）に曰ふ、「智者は太空の光りの如くに耀かむ、また衆多の人を義に導けるものは星の如くなりて永遠に至らむ」と。されど智者とは誰なるか、衆人を義に導くものとは誰なるかを知れるは少なし。普通に人の信する所によれば、是は智慧あり、學殖ありと云はるゝ人、特に教會にて教へたる人、教法、説教に秀でたる人を云ひ、又特に是等の人のうちに、衆人を改信、教化したる人を云ふ。世間にては是の如き人々を皆智慧あるものと稱すれども、天界にてはかく云はず、天界の智慧を有するにあらざれば、之を智慧あるものとなして、先きの如き言をなすことあらず。次に天界の智慧とは何なるかを説明すべし。

三百四十七。天界の智慧とは眞を愛するより起る内的智慧なり、而して此愛は世間にて光榮を求めんがためならず、又天界の光榮のためならず、只眞そのものを愛するが爲めにして、此眞によりて深く内に感動し、歡喜の情ある、之を天界の智慧と云ふ。眞そのものによりて、その心を動かし、歡喜の情あるものは、また天界の光明によりて、その心を動かし、歡喜の情あるものなり、天界の光明によりて、その心を動かし、歡喜の情あるものは、これ神眞、否、主自らによりて、その心を動かし、

歡喜の情あるものなり。何となれば天界の光明は神眞なり、而して神眞は天界における主なればなり。(上を見よ、一二六より一四〇。)此光明の入り来る處は只心の内分に限り、そは心の内分は之を受けんがため作られたるものなればなり。而して此光明の入り来るとき、其内分は之がために動かされ、此に歡喜の情を生せしむ、何となれば天界より此に流入して、之が攝受する所となるものは、その何たるを問はず、皆其中に歡喜、悅樂の情を惹き起すに足るものならずと云ふことなければなり。眞に對する至純の情動はこれより来る、而して此情動は即ち眞の爲めに眞を欲する情動なり。此情動に在るもの、即ち此愛に在るものは、これ天界の智慧に在るものにして、大空の光輝の如く、天界にありて耀くべし。彼等がかく光明を有するは、神眞は到る處に光明を放てばなり。(上を見よ、一三二。)天の大空とは相應によりて内的智性を示せり、而して此智性は天人及び人間の有する所に於て天界の光明中にあり。されど世間における榮光を得むがため、又は天界における榮光を得んがため、眞を愛するものに至りては、天界にゆくも光耀を放つことあらず、そは彼等のよりてその心を動かす所、彼等の取りて悅樂とする所は、天界のまことの光明にあらずして、世間の光明なればなり。若し天界の光明を離れんには、所謂る世間の光明なるものは、天界にありては黑暗々なり。何となれば彼等は自我の榮光を以て其目的となすが故に、これのみ主要の地位を占むるに至るべければなり。此種の榮光を目的とする人は、自我を第一位に置き、諸眞理を以て此榮光に隷屬するとなすが故に、

眞理は此目的に達するまでの手段となるに過ぎざるべし、これ眞理は自我のために奴隷視せらるゝなり。何となれば自我の榮光を得んために神眞を愛するものは、眞理のうち主を認めずして、たゞ自我のみ認むべければなり。是の故に、彼はその智性と信とより成れる視覺を轉じて、天界より世間に向け、主より自己に向けんとす。此の如きものは世間の光明中にあれども、天界の光明中にはあらず。彼等は、外面より見たる所にては、隨ひて人間の面前にありては、天界の光明に在るものと同じく、智慧あり、光明ありとも見らるべし、蓋し彼等の言ふ所相似たればなり、否、時に或は外面より見て、これに優れる證覺あるが如く思はるゝことあらむ、何となれば彼等は自愛の念に刺戟せられて、ひたすら天界の情動を模擬せんとつとむべければなり。されど彼等の内的形式に至りては、全然之と異なるものあり、而して彼等が天人の前に現はるゝときは、此内的形式においてするものとす。今やかくして、大空の光輝の如くに輝くと云ふ智者とは誰人を云へるものなるかを、多少明め得たれば、次に衆人を義しきに導き、星の如く輝くとは誰人の謂なるかを示すべし。

二百四十八。衆くの人を義しきに導くものは達者なり、天界にて達者とは善に在るものを云ひ、善に在るとは神眞を直ちに其生涯となすを云ふ。何となれば神眞を生涯となせば、其眞即ち善となるべければなり、意と愛とより来るが故に。而して意と愛とより来るものは皆呼びて善となす。故に此の如きを呼びて達者と云ふ、證覺は生涯の上にあればなり。之に反して神眞を直下にその生涯となさ

す、先づ之を記憶に置き、其後之を取り出で其生涯中に入るよものを智者と云ふ。天界にては、如何なる相にて、如何なる度まで、智者と達者と相異なるかは、天界の二國土、即ち天國と靈國とを説ける章（二〇より二八）、及三天の事を言へる章（二九より四〇）につきて見るべし。主の天國にあるもの、随ひて第三、又は最奥の天界にあるものを正しと云ふ、何となれば彼等は正道を私することなく、皆之を主に歸すればなり、而して天界における主の正道とは、主よりする善に外ならざるなり。故に此の如きものを呼びて衆を義しきに導く人と云ふ、また主が次の如く言ひ給へるは、此の如き人の上なり、曰く「正しきものはわが父の國にありて日の如く輝くべし」と（馬太傳、第十三章、四三）。彼等が日の如く輝くは、主よりして主に對する愛にをればなり、而して日とは此愛を云へるものなることは、上に見えたり（一一六より一二五）。彼等を周ぐる光明は火焰の如し、而して彼等が想念上の概念も亦此火焰底を分有せり、そは彼等は天界の太陽たる主より直ちに愛の善を享くるが故なり。三百四十九。此世にて智恵及び證覺を得たる者は皆天界に攝受せられ、各其得たる智恵と證覺との質及び度に比例して天人とならざるはなし。何となれば人の此世にて獲たる所は、そのまゝ死後に迄齋し去らるが上、そこに更に増長し、充足すべければなり、されどこの増長と充足とは、その人が眞及びその善に對して有する所の情動と慕向との強弱の度以内にあるものにして、決して其外に出づることあらず。眞及びその善に對して少許の情動と慕向とを有するものは、その容るゝ所亦少許なれ

ども、彼等はその情動と慕向との度以内において、容れ得べき限りを容るゝものとす。此情動及び慕向の大なるものに至りては其容るゝ所亦自ら大なるものあり。情動と慕向との度は量の如し、其充つるまでは人之に盛るべければ、大なる量をもてるものは得る所また大にして、小なる量をもてるものは得る所また少し。かくの如くなる所以は、愛は（情動と慕向とは愛に屬せり）自らと相合ふものをすべて容れ納めずと云ふことなければなり、故に人は其愛の如何によりて受け容るゝ所あるものを知るべし。此義によりて主は下の如く云ひ給へり、曰く、「それ有てるものは、與へられて尙餘りあるべし」と（馬太傳、第十三章、一二、第二十五章、二九）。又曰く、「彼等量を嘉くして推いれ滅りいれ、溢るゝまでにして爾曹の懐に入れん」と（路加傳、第六章、三八）。

三百五十。眞及び善のために眞及び善を愛するものは皆天界に攝受せらる、故に愛すること厚きものは達者と呼ばれ、愛すること薄きものは愚者と呼ばれる。天界において達者は光明にをること多く、愚者は光明にをること少なし、皆善と眞とに對する愛の厚薄によるものとす。眞と善との爲めに眞と善とを愛すとは、之を志し、之を行ふの義なり、そはかく志し、かく行ふものは、即ち愛するものなればなり、されどかく志さず、かく行はざるものは、然らず。主を愛し、主の愛する所となるものは亦此の如し、そは善と眞とは主よりすればなり。而して善と眞とは主よりするが故に、主はまた善と眞とにをれり、故に之を志し、之を行ふて、善と眞とを其生涯の中に享け入るゝものは、主之と共に

あり。人はまたおのが有する所の善と眞とを離れて、別にその本分なるものならず、何となれば善はその人の意に屬し、眞はその智に屬し、而して人の人たるは其意と智とに由るものなればなり。故人は善によりて其意を成し、眞によりて其智を成す限り、主の愛する所となると謂ふべし。又主の愛する所となるは、これ主を愛するなり、蓋し愛は相互的にして、その愛せらるるものには、主また愛の力を與へ給へばなり。

三百五十一。教會及び聖言の所教により、又は諸科學によりて、多くの事物を知れるものは、諸眞理を見ること、他に優りて內的且つ明敏にして、一層の智慧あり、證覺ありとは、世人の信する所なるのみならず、此の如き人も亦自らしか信するを常とす。されど何を眞實の智慧となし、眞實の證覺となすか、又何を相似的にして虚偽なりとなすかに至りては、今之を説くべし。

眞實の智慧及び證覺とは、眞なるものと善なるもの、及び之によりて偽のものと思しきものを見得し、知覺するを謂ひ、又彼と此と相異なる所以を、直觀と內的知覺とによりて、精細に甄別するを謂ふ。凡そ人には各内分の事物あり、外分の事物ありて、内分の事物は內的又は靈的人格より成り、外分の事物は外的又は自然的な人格より成る。而してその内分の形成全くして、外分と合一するとき、此に所見あり、知覺あり。人の内分の成るは只天界においてのみすれども、其外分の成るは世間においてす。その内分天界に成るとき、其中に在るもの、世間にて成れる外分の中に流入し、かくして兩者

の間に相應あり、即ち外分は内分と一となりて動作す。此事成るとき、人は内分よりして見且つ知覺すべし。内分を成さんと欲せば、神格と天界とに向ふを唯一の方便となす。そは前に言へる如く、内分は天界にて成ればなり、また人の神格に向ふは、神格を信じ、一切の眞と善、從ひて一切の智慧と證覺とを以て神格より來るものと信するときにして、而して人の神格を信するは、神格の導く所となるを欲するときなればなり。人の内分の啓くるは只此途あるのみ、他に途あらず。

此信にをり、此信に従ひて、その生涯を營むものは、智慧及證覺を得るの力と性とを有す。されど智者となり、達者とならんには、常に天界の事物のみならず、世間の事物をも亦學ばざるべからず、天界の事物は聖言と教會とより來り、世間の事物は諸科學より來る。人若し是等の事物を學びて之を其生涯の上に應用すれば、それだけ彼は智慧と證覺とを得るわけなり、何となれば、それだけ彼が智性の内視と意志の内動とは圓滿となり行けばなり。此部類に屬して愚者とは、その内分開けをれども、未だかくの如くに靈界の事、道德、文事、自然界の諸眞理によりて修文せられざるものを云ふなり。彼等眞理につきて聞く所あれば則ち之を知覺すれども、彼等は眞理を自己のうちに見得ることあらず。又此部類に屬して達者とは、常に其内分啓けをるのみならず、亦修文あるものを云ふ、彼等は眞理を自己の裡に見得し、且つ知覺す。如上の所述によりて眞實の智慧と證覺とは如何なるものなるかを明かに會得し得べからむ。

三百五十二。相似的智慧及び證覺とは、真なるものと善なるものと、及之によりて偽りのものと悪しきものとを、内面より見出し、知覺せざるを謂ふ、即ち只他人の言ふ所に従ひて、之を真なり、善なりと信じ、又偽りなり、悪なりと信じて、而して後自らことに安住するを謂ふ。彼等は真そのものによりて真を見ず、他の言によりて左右せらるゝが故に、虚偽を執して之を信すること、猶真理の如くなるべく、又ここに安住するの久しき、自らこれを眞實と看做すに至るべし。何となればすべて自ら安住する處は眞理の装ひを呈するものにして、而して世には由りて以て安住の處となす能はざるものなければなり。此くの如き人の内分は只下方のみより開けをれり、されどその外分に至りては彼等が自ら安住せる限りに於いて開けをるものとす。此の故に彼等が由りて見る所の光明は、天界の光明にあらずして世間の光明なり、之を自然的光明と云ふ。此光明中にありては虚偽も亦眞實の如く耀けり、否、虚偽も一旦人のことに安住するにおいては照りわたることあり、されどそは天界の光明にあらずと知るべし。此部類に屬するものにして、微劣なる智慧と證覺とを有するものは、自家の臆説の上に安住すること頗る固けれども、その智慧と證覺とに勝れたるものは、かく安住するの度強固ならず。如上の事項によりて相似的智慧及び證覺とは何を云へるものなるかを明むべし。

かのなほ幼時に當りて、その教導するものと眞なりと云へるを聞きて之を信じたるも、その後年長くるに及びて自己の智性によりて思索し、また幼時の信に居らず、別に眞理を願ひて之を求め、其

之を發見するに當りて、自ら内的に動かさるゝ所あるが如きは、此部類に屬せず。彼等は眞の爲めに眞の動かす所となるが故に、彼等は自らことに安住するに先ちて、眞の眞たるを見得す。今實例によりて之を説明すべし。精靈嘗て動物は生れ乍らにして其性情に適へる一切の知識を有せるに、人間は何が故にひとり然るを得ざるかと云ふ問題につきて談話せるとありき。其理由に曰く、動物は生來その順序の中にをれども、人は然らざればなりと。故に人は知識及び學術によりて本來の順序のうち引き戻さざるべからず、人もし生來その順序のうち生息したらんには、(人間生來の順序とは萬物をおきて、まづ神を愛し、又隣人を己れの如くに愛するを云ふ)彼は生れながらにして智慧あり、證覺あるべく、従ひてまたその知識の増加と共に一切の眞理を信すべし。よき精靈は眞理の光のみによりて、直下に之を見て、其然るを知覺すれども、信のみに上に安住して、之がために愛と仁とを捨て去れる精靈は、この理を會し得ざりき。何となれば彼等は偽りの光に安住して、之がため眞理の光を黒からしめられたればなり。

三百五十三。神格を是認せざるをば、すべて偽りの智慧、偽りの證覺となす。神格を是認せざる人は、自然を以て神格となし、其思索は肉體的、感覺的事物より來りて、只感官上の人たるに過ぎず、世間にては彼等を以て教育あり、學問ありとなさんも、其學問なるものは世間にある眼前に見ゆる事物の外を出づる能はざる也。彼等は此等の事物を其記憶に貯えおきて、之を見るに只物質的の觀をな

すに過ぎざれども眞に智慧あるものは、同一の科學を利用し、これにておのれが智性の基礎を作る。科學とは各種の實驗的知識のことにして、即ち物理學、天文學、化學、機械學、幾何學、解剖學、心理學、哲學、諸國の歴史、文學、批評、言語に至るまで、皆之を科學と云ふ。

かの神格を否定して、而して其思想、外的人格に屬する諸感覺の外に出でざる司教の徒が、聖言に關する事物を見ること、猶ほ一般の世人が諸科學を見るが如きものあり、何となれば彼等はこれを以て靈明なる理性的心より來れる思想上の事物、又は直觀上の事物となさざればなり、そは彼等の内分は閉され、内分に近きところの外分も亦共に閉され居るが故なり。此く閉さるゝ所以は、彼等自ら背きて天界を離れ、また彼等の心のうちにありて彼等を其方向に轉せしむるものをも倒覆し了れるに由る、而して此ものは、前に見たる如く、人心の内分のことなり。是の故に彼等は眞なるものと善なるものを見ることが能はず、彼等の眼には眞と善と共に黑暗々のうちに在る如く思はれ、只偽と惡とのみ光明の中に現はる。

されど感官のみの人と雖、究理の能は則ちこれあり、中には他に勝れて一層敏活に明徹に究理する力の具ふるもあり、されど其究理なるものはその源を感覺上の偽りに發して、所謂科學的なるものの上に安住すと知るべし。而かも彼等はかく究理し得るを以て、自ら亦他に優れて達者と思へり。彼等をしてこの究理的情動を起さしむる火は、その自我と世間とを愛する火なり。これ等の人を偽りの

智慧と偽りの證覺に在るものとす、主が馬太傳のうちに云ひ給へる所は是なり、曰く、「視ても見えず、聴ても聴かず、又悟らざるなり」と（第十三章、一三、一四、一五）。又曰く、「汝は此事をかしこみのこと智者、達者に隠して、赤子に顯し給ふを謝す」と（第十一章、二五）。

三百五十四。われ嘗て許しをうけて、多くの學者の此世を去りたるものと物言へることありしが、その中には其著述によりて文學界における名聲頗る高かりしもありき、又此く名聲高からざるも、幽深なる證覺を有するもありき、かの其口に神格を承認しながら、その心に之を否めるものは、魯鈍の甚しき、殆ど何等の人文的眞理をも會得せざるほどなりをれり、まして靈的眞理を會するにおいてをや、われは又彼等が心の内分閉塞して、暗黒となり、天界の光明に堪ゆる能はず、又天界の内流を享くる能はざる境涯にあることを知覺し且つ見得たり。（靈界にては此の如きことも亦能く見得らるゝなり。）此く内分の黑暗なるは、おのが多聞を恃み、所謂科學的なるものによりて、神格を否定したる學者に在りて、愈々大に愈々擴がれるを見たり。此の如きものは、他生にありては、一切の偽りを容るゝを欣び、之に浸染すること、海綿の水における如し、而して彼等が總ての眞を嫌ふさまは、猶彈力ある骨質の表面が其上に落つるものを弾き返すに似たり。われまた聞く、すべて神格に乖きて、只自然界のみを愛するものと内分は骨化せりと、彼等の頭部はまたその鼻端に至るまで硬くして黒檀の如くなりをれり、知るべし、彼等は既に何事をも知覺するを得ざる境涯に在ることを。此

部門に屬する人々は爛泥の如き坑中に没入しておのが偽りより出で来る幻想の爲に惱まされをれり。彼等が光榮を慕ひ、名譽を慕ふ慾火は、化して陰府の火となり、彼等は此慾火によりて互に相闘げり、彼等はまた地獄にふさはしき狂熱を以て、おのれを神と崇めざるものを惱まして止まず、而して此惱まじは彼等の迭みに相加ふる所なり。神格を是認して、天界の光明を享け入れざりし世間の學問は、みな此の如き情態に轉化するものとす。

三百五十五。是等の學者が死後靈界に來りて此の如き情態に陥ることは、次の事實のみにても推論し得べし。自然的記憶中にありて、肉體的感覺の事物と直接に和合せる一切の事項、即ち上に言へる所謂學術的なるもの如きは、靈界にありては悉く寂然なれども、但此れより起り来る理性的事物のみは、想念と言語とのために役せらるゝものとす。何となれば人は一切の自然的記憶を靈界に齎らし來れども、其中にある事物は、彼が世にありし時の如く、彼の眼界に入り來らず、又その想念中に現はれ出でざればなり。故に彼は何ものをも其中より取り出で之を靈界の光明中に置くを得ず、蓋し其中の事物は光明裡のものにあらざるなり。されど肉體の生を營めるとき、諸學術より得たる理性的又は智性的事物は、靈界の光明と一致せるが故に、人の心靈は世間の諸知識及び諸學術によりて理性的となれる度に從ひ、其身體を離れて後も尙理性的なり、何となればこのとき人は精靈となればなり。而して人の身中にありて能く思索するものは、是精靈の外ならざればなり。

三百五十六。されど諸知識及び諸學術によりて智恵と證覺とを得て、之を日常生活の上に適用し、又之と同時に神格を是認し、聖言を愛し靈的にして有道なる生涯を送れること、上に(三一九)言へる如きものは、諸學術を以て證覺を得、信仰上の事物を證實する方便となし、之を役使したるものなり。われ此の如き人の内分、即ちその人の心より成れる内分を見、且つ知覺したるに、透徹せる光明を放てり、その色に白きあり、火焰の如きあり、又青きあり、澄徹せる金剛石、赤玉、青玉の色に似たり、こは彼等が神格と諸科學よりする神真とによりて自ら安住する度に比例して然るなり。眞實の智恵と證覺とを靈界の中に取り出して見るときは、此の如き相を呈するものとす。こは天界の光明、即ち主より起り来る神真より現はれ出づるものにして、すべての智恵と證覺とは此真よりして存在す(上を見よ、一二六より一三三)。

此光明の諸平面に色彩の如き彩紋あるは心の内分なり、自然界にある事物、隨ひて諸科學上の事物によりて、神真を確定するとき、此の如き彩紋あり。何となれば人の内心は自然的記憶のうちにある事物を點檢して、このうちより神真を確實にすべきものを選び出し、天界の愛を以て之を陶冶し又之を他より引き分けて、遂に靈的概念となるまで之を精鍊すればなり。肉體の生を營めらるうちは、人此事あるを知らず、何となれば人は其時靈的並に自然的思索をなせども、只自然的思索のみに意を留めて、靈的思索を知覺することなければなり。されど一旦靈界に來るや、彼は自然的思索を知覺するこ

となくして、靈的思索のみを知覺す、死後彼の上になるべき情態の轉變は此の如くにして行はる。是によりて知るべし、人は諸の知識と諸の科學とによりて靈的となることを、又此等は證覺を得るの方便なることを、されど此の如くなるを得るものは、其信仰と生涯との上に神格を是認したるものに限り。彼等は他を超えて天界に攝受せられ、其の中央に置かる（四三）、そは彼等は他に優れて光あればなり。彼等は天界における所謂の智者なり、達者なり、太陽の光輝の如くに輝き、星の如き光明を放つものなり。又天界における愚者おろかなるものとは神格を是認し、聖言を愛し、靈的にして有道なる生涯を営みたれども、其心の内分を文飾するに知識と學術とを以てせざりしものを云ふ、そは人の心は土地の如くして耕耘によりてその價を増せばなり。

○天界における富者と貧者の事。

三百五十七。天界の攝取に關しては種々の説あり、或は想へらく、貧者は攝受せらるべけれども、富者は然らずと、或は云ふ、貧者と富者と共に攝受せらるべしと、又云ふ、富者はその富を捨てて貧者の如くならずば攝受せられずと、而して各皆聖言によりて其説を確かめんとする也。されど天界に關して貧者と富者との區別をなすは聖言を解せざるもの也。内面より見れば、聖言はすべて靈的なれども、其文字は則ち自然的なり、故に聖言を解するに文字の義にのみ據りて靈的意義を顧みざるべき

は、之を誤解すること多し、富者と貧者の事に關しては殊に然りとす、何となれば彼等は富者の天界に入るの難きは、駱駝の針の孔を通過するが如しと想へばなり、又貧者は其貧の故を以て、「貧しきものは福なり、天國は彼等のものなればなり」（路加傳、第六章、二〇）とある如く、容易く天國に入るべしと思へばなり。されど聖言の靈的意義を少しにても知れる者は此の如く思惟せず。彼等は天界は信と愛の生涯を營むものゝためにして貧と富とに拘はらざることを知れり。されど聖言の中に誰をか富めりとなし、誰をか貧しとせずかは、次に之を説くべし。われは天人と數次の會話により、又彼等と生涯を共にしたることあるにより、此事に關しては、われに確實なる知識具はれり。曰く、富者の天界に入るの易きは貧者と異ならず、只豊かなる生涯を送りたりとの故を以て、何人も天界より却けらるることなし、又只貧なりとの故を以て何人も天界に入るを許さるることなしと。天界には貧者あり、富者あり、而して富者の中には貧者よりも一層大なる光榮と幸福とに在るもの少なからず。

三百五十八。此に先づ注意し置くを當然なりと思ふことあり、即ち人、もし詭計又は詐偽によらずして、機會あるごとに、之を利用して財を積み、富を集むるも妨なきこと、又その飲食を美にするとも、人の生涯は此の如きものより成らざるを知らば、不可なきこと、其位地に從ひて、其居を壯大にし、他人の語る所を語り、娛樂の場所に入出し、世間の事を語るも不可なきこと、必ずしも行者の如く、悲しく物哀れなる面色をなし、頭を垂るゝを要せざること、喜び樂しむ所あらば、則ち喜び樂し

むべく、又其心之を欲せざるに強いて貧人に財物を施すを要せざること等はなり。一言にして之を述べんに、人は其外面においては全く尋常世上の人の如く生息するを妨げざる也、人もし其心のうちにおいて、よろしきに随ひて神を念じ、眞實を盡くし、己を正うして隣人と交はらば、彼は世上の人の如き生活を送ることも、誰か其天界に入るを拒まんや。何となれば人の人たるは其の情動と想念とにあり、即ちその愛と信とにあればなり。一切の外的行爲は此想念と情動とより来る。之を行ふは之を志すなり、之を言ふは之を思索するなり、蓋し人として其行爲の意よりせざるはなく、その言語の想念よりせざるはなし。故に聖言の中に、人は其行爲によりて審判を受け、其事業によりて所酬あるべしと記さるゝは、彼の審判と報酬とは其想念と情動とに由ることを示せるなり。彼の行爲は此二つのものより起り来る、又は是兩つのもので行爲の中に在りと云ふべし、何となれば人の行爲なるものは全くその想念と情動との如何に存するものにして、此兩者を離れたるは行爲となすに足らざればなり。

故に知るべし、人の外的は爲す所なく、爲す所あるは只其内的にして、外的は之より来るものに過ぎざること。こは下の如くに説明し得べし。人若し法律を憚り、名聲の失墜を憚り、随ひて其地位又は利益を傷けんことを恐れて、自ら行ふこと眞實に、又他を欺瞞することなしとせば、その一旦憚る所なきに至りてや、彼は其力を盡して他を瞞せんとするなるべし。故に彼は其外面だけ眞實に見ゆれども、其想念と意志の中には一念の欺瞞心あり。此の如きは内的に不眞實にして欺瞞心あるが故に、其身に地獄を具へりと謂ふべし。されどかの神に背き、隣人に背くと云ふの故を以て、其行爲を眞實にし、他人を欺瞞することなき者は、假令其機會あらむも、決して他を欺瞞せんと願はざるべし、彼の想念と意志とは即ち彼の良心なり、彼の胸には天界ありとなすべし。此等兩種の人、只外面より見れば同一の如くなれども、その内面に至りては全然相異せりとす。

三百五十九。此の如くにして、人はその外面において、尋常一樣世上の人の如き生涯を営むべく、其地位と職業とに従ひて衣服を華麗にすべく、又娛樂をたのしみ、遊戯を事とすべく、又職業及び生計の爲めに、又は身心の逸樂の爲に、世間的諸事業を起すべし、只要する所は内に神格を是認して、隣人の幸福を願ふにあり。故に知るべし、天界の道に入るは、衆人の信する如き難事に非ざること。但し此に一の難事となすべきは、自我の愛と世間の愛とに抗して、これをして専横ならざらしむること、是なり。此二つのもは諸惡の根本となす。天界の道に入るは易くして、人の信する如くならざるは、主の所言に顯はれたり、曰く、「爾曹我に學べ、我は心柔和にして謙遜なるものなり、かくて爾曹はその心に平和を得べし、そは我軛は易く、我が荷は輕ければなり」と（馬太傳、第十一章、二十九、三〇）。主の軛の易く、主の荷の輕きは何の故かと云ふに、人は自我及び世間の愛より流れ入る諸惡に抵抗するに従ひて、自力を遠ざかりて、主の導くまゝとなるべければなり、而して尙彼の中に在

る諸悪に至りては、主その後之に抵抗して、自ら之を除き給ふ。

三百六十。われ嘗て或る人の其世にあるや、世間を捨て、殆んど孤獨の生涯を營み、かくして世累の牽く所とならず、ひまあるまゝに信心修行を勤めて、以て天界の道に入るを得べしと信せるものと、その死後相語れることありき。されど彼等は他生に來るに及びて、憐むべき性格を有するものとなれり、即ち彼等は其己に似ざるものを輕賤し、又おのれ他に優りて一層の幸福を得ざるを憤れり、蓋し彼等は之を享くる資格ありと信すればなり。又彼等は他人の爲めに毫もその心を煩はすことをせず、天界和合の道たる仁慈の諸職を厭ひてまた之を顧みず。彼等は天界を願ふこと他に勝れども、もし彼等を導きて天人の群に入るゝときは、天人の中に不安の念起りて、その幸福を亂る。故に彼等は天人と相離る、離れて自ら荒野の中に至り、此處にて世にありし時と相似たる生涯を送るなり。

それ人は世間の方便を外にして天界に入るべき資格を作り得るものにあらず、終極の所果は世間にあり、何人の情動もその止まる處は世間の上にあらざるべからず、此情動もし衆人群生の社會に發じて自ら用ゆることなく、即ち之を動作の上に注ぎ出すことなくば、此情遂に全く壓伏せられて、隣人の福利を顧ることなく、自我をのみ是愛するに至るべし。故に天界に至るの途は隣人に對して仁慈の事を行ふにありて、仁慈を離れたる敬虔の生涯にあらざるを明むべし。仁慈の事とは、何事をなし、何のわざを營むにも、正しきをなし、直きをなすの謂なり。故に仁慈を力行し、これによりて仁慈的

生涯を饒益せんとするには、必ず自ら世間的生涯に屬する諸事業を營まざるべからず、もし之を離れなば、仁慈もまた施すにどころなきなり。われ之を實驗によりて説明せんに、その世に在りし時、大小の商業を營み、之によりて有福となれるものゝ天界にあるは多けれども、自ら尊貴の地位にをり、其職掌の故を以て有福となれるものゝ天界に來るは多からず。此理由いかんと云ふに、後者は正義及び公道の執行者として、その身に利益と尊貴とを得ること多く、又有利にして名譽ある地位を他に分與するを得るが故に、彼等は遂に自我と世間とを愛することをのみ知り、隨ひて其情動と想念とを天界より轉じて自己の上のみに向くるに至りたればなり。人もし自ら愛し、世間を愛して、一切の事物の上に自己と世間とをのみ認むる時は、それだけ自ら神格を疎外にし、天界より遠離するものとす。

三百六十一。天界に於ける富者の運命は他に勝りて豊かなり。彼等の中には宮殿に住へるもありて、その宮殿中の萬物は金銀の如く耀きわたれり、彼等が其生活上の需要に應せんため用ゆるところの品類頗る多し。されど彼等は是等の事物に對して寸毫もその心を置くことなく、只何のために之を用ゆべきものなるかを知れり。彼等はその用の耀きて、光明の中にある如きを見れども、金銀に至りては彼等の眼には暗くして、日蔭にある如く見ゆ。其故は、彼等世にある時には凡そ物の用ゆべきを愛し、金の如き、銀の如き、皆只此用を遂ぐるの方便及び器具とのみ看做したればなり。されば天界にて耀くものは用なり、用の善は金の如く、用の眞は銀の如く耀くと知るべし。是の故に人の天界に

おいて有福なる生涯を営み得るは、その世にありしとき如何に物の用を看做したるかによるものとす、その歡喜と幸福と亦然らざるはなし。

用の善なるものとは、一個人に在りては、自家及び家族の爲に日常の必需品を給するに在り、その國のために富強を計るにあり、又その隣人の爲めにするに在り、而して富めるものは貧しきものよりも善をなすの方途更に多し。此の如きは人をして其心を持して偷安の生涯より遠ざからしむるが故に用の善なるものなり、而して偷安の生涯を營むものは、己れに植付けられたる惡よりして、諸の惡念を生ずるが故に、此の如き生涯は有害の生涯なりとす。また此の用は、其中に神格を有する限り善なるを得、即ち人はその心をして神格及び天界に向はしむる限り、此用のうちにわが善を發見して、財寶は只此善の用に供すべきものとすなり。

三百六十二。されど神格を信せず、天界と教會とに關する事物につきて、嘗て其心を煩はさざりし富者に至りては、其の運命前のもと同じからず。彼等は地獄界に赴きて、臭穢、患苦、缺乏と相伴ふ。貨財そのものを目的として之を愛するときは、その貨財變じて此の如きものとなる、而して此變化は常に貨財そのものの上にのみ生ずるにあらず、亦その用の上にも生ずるものとす、思ふに彼等の尙世に在るや、此貨財を濫用して、其好む所に從ひて、生を送り、情慾を縱にして、横暴、放逸、愈々出で愈々甚しかりしならん、また或は之れによりて己が輕賤せるものを凌がせんとしたるなる

べし。此の如き貨財及び此の如き貨財の用は變じて臭穢となる、そは此裡には一點の靈的なるものなく、只下界的なるもののみ存すればなり。貨財と其用のうちに潜める靈的意旨は、身體に於ける靈魂の如く、また濕へる土における天の光の如し。天の光なき貨財は腐爛す、靈魂なき肉體、天の光なき濕土の如し。是等の人は貨財に惑はされたるものにして、天界の外に放ち出さる。

三百六十三。各人所主の情動即ち愛は死後尙は殘存す、又永遠に至るまで滅ぶることあらず。そは人の心靈なるものは全く其有する所の愛如何によりて成ればなり。而して此に密意の存するは他にあらず、精靈及び天人の形體は、各、そのもの愛を表はせる外的形成にして、全然その内的形成と相應せること是なり、こゝに内的形式と云ふは、即ち彼が自然心と理性心となり。故に如何なる精靈なるかを知らんとせば、其面貌と身振りと言語とを見るべし。人間もまた此世にあるや、その面貌と身振りと言語との上に、自ら偽りを装ふことなからん人には、これによりて彼が心靈の何ものたるかを知り得べきなり。故に人は、永遠に至るまで、其所主の情動即ち愛以上に出づるものにあらざるを明むべし。

われ嘗て許されて十七世紀以前に住める諸人と相語れることありき、彼等の傳記は其頃の記録によりてよく世に知れ居れり、而してわれは彼等が今日に至るも尙以前と同一の愛を主とすること、其地上にありしときに變らざるを見たり。故に貨財を愛し、又貨財の用を愛するものは、この愛を永遠に

保存して、死後と雖、その性質を更へざること明白と謂ふべし、但相異なる所は、貨財を善用したるものには、その貨財用に從ひて化して歡喜の情となれども、之を善用したるものには、貨財化して臭穢のものとなる、而して幽靈が此臭穢物を喜ぶは、猶彼等が世にありて貨財を濫用して喜ぶるときに如し。彼等がかく汚れたるものを喜ぶ所以は、彼等が貨財を濫用して得たる淫樂と惡業、並びに其用如何に關せずして貨財を愛する貪婪の心は、正に臭穢物と相應すればなり。此外に靈的臭穢物と云ふべきものあらず。

三百六十四。貧者の天界に來るは其貧の故にあらずして其生涯の故なり。各自の生涯は、貧と富とを問はず、其人格に由る。異例の仁惠と云ふべきものあらず、彼此平等なり、善き生涯を營める者は攝受せられ、惡しき生涯を營める者は拒絶せらる。又人の邪路に赴きて天界より遠離するは、貧と富とに拘はるることにあらず。貧者の中にはおのれの運命に満足せずして徒らに多きを願求し、貨財を以て福祉となすもの頗る多し。故に彼等貨財を得ざれば、その心に怒りて神意を怨ますと云ふことなし。彼等はまた他人の好事を羨みて、機會あれば則ち他を欺かんと思ふ、またその情慾に耽るは他と少しも異ならず。されど貧に處して、而もその命に安んじ、其業を慎しみて之を勵み、逸をにくみて勞を欣び、其所行眞實にして信あり、而してこれと同時に基督教徒の生涯を送るものに至りては、大に前者と其趣を異にせり。われ時に農夫及び平民として世にをりしものと相語れることありき、彼等の

世にあるや神を信せり、而して其業を營むや正しくて直かりき。彼等は仁及び信とは如何なるものなるかを研究せり、そは彼等の心に眞を知らむとの情動けるによる、又彼等は世にあるとき信に關して聞く所多かりしが、他生に入りては仁に關して聞くところ多きによる。故に天人彼等に告げて曰ふ、仁とはすべてわが生涯に關することなり、信とはすべて教に關することなり、故に仁とは何事を爲さんとするにも正しき事及び直き事を志して、之を爲すにあり、信とはその思ふ所正しくして直きなり、信と仁との互に相和合するは、教と教に基ける生涯との如く、又想念と意志との如し、その思うて正しく直き所を意に移して行に遂ぐれば、信、仁となる、兩者は一にして二にあらずと。彼等はよく之を會得して欣べり、曰く、彼等世にありし時は、如何にしても信は行の義に外ならずと言ふを解し得ざりきと。

三百六十五。是に由りて富者も貧者もその天界に來るにおいては彼此難易なきを知るべし。或は信すらく、貧者の天界に入るは易く、富者は難しと、されどこは富者と貧者とに關して聖言の説く所を會せざるによる。聖言に富者と云ふは、靈的意義にて、善と眞との諸知識に富み、かくして聖言の存する處、即ち教會内に在るものことにして、又貧者とは、これらの諸知識に乏しけれども之を得んことを願ひ、かくして聖言あらざる處、即ち教會外に在るものを云ふなり。紫袍と細布とを著て地獄に投げられたる富人とはユダヤ人を云ふ、ユダヤの國民は聖言をもてるが故に富めり、從ひて又善と

真との諸知識に豊かなり。紫袍とは又善より来る諸知識を表はし、細布の衣とは真より来る諸知識を表はせり。而してかの富人の門外におかれ、其食卓より落つる餘屑によりてその腹を充さんと願ひ、遂に天人のために運ばれて天界に到れりと云ふ貧者は、異邦人のことを指せるなり、異邦人は善と真とより来る諸知識なけれども、彼等は之を得んと願へるものなり（路加傳、第十六章、一九より三一）。また大なる饗筵に招かれて辭退せる富者と云ふも、ユダヤの國民を表はせり、而して彼等の代りに呼ばれたる貧者と云ふは、教會外にをれる異邦人のことなり（路加傳、第十四章、一六より二四）。又主が「富めるものゝ神の國に入るよりは駱駝の針の孔を穿るは却て易し」と（馬太傳、第十九章、二四）云ひ給へる、此富者とは誰を指せるものか、次に述べべし。此文句中に富者と云ふは、自然的並びに靈的意義における富者なり。自然的意義における富者とは、貨財に富みて其心に貪著あるものを言へるなり、されど靈的意義によれば、知識と學殖とに富み、——これを靈財と云ふ、——これにより、自己の智慧を以て、自ら天界及び教會の諸事物の裡に入らむとするものを云ふ。かくの如きは神の順序に背けり、故に云ふ、駱駝の針の孔を穿るは却て易しと。駱駝とは、靈的意義によれば、一般に學殖及び知識を得る能力を表はし、針の穴とは靈的眞理をさす。駱駝及び針の穴に此の如き意義あることは今人の知らざるところなり、何となれば聖言には文字のまゝなる意義にてしるせる所にも、その裡に靈的意義の潜めることを誨ゆべき知識は、今まで啓かれたることあらざればなり。聖言には、そ

の至微なる點に到るまでも、靈的意義あり、又自然的意義ありと云ふことは、聖言なるものは、直接の和合絶えし以來、天界と世間と、又は天人と人間との間にまた和合あらじめん爲、自然的事物と靈的事物との無雜なる相應によりて書しされたるものなればなり。故に上文中富人と云へるは特に何人を指せるものなるかを明らめ得べし、聖言中、靈的意義における富人とは善と真とより来る諸知識に在るものを云ひ、貨財とは此等の知識（此れ即ち靈財なり）を言ふものなることは、處々の文句につきて見れば明白なり（即ち以賽亞書、第十章、一三、一四。第三十章、六、七。第四十五章、三。耶利米亞書、第十七章、三。第四十八章、七。第五十章、三六、三七。第五十一章、一三。但以理書、第五章、二、三、四。以西結書、第二十六章、七、一二。第二十七章、一より終迄。撒加利亞書、第九章、三、四。詩篇、第四十五章、一三。何西亞書、第十二章、八。約翰默示錄、第三章、一七、一八。路加傳、第十四章、三三、及び其他。）又靈的意義における貧者とは善と真とより来る諸知識を有せざれども、之を希ふものなることは、處處の章句につきて明らめ得べし（馬太傳、第十一章、五。路加傳、第六章、二〇。第十四章、二一。伊賽亞書、第十四章、三〇。第二十九章、一九。第四十一章、一七。西番雅書、第三章、一二、一三）。すべて是等の章句はわが「天道密意」中、靈的意義によりて説明せるを見るべし（第一萬二百二十七節）。

○天界に於ける婚姻の事。

三百六十六。天界は人類より成るが故に、天界の天人にも兩性あり、而して天地創造以來女は男のために存し、男は女のために存し、相互に主伴たるべしと定められ、又此愛は兩性の間に本來自存せる所なるが故に、天界に婚姻あるは猶地上におけるが如きを見るべし。されど天界の婚姻と地上の婚姻との間には大なる差異あり。如何なるを天界の婚姻となし、如何なる點において地上の婚姻と相違し、如何なる點に於て之と一致するかは、次ぎに説く所なり。

三百六十七。天界の婚姻とは兩つのものを和合して一心となすの謂にして、まづ此和合の何たるかを説くべし。そもく心なるものは二部分より成りて、其一を智性と云び、いま一つを意志と云ふ、而して此兩つのもの合一の動作に出づるとき之を一心と云ふ。天界にては夫は智性と呼ばるゝ心の部分を代表し、妻は意志と呼べる部分を代表す。此和合はもと内分に起る所にして、その低處の事物、却ち身體に屬する部分に下り來るとき、之を知覺し、之を感じて、此に愛なるものあり、此愛を婚姻の愛と云ふ。故に婚姻の愛は其の源を兩者の和合して一心となる處に發するや明かなり。天界にては之を呼びて同棲すると云ふ、此の如きは二にあらすして一なるが故に、天界にては一双の夫婦を兩個の天人となさずして一個の天人となす。

三百六十八。夫妻の間に兩者の根本的心力の上よりして此の如き和合あることは男女創造の眞因より來れる也、そは男の生るゝや自ら智的にして其思索は知性よりすれども、女の生るゝや自ら情的に

して其思索は意志より來ればなり、こは兩者の性行、即ち自然の性情より見ても、また兩者の形態より見ても明かなる所なり。性情より見れば、男の行動は理性的にして女のは情動的なり、またその形態より見れば、男の面は厲にして優美ならず、其聲は深くして、其身體は剛健なり、女は之に反して其面は柔かにして優美に、其聲は弱く、其身體は柔嫩なり。智性と意志との間、及び想念と情動との間にも亦此に似たる區別あり、眞と善、信と愛との間にも亦これあり。そは眞と信とは智性に屬し、善と愛とは意志に屬すればなり。故に聖言中、靈的意義によるときは、青年と成人とは眞を全得すべき智を表はし、處女と婦人とは善に對する情動を表はせり、また善と眞とに對する情動より見て教會を婦人と呼び、處女と呼び、亦すべて善に對する情動に在るものをも處女と呼べり（約翰默示録、第十四章、四における如し）。

三百六十九。男たり、女たるを問はず、何人も智性と意志とを有すれども、男にありては智性を主とし、女にありては意志を主とす、而して人の性格を定むるものは、其主とする所如何にあり、されど天界の婚姻には偏重する所なし、即ち妻の意は亦夫の意にして、夫の智は亦妻の智なればなり、蓋し互に他の志す所を志し、思ふ所を思ふが故に、兩者の想念と意志とは相互に感應し、隨ひて和合して一體となる。此和合は事實上の和合にして、妻の意志は夫の智性に入り、夫の智性は妻の意志に入る、而して此の和合は殊に彼等相互にその面を見るとき生ずるものとす。何となれば、數々言へる如

く、天界には想念及び情動の交通あるが上に、殊に夫妻の間には相愛の故に此交通更に濃密を加うればなり。是によりて天界における婚姻は如何にして成立し、この愛を惹起する所の兩心の和合とは如何なるものなるかを明らかめ得べし、即ち此の愛は互に己にあるすべてをあげて他に與へんと願ふ心なることを明らかめ得べし。

三百七十。天人われに告げて曰く、婚姻をなせる兩者の間に此の如き和合ある限り、彼等は婚姻の愛にをり、また之と同時に智恵と證覺と幸福とにをるものとなす。何となれば一切の智恵と證覺と幸福との由りて來るべき源泉、即ち神善と神眞とは主として婚姻の愛の中に流れ入るものなればなり。されば婚姻の愛は神格が流れ入る所の平面そのものなりと謂ふべし、それは同時に眞と善との婚姻なるが故なり、眞と善との和合は智性と意志との和合の如くにして、即ち智は神眞を攝受し、これによりてその智性を成就し、意は神善を攝受し、これによりてその意性を成就す。蓋し人の志すところは即ち彼が善となす所、彼が會得する所は即ち彼が眞となす所なればなり。故に智性と意志の和合と云ふも、眞と善との和合と云ふも畢竟同一なりと知るべし。眞と善との和合は天人を成就し、又其智恵と證覺と幸福とを成就す、何となれば天人の天人たるは、如何なる度まで、彼の善は眞と和合し、彼の眞は善と和合したるかにあればなり、如何なる度まで彼の愛は信と和合し、彼の信は愛と和合したるかにありと云ふも同じ。

三百七十一。主より來る神格がおもに婚姻の愛の中に流れ入るは、婚姻の愛は善と信との和合より下り來るものなればなり、何となれば既に言へる如く智性と意志との和合と云ふも、善と眞との和合と云ふも同じ事なればなり。善と眞との和合は其源を主が天界及び地上にある萬物に對して有し給ふ神愛より發す。此神愛より神善を出し、而して此神善は天人と神的諸眞にをる人々との享くる所となる、何となれば善を享くる唯一の器は眞なるが故に、眞に居らざる者は何物をも主及び天界より享くることあらざればなり、是の故に人間にある諸眞にして善と和合せる限り、彼は主及び天界と和合すとなすべし。婚姻の愛の源頭は此に在り、故にこの愛は神格の流るゝ平面そのものなり、又天界にて善と眞との和合を天的婚姻と云ひ、聖言の中に天界を婚姻に比し、又之を婚姻そのものと呼び、主を新郎又は夫と云ひ、天界と教會とを新婦或は妻と呼ぶは、みな是が爲なりと知るべし。

三百七十二。天人又は人間の中に和合せる眞と善とは一にして二にあらず、そは此時善は眞よりし、眞は善よりすればなり。此和合は人其志す所を思ひ、其思ふ所を志す時に成り立つ所の和合の如くにして、此時彼の想念と意志とは一となる、即ち一心を成す、何となれば想念は意志の欲する所に從ひて象づくりにて之を形式の上に現はし、而して意志は之に歡喜の情を附與すればなり。天界にて兩者の婚姻せるを一個の天人と呼びて兩個とせざるは之が爲なり。主が下に言ふ所はまた此意を表はせり、曰く、「元始に人を造り給ひしものは、之を男女に造れり、此故に人父母を離れてその妻に合ふ、

二人のもの一體となるなりと云へるを未だ讀まざるか。さればはや二つにはあらず一體なり。神の合せ給へるものは、人之を離すべからず。……此言は人皆受け納るゝこと能はず、唯賦けられたるもののみ之を爲し得べし」と。(馬太傳、第十九章、四、五、六、一一。馬可傳、第十章、六、七、八、九。創世紀第二章、二四。) 此に記せるは天人がをる所の天界の婚姻なり、是亦善と眞との婚姻にして、神の結び給へるを人は離すべからずと云ふは、善を眞より離すべからずとの義なり。

三百七十三。是によりて眞の婚姻は何れの處より創まるかを見得べし、即ちこはまづ婚姻を結ぶものゝ心裡に成り、之より傳はりて肉體に下り、此處に知覺ありて、之を感じて愛となるなり。何となれば肉體の感ずる所、知覺する所は、皆其源を人の靈的原方に汲ますと云ふことなければなり、そはみな智性と意志とに由來するが故に。智性と意志とは靈的人格を成すもの也。靈的人格より發して肉體の上を下り來るものは、此處にてこれと相似の形式をとりて自ら寓す、而して尙ほ兩者の間に等似あり、合同あるは、猶ほ靈魂と肉體との如く、又原因と結果との如し、こはさきに相應の事を説ける兩章に徴し見て分明なるべし。

三百七十四。われ嘗て天人が眞の婚姻の愛及びこれより生ずる天界的歡喜を説けるを聞けり、曰く、此愛は天界における主の神格にして、而して神格とは神善と神眞とが兩者の中にありて全然融合して、一體となり、また分ちて二となすべからざるを謂ふなり。又曰く、天界における兩性の婚姻が

取る所の形式は此愛にして、その故如何と云ふに、人は各、己が有する所の善と眞との上に出づることなければなり。その心に於るとその身におけると共然らずと云ふことなし、何となれば肉體は心靈の肖像にして、もと之に象とりて造られたるものなればなり。かくて天人は結論して曰ふ、眞の婚姻の愛にをる兩個の天人には神格の肖像あり、かく彼等に神格の肖像あるが故に、天界の肖像も亦此に在り、そは全天界は主より來る所の神善と神眞とより成ればなり、故に天界の萬物は此愛の上に銘記せられ、其福祉、其歡喜の饒多なること數の盡くす所にあらずと。而して天人は此數を顯はすに萬又萬を以てせり。教會は地上における主の天界にして、而して天界は善と眞との婚姻を云ふものなるに、教會内の人にして少しもこの事を知らざるは不審なりと天人は語れり。又曰ふ、姦淫が教會外よりも教會内に多く行はれて、而かもこゝに於て確定せらるゝと云ふに至りては、愕然たらざるを得ずと、蓋し姦淫の歡樂なるものは、靈的意義にて曰へば、從ひて靈界より見れば、偽りを惡しきに構はしたるを愛する歡樂に外ならざるなり。こは全く天界の歡樂に相反するが故に地獄的なり、天界の歡樂とは眞を善に和合せるを愛する歡樂なり。

三百七十五。兩個の婚姻當事者は互に相愛して內的に合契すること、而して婚姻の要點は靈魂又は心靈の合契にあることは何人も知る所なり。故に兩者の合契と情愛とは、兩者の靈魂又は心靈の情態如何によりて定まるものなることを悟るべし。蓋し人の心靈は只眞と善とのみによりて作らるゝもの

にして、宇宙における一切の事物は善と真とまた其和合とに交渉せざるはあらず、故に心靈上の合契は正に之を作れる所の諸真と諸善との状態如何によりて定まるものなるや明なり。是の故に純正なる諸真と諸善とより成れる心靈上の合契は、合契の最も圓滿なるものと謂ふべし。此に知らざるべからざるは、真と善と相愛する如くに、兩者相愛するもの絶えてこれあらざること、是なり、故にこの真善の相愛より下り來りて此にまことの婚姻の愛を生ず。偽りと惡とは亦相愛すれども、此愛は後に轉化して地獄となるものとす。

三百七十六。今婚姻の愛の起原につきて言へる所を推して考ふれば、如何なるものが其愛にをり、如何なるものが此にをらざるかを知り得べし、即ち神的諸真よりせる神愛にをるものは婚姻の愛にをるものなり。又善と和合せる諸真の純正の度に從ひて、婚姻の愛もまた純雜の差あるを知るべし。而して諸真と和合せる一切の善は主より來るが故に、主と主の神格とを是認せざるものは眞の婚姻の愛にをる能はず。此の是認なくしては、主は人に流れ入りて其裡の諸真と和合するを得ざればなり。

三百七十七。故に偽りに居るもの、特に惡よりする偽りに居るものは婚姻の愛にをる能はざるを知るべし。惡にをるもの、從ひて衆僞にをるものは其心の内分塞がれり、故に婚姻の愛を起す源は此に在ることを得ず、されど内分の下面に當り、内的人格より離れたる外的、自然的人格中に僞と惡との和合あり、此和合を地獄的婚姻と云ふ。われ許されて、惡よりせる諸僞にをるものゝ間に成立せる

婚姻、即ち所謂の地獄的婚姻なるものを見るを得たることあり。彼等は情慾よりして相語り、相和合すれども、その内面にありては、身の毛のよだつばかり相互に憎惡の念に燃え、その激烈なること、記述のかぎりにあらず。

三百七十八。婚姻の愛は宗教を異にせるものゝ間に成立する能はず、何となれば彼者の真と此者の善とは相習合せず、また相似ず、相協はざる兩個の事物をとり來りて、これを一心となさんことは得べからざればなり。此理により彼等の愛の起りは靈的なる能はず、もし兩者同棲を契ることあらむには、それは自然的原因のみ來るものとすべし。故に天界の婚姻は同一の團體内にをるものより成る、それは彼等は相似の善と真とにをればなり、一たび其團體を出づれば天界の婚姻あらず。同一の團體にあるものは善と真とにおいて相似の處あれども、他の團體とは此處なし、こは既に見たる所なり（四一以下）。イブラエル人は此事を表象せり、即ち彼等の婚姻は同種族、殊に同民族の間に行れて、其外には行はれざりき。

三百七十九。又眞の婚姻の愛は一夫と數妻との間に成立するを得ず、何となればこは兩個より一個の心を形らんとする婚姻の靈的起源を壞てばなり、故に此の如き婚姻は善と信とよりする内的和合を破れり、而して婚姻の愛の主點とする所は内的和合に存せり。一人以上と婚姻するは一個の智性を數個の意志中に分つが如く、又一人にして數個の教會に屬する如く、彼れが信仰は擾れて不信に終るべ

し。天人云ふ、數妻を娶るは全然神の順序に背くものにして、これは多くの原因、殊に次の原因によりて知るを得べし、即ち人若し數妻と婚姻せんと思ふことある時は、彼は直ちに内的福祉と天界的幸福とより遠ざかりて、恰も醉る人の如くなるべし、それは彼にある善、分裂して其真より離るればなり、只一夫數妻の事を行はんと思ふのみにて、彼の心の内分、此の如き情態に變ずるを見ても、一妻以上の婚姻は、わが内的人格を閉塞し、婚姻の愛に代うるに情慾の愛を以てするものなる事を知り得て分明なるべし、情慾の愛は人をして天界より遠離せしむ。天人又曰ふ、人間は此事を會得するに困難を感ずべし、それは純正なる婚姻の愛に在るもの少なければなり、此愛に在らざるものは此愛に在るものと内的歡喜を知ることを絶えてなし、只情慾の歡喜を知るのみ、而して此情慾の愛はしばしの同棲の後、最も嫌惡すべきものと轉化し去る。されど眞の婚姻の愛よりする歡喜は、常に此世に在りて老後にまで相續するのみならず、死後天界の歡喜となり、終に内的歡喜にみち、時を経るに従ひて益々圓滿となるべしと。天人又曰く、眞の婚姻の愛より生ずる福祉の種類は、其數、數千の上であり、されど其一人人間の知る所とならず、又主よりせる善と眞との婚姻に在らざるものは、到底之を會し得ざるなりと。

三百八十。他を凌ぎて自ら專横なるを喜ぶものは、婚姻の愛とこれより來るべき天界の歡喜とを全然滅却すべし、何となれば婚姻の愛とその歡喜とは一人の志す所即ち是れ他の志す所にして、兩者の間に相互の感應あるを謂へばなり。婚姻の情慾にありながら專横を愛するは此事を無視するものとなすべし、何となれば專横なるものは只己が意志を他に加へんことを願ひて、他の意志は己れ之を受くるを欲せざればなり。故に相互平等の關係は此間に存するを得ず、隨ひて兩者の間に愛とその歡喜との交通あらず、また交換あらず。されど婚姻の内的幸福、即ち所謂慶福なるものを生ずるは、實にこの交通にあり、隨ひて其和合にあるなり。專横を愛するものは全然此慶福を亡ぼし、之と共に婚姻の愛のうちに存せる一切の天界的、靈的なるものを亡ぼし、この愛そのものゝ存在をすら知らざるに至るべし。若し之を説くものあらむも、彼はこれを侮蔑して顧みる所なく、また其慶福なるものを説くとも、彼は只或は嘲笑し、或は怒罵するに過ぎざるべし。

他の爲す所を己れも亦志し、或は喜ぶときは、この兩者は共に自然的なりと謂ふべし、一切の自主は愛よりす、されど專横ある所には何人も自主たるを得ず、甲は乙の奴隸となるべし、專横を行ふものにも亦自主なし、何となれば彼は專横ならむとの慾念に使役せらるること、猶ほ其奴隸の如くなればなり。こは天界の愛の自主的なるを知らざるものゝ少しも會得する能はざる所とす。されどさきに婚姻の愛の起原及要點につきて言へる所を推すときは、專横在る處には心の和合なくして、たと分裂あることを知り得べし。專横は服従を要す、而して服従せられたる心には意志なし、即ち之に反抗する意志なし、意志なければ愛あらず、若し反抗の意志あらば愛は轉じて憎惡となるべし。此の如き婚

姻をなすものは、たとひその外分を制抑して静謐を装ふことあらんも、其内分は常に相衝突して鬭争を事とすべし、是れ相反せるものゝ常なり。彼等が内分の鬭争及び衝突は死後に至りて公然の事實として現はる、其相逢ふや、仇敵の如く争ひて、互に碎裂せざれば已まざるを常とす。何となれば其時彼等は只内分の情態にのみよりて行動すればなり。われ時に許されて此鬭争及び迫害を見たるうちに、怨仇、残忍の例少なからざりき。何となれば他生にては人各その内分のまゝに生息するが故に、内分は毫も約束せらず、外面の商量及び世間の事由によりてまた自ら矯むるが如きことなければなり。

三百八十一。人によりては婚姻の愛に似たるものを有することあり、されど彼等若し善と眞との愛にをらざれば、其愛は婚姻の愛にあらず、たゞ數多の事由によりて婚姻の愛の如く見ゆる一種の情に過ぎず、例令ば彼等の家にあるや給侍ることあるべく、其世を送ること或は安全なるべく、其病む時、又は老後に至りては、他のために看護せらるることあるべく、其子孫を愛して之が利福を計るもあるべく、又或は他を憚り、或は名聲の失墜を憚り、或は效果の不善ならんを恐れて、自ら制することもあるべく、又或る場合には情慾上の打算よりして外面を保つものもあるべし、されど是皆必ずしも婚姻の愛にあらず。婚姻の愛は又兩個の當事者間においても、相同じからざることあらん、即ち一人は多少此愛を有せんも、他は殆ど悉く之を缺くも圖られず、かくて一人は天界を得れども、他は地獄を得ることなきにあらざるべし。

三百八十二(イ)。純正なる婚姻の愛は最奥の天界にあり、此天の天人は善と眞との婚姻にをり、又無垢にをり。劣等の天界にある天人は、其無垢なる度に従ひて亦婚姻の愛にをり、何となれば婚姻の愛は、其自性より見れば、無垢の状態なればなり。是故に婚姻の愛にをる婚姻當事者は天界的歡喜を樂しめり、彼等の心中に此樂しみを樂しむは猶ほ幼兒が無垢の嬉戲を樂しむが如し、何となれば物として彼等の心を樂しましめざるはなければなり、これ彼等の生涯に屬する一切の事物の上に天界とその悅樂と共に流れ入るが爲なり。故に婚姻の愛を天界にては美を極めたる事物にて表像せらる。此愛が、輝ける雲に纏はれて美妙言ふべからざる一少女によりて表像せらるるを、わが見たることあり、之をきく、天界においては天人は婚姻の愛よりして一切の美を獲得すと。此愛より流るる諸情動及び諸想念は金剛石の如き光を放てる氣體にて表像せらる、其輝くこと夜明珠の如く、紅寶石の如し、而して之に伴へる歡喜あり、心の内分を動かす。一言にて盡くせば、天界は婚姻の愛のうちに見す、何となれば天界と天人とは共に善と眞との和合にして、此和合は即ち婚姻の愛を成せばなり。

三百八十二(ロ)。天界の婚姻と地上の婚姻と相異なる點は、地上の婚姻は子孫を獲んために定められたるものなれど、天界の婚姻には此事なきに在り。天界には子孫の生殖に代うるに善と眞との生殖を以てす、その所以如何となれば、上に言へる如く、天界における婚姻は善と眞との婚姻にして、此

婚姻には善と真と其和合とを、すべてに勝りて愛すべきものとなせばなり。故に天界の婚姻によりて繁殖するはすべて此種の事物なりとす。聖言中の出産及び生誕は、靈的出産及び靈的生誕の義にして、すべて真と善とに關せざるなきはこれがためなり。父母と云ふは真と善との和合して子孫を生殖する義にして、男女の子孫とは此和合より産れ出でたる諸眞、諸善の義、女婿及び嫁とはまた此等の諸眞諸善の相和合するの義なり、以下準之。是故に天界の婚姻は地上の婚姻の如くならざるを明にすべし。天界には靈的婚媾あり、されどこは婚媾と云ふべからず、只善と真との婚姻により心靈上の和合あるのみなればなり。されど地上には婚媾あり、何となれば地上における婚姻は心靈上ののみ行はれずして、肉體の上にもまた和合あればなり。既に天界には婚媾なきが故に、婚姻當事者を呼びて夫妻と云はず、天人の概念中に二つの心を合して一となすの義を言ひ顯はせる語あり、之にて婚姻當事者を呼ぶ、此語は兩者に共屬して相互感應するの義を現はす。これによりて主が婚媾につきて言ひ給へる所を如何に解すべきかを知るべし（路加傳、第二十章、三五、三六）。

三百八十三。われは又許されて、天界における婚姻は如何にして行はるゝかを見るを得たり。天界にては到る處、性情相似たるものは會同し、相似ざるものは別居せり。故に天界の各團體は皆性情相似たるものゝ集りなり、相似たるものは己れによらず、主によりて相牽引するが故なり（四一、四三、四四及びその以下を見るべし）。同理によりて、婚姻當事者の心は相和合して一となり得るが故に、

亦互に相牽引す。故に彼等は其始めて相見るとき、既に相愛の情あり、互に直にその婚姻の當事者たるを見得し、其心の内底よりして婚姻を結ぶものとす。故に天界の婚姻はすべて主のみよりすると知るべし。彼等はまた婚姻を祝して饗筵を張る、集り來る者頗る多し。此饗筵は團體によりて異なれり。

三百八十四。地上における婚姻は、常に人類のみならず、亦天界の天人を養育する所以なるが故に、（天界は人類より成ることは上に見たる如し、）又其起原は靈的にして、善と真との婚姻に由來するが故に、而して又主の神格は先づ此婚姻の愛の上に流れ入るが故に、天界の天人より見れば、地上の婚姻は最も神聖なるものなり。之に反して彼等は姦淫を以て褻瀆となす、そは婚姻の愛に反けばなり。天人は婚姻の上に善と真との婚姻を認むれども、（是れ即ち天界なり、）姦淫の上には偽りと惡との婚姻を認むるのみ、これを地獄となす。彼等は姦淫の名を聞くに之を忌みて其面を背けずと云ふことなし、姦淫を楽しみて行へるものゝために、天界の閉鎖せらるゝは是がためなり。かく天界の閉さるゝ時、姦淫者はまた神格を是認せず、教會の信仰をも是認せず。

地獄にあるものは皆婚姻の愛に反けるものなることは、わが許されて見るを得たるどころなり、そは彼等より發し來る圓相は斷えず婚姻を崩壊し、毀傷せんとする努力なるを見て知るべし。是に由りてわれは地獄界が主として喜ぶ所は姦淫にあることを明め得たり、姦淫を楽しむは善と真との和合を破るを楽しむなり、これ天界は此の如き和合より成ればなり。故に知る、姦淫の快樂は地獄の快樂に

して、天界の歡樂をなせる婚姻の歡樂と全然相反することを。

三百八十五。一部の精靈あり、其肉體の生涯を營めるとき、自ら獲たる實習の力により、特種の偽巧を用ゐて、善意ある精靈より來るが如き、柔和にして且つ波に似たる内流を送りて、われを犯さんどせり、されどわれは其中に計略あり、又人を陥れ且つ欺かんとするものあるを知覺したり。われ遂に其の一人と物言ひしに、彼云ふ、彼は世にありし頃は一軍の大將なりしと。われ彼が想念中にある諸概念の下に情慾の念の潜めるを知覺したるが故に、表像を用ひ、靈的言語によりて彼と婚姻の事を誤れり、此の表像の裡には人の言はんと欲する所を充分に含めるが上に、多數の概念を瞬時に傳へ得べきものあり。彼曰く、肉體の生を送れるとき、彼は姦淫を以て何ほどのこととも思はざりきと。されどわれ許を受けて彼に語りて云ふ、姦淫を行ふものは、これよりする快樂とその刺激に驅らるゝとの故を以て、嘗に之を嫌惡するに足らずとなすのみならず、却て之を恕し得べしと思ふべからむも、その實姦淫は最も厭ふべきものなり。彼若し婚姻は人類のため、隨ひて天界における國土のための養育院なるが故に、如何なる場合にも之を破るべからず、必ず神聖視すべきものなるを知らば、彼は自ら姦淫の厭ふべきを確認すべし。彼は今や既に他生にありて、知覺の情態に在るが故に、婚姻の愛は天界をへて主より下ること、この愛は父母の如くにして、之より天界の基礎となるべき相互の愛を生むこと、又姦淫者は天界の諸團體に近づくのみにて、自己の惡臭を知覺し、其處より驀直に地獄に墮

落することを知るなるべし。果して之を知らば姦淫の厭ふべきは自ら明かなるべし。少なくとも、彼は婚姻を破るは神の法令に背き、萬國の民事法に背き、又純正なる理性の光に背くことを知るなるべし、是れ神と人の法則に背けばなり。其他尙數多の事由の斟酌すべきものあれども、今悉く之を言はざるべしと、わが語れるに彼答へて曰ふ、彼は肉體の生を送れるときは是等の事に考へ及ばざりきと。而して彼はその果して然るかを論究せん願へり、されどわれ云ふ、眞理は論究を許さず、論究は己れに快しとする所を回護するに過ぎず、隨ひて諸惡及び諸偽を回護するに過ぎず、汝が先づ心に念すべきは、わがさきに言へる所なり、何となればそは眞理なるが故なり。而して汝はまた世間に知れ渡れる原理によりて思索せざるべからず、この原理と云ふは、他の己れに爲すを欲せざる事は亦之を他に爲すべからずと云ふことこれなり。此に一人の姦淫者ありて、汝が愛せる女を欺けりとせよ、(何人も婚姻の初に其妻を愛せざるはなし、)而して彼は一時の怒りに任せて此事を語り出でたりとせよ、汝もし之をきかば自ら姦淫を惡むに至ることなかるべきか。強き意志の人として、汝は他の人に勝りて姦淫者を攻撃し、之を責罰して地獄にも赴かしめんとは思はざるか。

三百八十六。如何にして婚姻の愛よりする歡樂は天界に向ひて進み、姦淫の快樂は地獄に赴くかをわれに示されたり。婚姻の愛よりする歡樂は天界に進み向ひて益、福祉多く、幸榮多き情態に入りて止まるるときなく、その福祉と幸榮との數量は遂に無限となり、到底言語の盡くし難き所となるに至る

べし、而して此歡樂の益、内的となるに従ひ、無量無數、言語道斷、遂に無垢の天界、即ち最奥の天界における福祉及び幸福そのものとならざれば止まざるべし。而してすべて此の如くなるに、始めより最も完全なる自由あり、何となれば一切の自由は愛よりすればなり、故に最も完全なる自由は婚姻の愛より來る、此愛即ち天界の愛なり。されど姦淫は地獄界に向ひて進行し、中途にして止まることあらず、此最下の地獄界には最も恐るべく、最も寒心すべきものゝみをれり。此世を終へて後、姦淫者の上にかゝれる運命は此の如きものとす。姦淫者とは姦淫を喜びて、婚姻を喜ばざるものゝ謂なり。

○天界における天人の職務のこと。

三百八十七。天界の庶務は、團體の職掌に従ひて、その數無量、その様一ならざるが故に、今悉く之を枚舉し精述すること能はざれども、全般に關しては少しく記す所あるべし。團體は各、その職掌によりて司ざる所を異にせり、そは團體の分割は其のをる所の善如何によればなり（上を見よ、四一）。團體はまた用によりて分割せらる、天界にをる者が有する諸善とは、善の働きにして、是れ即ち用なればなり。天界にては何人も用を爲さずと云ふことなし、主の國土は用の國土なるが故に。

三百八十八。天界には、地上における如く、數多の統治制度あり、こは天界にも宗制、民事、家政の事務あればなり。天界に宗制あることは、前きに禮拜の事を説き示せる處を見れば明かなるべく（二二

二五より二二七）、民事あることは、天界の統治制度に關して説き示せる所を見れば明かなるべく（二二一より二二〇）、又家政あることは、天人の住宅及び家庭に關して言へる處、及び天界の婚姻につき言へる所を見れば明かなるべし（三六六より三八六）。故に天界の各團體中には數多の職掌あり、統治制度あるは明白なりと謂ふべし。

三百八十九。天界における萬づの事物は皆神の順序に従ひて施設せらるゝものにして、天人の司政は此順序を到る處に警衛するに在り、即ち證覺多きものは全般の福利又は用に關する事務を經理し、證覺少きものは一部の福利又は用に關する事務を經理す、以下準して知るべし。一切のもの皆一定の秩序を守りて是に服従せざるはあらず、猶ほ諸、の用が神の順序を守りて之に服従するが如し。故にまた用の威重に従ひて各職掌に附隨せる威重あり。されど天人は此威重を私することなく、悉く之を其用に歸す、用とは即ち天人が所行の善にして、而して一切の善は主よりするが故に、天人は一切を舉げて之を主に歸す。故に自己の尊貴を先にして其用を後にするもの、即ち其用を先にせずして自己を先にするものは、天界において如何なる職をも司ざるを得ず。何となれば彼は己れを先にし用を第二となして、主を己が背後に置けばなり。用と云へば即ち主を意味することは、先に言へる如く、用は善にして、善は主よりすればなり。

三百九十。天界における服従とは如何なるものかは、次の事由によりて推知すべし、即ち各人は用

を愛し、崇び、且つ敬ふが故に、其用に伴へる人をも愛し、崇び、且つ敬ふなり、而して其人の愛せられ、崇ばれ、敬はるゝは、其用を私せずして、之を神に歸する度に比例す。何となれば此度に比例して彼に證覺あり、彼が遂行する所の用は善より來ればなり。靈の上よりして之を愛し、崇び、且つ敬ふと云ふは、其人にある所の用を愛し、崇び、且つ敬ふの義に外ならず、而して用によりて人の譽れあり、人によりて用の譽れあるにあらず。靈の眞よりして人を見るものは皆此の如き看をなさざるはなし、何となれば人の人たるは各人相同じく、其尊貴の大小に拘はることなければなり。各人の間に相異を生ずるは、只證覺の如何にあり、證覺とは用を愛するなり、即ちまた或は同志の徒、或は團體、或は國家、或は教會に屬する善徳を愛するなり。主に對する愛また此中にあり、何となれば一切の善は（善とは用の徳なり、）主よりすればなり。隣人を愛すると云ふも亦此の如し。何となれば隣人とは同志の徒、團體、國家、教會の中にある善を義とし、此善を愛し、此善を他に對して行ふを以て隣人に對する愛となせばなり。

三百九十一。天界における各團體は其用を同じうせず、即ち先きに言へる如く（第四十一節及び以下）、團體は其善を同じうせず、此善とは善の活動せるを云ふ。即ち仁惠の諸徳を云ふ、これを用となす。嬰兒の保育を司られる團體あり、其生長するに従ひて之を誨へ、之を諭す團體あり、世間の教育によりて、よき性情を有し、遂に天界に來れる男女の小兒を、また前者の如く誨へ諭す團體あり、

基督教より來れる率直にして善良なるものを教ふる團體あり、之と同じく異邦人よりせるものを教へ導く團體あり。又新來の精靈、即ち新に世間より來れる精靈をして惡靈のために襲はれざるやう之を保護する團體あり、或は靈界の下方にある精靈と隣居し、或は地獄界にある精靈と隣居し、彼等をして規定の範圍外に出で、他を惱ますを拒ぐあり、又死より甦らむとする者と共なれる團體あり。概して言へば、各團體の天人、人間の中に派遣せられて、彼等を守護し、彼等をして惡しき情動とこれより來る惡しき想念より遠離せしめ、又彼等が自主の心を以て享けんと願ふ程の善き情動は悉く之を彼等に賦與する也。天人はまた此の如き情動によりて人間の行爲、事業を支配して、出來得るだけ彼等をして惡しき企謀を抱かざらしむ。天人の人に伴へるときは、其人の情動中に住へるが如き者あり、而して天人は人の眞よりせる善にをる限り、その人の傍にをれども彼にして一たび善を遠ざからむには天人は其身を離るべし。されど此の如き天人の勤務は主が天人を経て行ひ給ふ所の職掌なりと云ふ所以は、天人が此等のことを行ひ遂ぐるは、己れによらず、主によりて然るを得ればなり。故に聖言の中に天人とあるは、其内義によるときは、天人そのものを言ふにあらずして、主のことに關するものなるを悟るべし、故に聖言には天人を呼びて諸神となせり。

三百九十二。以上の諸勤務は天人の全體に通せる職務にして、各天人には又個々の義務あり、何となれば全般に涉れる用は各、媒介の用、服事の用、隨屬の用と云へる無數の用よりなれば也。一切の

用は悉く神の順序に従ひて相調和し、相從屬せずと云ふことなし。之を總括して、一般の用、即ち一般の福利を爲し遂ぐるものとす。

三百九十三。天界にて教法上の事を行ふものは、其世に在りたるとき聖言を愛し、好んで其中の真理を求め、名譽又は利益の念なく、只人生の用を遂げて、自他のためにせんせざるものなり。彼等はいく用を愛し、用を希ふ度によりて照光のうちにある、天界における證覺の光明のうちにある、蓋し彼等は聖言によりて天界の光明のうちに來れるもの也、而して天界に在りては此聖言は下界における如く自然的ならずして靈的なるは既に見たる所なり(二五九)。天界にて教師の職に當るものは彼等なり、彼等は他に優りて觀照より來る證覺を有するが故に、神の順序に従ひて其位地高し。

民文の事に與れるものは、其世にあるとき、國家を愛し、公利を先にして私利を顧みず、正しき事直き事を爲すに、只之を愛するの一念よりせるものなり。此く正しきを愛する一心より、正義に關する律法を研査し、依りて以て其智恵を増すに至りたるものは、これがため天界における行政の事務を司る能力を獲たるものとすべし。而して彼等はその人の智恵の在る處の度に應じて事務を處理せしむ、而して此智恵の度はその人が公利のために用を愛するの度に比例す。

是外天界には數多の官職あり、政事あり、また勤務あれども、一々之を枚擧せんは其の煩はしきに堪へず。此の如く多しと雖も、天人は各その用を愛して、己を顧みず、利害を外にするが故に、其事

に従ひ、その勞に服するを喜ばずと云ふことなし。又何人も其生計のために利を謀らむとするものなし、そは一切の生計に必要なもの、即ち家屋、衣服、食物の如きは、すべて給與せらるればなり。故に知るべし、自己及世間を愛すること、用に過ぐるものは、天界に之くと雖居るに處なきことを。そは人の愛、即ち情動は死後に猶存して、永久に至るも決して亡びざればなり(三六三を見よ)。

三百九十四。天界にて各人の其職に従ふは相應によれり、されど其相應はその職に由らずして、其の用に由れり(一一二を見よ)、而して一切の事物のうちに相應あることは第百六節を見るべし。天界にて其用に相應して職を掌り又は事に従へるものは、其生涯の情態、恰も世に居れるときのごとし、何となれば靈的なるものと自然的なるものとは相應によりて一となればなり、されど此に相異の點あるは、天界にては、人みな靈的生涯、即ち内的生涯を送るが故に、彼が歡樂の情は一層内的にして、隨ひて一層天界の福祉を受くるに堪ゆとなすべし。

○天界の悦樂と幸福のこと。

三百九十五。天界とは如何、又天界の悦樂とは如何、これを知る人、今の世に極めて稀なり。此事につきて思惟せるものと雖、その有する所の概念は頗る散漫粗大にして、殆んど概念と云ふに足らざるほどなり。此世を出でて他生に行ける精靈よりして、われは彼等が嘗て天界及びその悦樂につきて

有せる思想の如何なるものなりしかを充分に知り得たり。何となれば彼等世にある時の如く只獨り思ふ所あるときは其の想念亦昔時に還るべければなり。天界の悦樂の何たるかを思惟して、而かもその實相を知らざるものあるは、彼等只自然的人格に屬する外的悦樂を基として、之より推斷せんとするによるなり。彼等は内的即ち靈的人格の何たるかを知らざるが故に、また其悦樂と福祉との何たるかを知らず。靈的、即ち内的悦樂に在るもの、彼等に語るに天界的悦樂の實相を以てするも、彼等は之を會し得ざるべし、何となればこは彼等が未知の概念に屬するが故に、彼等の知覺に入ることあらず、即ちこは自然的人格が拒絶する諸事物の一なるべし。されど人一たび外的即ち自然的人格を脱すれば、内的即ち靈的人格となることを知れるならむ、さればまた天界の悦樂の内的且つ靈的にして、外的且つ自然的ならざるを知り得べし。此悦樂は内的にして靈的なるが故に、一層純粹、一層精妙にして人の内分を動かす、内分とは人の靈魂又は心靈より成る所なり。只これのみによりても、他生における悦樂はその人の靈魂と質を同じうするものなることは、何人も推し得る所ならむ。又身體の上の悦樂は之を肉の喜びと呼びて、敢て天界の比すべからざるを知り得べからむ。人の心靈其身體を去るとき、死後尙存して亡びざるものは、その心靈のうちに在りたるもののみなり、そは彼は是より人靈として生くべければなり。

三百九十六。一切の悦樂は愛より流れ出づ、何となれば人愛する所あれば、彼はその上に悦樂を感

すべく、而して此悦樂の情は此以外の源泉より出で來ることなければなり。故に其人の愛する所を見て、その悦樂の何たるを知り得べし。身體即ち肉の喜びは自己の愛と世間の愛とより流れ來るが故に、この喜びは感覺の情慾とこれよりする快樂なり。されど心靈又は靈魂の悦樂は主に對する愛と隣人に對する愛とより流れ出づるものにして、此兩個の愛は善と眞との情動の源なり、また内的満足の依りて來る所なり。此等の諸愛とこれよりする悦樂とは共に主より流れ入り、内邊の途を傳はりて、天界より來りて人の内分を動かす、此内邊の途とは上方よりの途なり。然るに自己及び世間の愛と其の快樂とは外邊の途よりして、肉及び世間より流れ入り、外分を動かす、此外邊の途とは下方よりの途なり。是の故に人は天界の兩愛を享けて之が感動する所となるに隨ひて、靈魂又は心靈の上に存する内分啓かれ、世間を離れて天界に向ふべし、されど人若し世間の兩愛を享けて之が感動する所となれば、其感動の度に隨ひて、身體又は肉よりなれる外分啓かれ、天界を離れて世間に向ふべし。愛、人のうちに流れ入りて、之を受くると同時に、其悦樂も亦流れ入る、即ち天界の悦樂は内分に、世間の悦樂は外分に流れ入る、そは前に言へる如く、一切の悦樂は愛よりすればなり。

三百九十七。天界そのものは諸々の悦樂にて滿てり、故に其自相より見れば天界は福祉及悦樂に他ならずと謂ふべし、何となれば天界と此處に在住するものとは、全般の上において、又個々の上において主の神愛より來る所の神善によりて成るものなればなり。而して神愛とは最奥の原則により心を

盡して一切の救済と幸福とを願ふの謂なり。故に天界と云ひ、天界的悦樂と云ふも畢竟同じ事也。

三百九十八。天界の諸歡樂は無數にして、また言語の悉くし得る所にあらず、此の如く無數の歡樂あれども、身體又は肉の樂しみのみに耽るものは、其一をも知るを得ず、又信するを得ず、そは前に言へる如く、彼の内分は天界を離れて、世間に向ひ、かくして後向うしろむきとなり居ればなり。全く身體又は肉の快樂にをるもの、即ち己れを愛し、世間を愛するものは、名と利と、身體及び諸感覺の快樂との外に歡樂すべきものあるを知らず、而して此等の快樂は天界に屬する內的歡樂の情を消滅し、且つ窒息して遂に之に對する信仰を全滅するに至る。故に彼等もし名と利とを好むの情を除きて尙その外に歡樂すべきものありときくときは、驚くこと甚し、まして此に繼ぎて來るべき天界の歡樂は無數にして、身體及び肉の上の樂（こは重もに名利の樂しみなり）に比すべくもあらずと云ふをきくときに於てをや。故に知るべし、何が故に世には天界的悦樂の何たるを知るものなきかを。

三百九十九。天界の歡樂の大なることは、在天の人は皆己の歡樂と福祉とを他に傳ふるを以て樂しみとせざるはなきにて知るべし。在天のもの皆此の如くなるが故に天界の歡樂の如何ばかり大なるや明かなり。そは上に示せる如く（二六八）、天界には一切と個人、及び個人と一切との間に交通あるに由る。此の如き交通は天界の兩愛より流れ出づ、兩愛とは前に云へる如く主に對する愛及び隣人に對する愛なり。是等の愛は常にその歡樂を他に傳達せんとす。主に對する愛の此の如くなるは、主の愛とは彼が所有を舉げて一切に傳達せんとし給ふに由る、何となれば主は總ての人の幸福を願ひ給へばなり。此の如き愛はまたすべて主を愛するものゝ心のうちに在り、そは主彼に居ませばなり、而して諸天人が互にその歡樂を他に傳へんとするは是がためなりと知るべし。

自己を愛し、世間を愛するものは之と異なれり。自己の愛は一切の歡樂を他より引き離し、奪ひ去りて之を自己の身の上のみ集めんとす、蓋し自愛は己のみ好からむことを欲すればなり。而して世間の愛は隣人に屬する所のものを奪ひ來りて、之をおのれが所有となさんとするが故に、此等の愛は他の歡樂を破滅するものとなさざるべからず。また此の如き愛にをるもの、その歡樂を他に傳へんと思ふことあるも、その動機は固より自己のためにして他人のためにあらざるが故に、他よりこれを見れば、彼の樂みは他に傳はらずして、却て吾樂みを破ることあるべし。但し彼の樂みとわが樂みと相異なるか、又は其中にある時を除く。自己の愛と世間の愛と、その力を擅にするに當りてや實に此の如きものあるは、わが活ける經驗によりて知る所なり。その世にありて人間の生涯を營めるとき、此の如き愛にをりたる精靈あり、彼等われに近づき來る毎に、わが歡樂の減退し、消失するを覺えたり。われきく、此の如き精靈は天界の團體に近よらむとする丈けにて、其團體にあるものゝ歡樂を減少し、而して此減少の多寡は此の如き精靈の所現力の程度に比例すと。こゝに奇とすべきは其時惡靈は心に歡喜を感ずること也。されどかくの如くして此のものは、その尙肉體中にありしとき、如何

なる靈魂の情態に居たるかを暴露したり、何となれば精靈の状態はその身體より分離したる後も尙當時の状態と相等しければなり、即ち彼は他人の歡樂又は福利を羨み願ひて、己また之を得るにあらざれば歡樂を感ぜざればなり。是によりて知るべし、自己と世間とを愛するものは天界の諸歡樂を破滅し、隨ひて常に他に傳はらむことを欲する天界の愛と全然相反することを。

四百。されど此に注意すべき一事は、自己及び世間を愛するものが、天界の團體に近づくとき、其心に感ずる歡樂は彼等が情慾の上の歡樂にして、天界の歡樂と全く相反することこれなり、彼等は天界の歡樂に住するものをして其歡樂を失却せしめ、或は遠離せしむる時、自己の情慾の満足を得る也。されど彼等もし此く他人の歡樂を失却遠離せしむる能はざる時は彼等は喜ばず、何となれば彼等は此時天人に近づくを得ず、近づけば則ち直に苦悶と痛傷とを感ずべければなり。故に彼等が天界に近より來るは極めて稀なり。是はわが許されて屢、實見せる所なれば、今一二の例を擧ぐべし。

精靈の、世間より他生に來るや、その最も熱烈に願ふ所は、天界に至らむとすることなり。殆んどすべての精靈みな此處に入り來らむことを望むは、何故かと云ふに、彼等は只天界は導き入れられ、攝受せらるればそれにて足るものと思へばなり。この故に彼等はその願に任せて、先づ最下の天界における一團體中に導かるべし、されど自己及世間を愛するものは、其天界の第一關に近づくや、直ちに苦痛を覺えて、其内分の煩悶甚しく、其心中には天界を感せずして却て地獄界を感ずべし、かくて彼

等は其處より蕩直にその身を投下するか、又は地獄界に至りておのが同類中に入らざれば休息せず。

又此の如き精靈にして天界の歡樂の如何なるものなるかを知らむと願ふこと屢、これあり、而して此歡樂は天人の内分に存すと云ふを聞きて、己れまたこれが傳達を得んと願ふ、而してまたその願の如くなることあり、何となれば天界にも行かず地獄にも行かざる精靈は、その遂に或は善果を結ぶに至らんことを思ひて、その願のまゝ許さるべければなり。されどこの交通の彼等に許さるゝに及びてや、彼等は心に苦悶を感じて其痛みに堪へず、如何に其身を轉回すべきかを知らざるに至る。われは彼等が其頭を足の下に投げ込み、五體を地に投げ、而かも尙内分の苦に堪へざるや、蛇の如く其身を彎曲して轉轍するを見たり。天界の歡樂が自己及び世間を愛してこれより歡樂を得んと欲するものゝ上に生ずる所の結果は此の如きものとなす。何となれば此等の愛は全然天界の愛と相反すればなり、而して相反するものは相闘ぐが故に、此の如き苦悶あり。又天界の歡樂は内方の途より傳はり來りて、之と反對せる歡樂の中に流れ入るにより、此歡樂の中にをるものゝ内分は、之がために轉回して後面に向ふ、即ちかくして自ら反對せる方向に轉回するが故に、此の如き苦痛あるものとす。此の如き兩者の反對あるは、上に言へる如く、主に對する愛及び隣人に對する愛は總て己が所有を他に傳へ與へんとすれども、(是即ち其歡樂なり、)自己及び世間の愛は他の所有を悉く奪ひ去りて、之を己れに引き取り、引き取るに従ひてその歡樂をませばなり。地獄界は何故に天界より隔離せるかは此事由

によりてまた知るを得べし。地獄に在るものはすべて其世にあるや、自己と世間とを愛して、只管身體及び肉の快樂に耽りしものなり、然るに天界に在るものは其世にあるや、主を愛し、隣人を愛して、心靈及び靈魂上の快樂に住したるものなり。此等兩種の愛は相反するものなるが故に、天界と地獄とは全く隔離して、地獄に在るものは、これ以外に一指を出すを敢てせず、又その頂を擡ぐるを敢てせず、もし僅に之をなせば懊惱、苦悶その身を措く所なからんとすべし。これ亦わが屢見たる所なり。

四百一。自己及び世間を愛するものは、其肉體の生涯を營むかぎり、其愛より來る快樂を感じ、又これよりする種々の快樂に住すべし。されど神を愛し、隣人を愛するものは、其肉體の生涯を送れるうちには、是愛より起る快樂とこれよりする善き情動に伴ふ所の快樂とをあらはに感ずることなく、只一種微細なる福祉を覺るのみなり、何となれば此福祉は彼の内分に蓄積せらるゝ所にして、肉體に屬する外分これを蔽ひ、此世の思慮わづらひこれを鈍とんむればなり。死後に至りて此情態全く一變す。自己を愛し、世間を愛するより來る快樂は一變して苦惱と畏怖となり、之を地獄の火と呼ぶ、而してこれによりて彼等の快樂はその汚れたる快樂に相應せる臭穢汚濁の糞土に轉化す、而かも奇とすべきは、是時彼等之を樂しむこと是なり。されど神を愛し、隣人を愛せるものは、その世にありたる時、微かに覺へたる快樂と僅に感じ得たる福祉とを一轉して天界の快樂となし、今や往くとして明かに之を覺へ、之を

感せずと云ふことなきに至る、何となれば彼等世にありし時、其外分に蔽はれながら内に蓄積したる福祉は、其時現前して、顯著なる感覺となるべければなり。彼等は今や靈にをれり、而してその感ずる所は靈の快樂なり。

四百二。天界一切の快樂は用と和合して、その中に在り、そは用とは天人が居るところの愛及び仁の諸徳なればなり、故に各人の快樂は其用に依るものにして、その快樂の等差はまた用に對する情動の如何によるものとす。天界の快樂はすべて用より來る快樂なる事は人間の五官に比較して明かなるべし。感官は各、其用、即ち視、聽、嗅、味、觸の用によりて其快樂を全うするものにして、各官に特有の樂みあり、視覺は形の美なるを樂しみ、聽覺は音調の和せるを樂しみ、嗅覺は香の快きを樂しみ、味覺は味の美なるを樂しむ。諸感官が種々に遂げ行ふ用に至りては、之を研究したる者の知る所なれど、相應の事理に悉しき者の之を知ること更に精なるには如かず。視覺に此くの如き樂しみあるは智性即ち内視のために其用を遂ぐるにより、聽覺に此くの如き樂しみあるは智性と意性とのために聽く所ありて、其用を遂ぐるにより、嗅覺にかくの如き樂しみあるは腦髓と肺臟とのために其用を遂ぐるにより、味覺に此くの如き樂しみあるは胃腑のために其用を遂げ、隨ひて全身に營養を供するによるなり。婚姻より來る快樂は、觸覺の頗る純にして精妙なるもの、其用の故を以て、その樂しみ他に勝れり、その用とは人類の繁殖、隨ひて天界における天人の繁殖もまたこれによるを云ふなり。是等の

歡樂は天界よりの内流によりて諸の感覺の上に存せり、而して天界における各種の歡樂は皆用に依り、用に従ふものとす。

四百三。世上の流説に従へる一部の精靈は以爲らく、天界の幸福とは一種の閑生涯にして、只人に服侍れて無事に送るべきものなりと。されど天人は彼等に告げて曰ふ、只無事、無作なるを幸福とすべからず、また之によりて幸福を求めんとすべからず、何となれば各人皆他の幸福を以て己が有となさんと願ふべければなり、而して何人も此の如き願を抱かざるはなきが故に、何人も之を達し得ざるべし。此の如き生涯には活動なくして、只弛怠あり、諸官能は休歇して少しも動かす。されど幸福なるものは活動よりのみ來るものなることを知らざるべからず、活動を停止するは更に氣力を鼓舞し、また活動の生涯に歸らむため、只一時の休養をなすにすぎず。其後數多の證據によりて、天人の生涯は仁惠の諸徳即ち用を成し遂ぐるにあることを示されたり、天人の一切の幸福は此用のうちにあり、用よりしてあり、用に隨ひてありと知るべし。かの天界の歡樂は倦怠の生涯にあり、無事にして永遠の歡樂中に起臥し、生息するにありと思へるものをして、自ら慚愧せしめんため、此の如き生涯を實驗することを彼等に許されたることあり。是のとき彼等始めて此の如き生涯は最も哀れなるものなるを知覺したり、即ち一切の歡樂は此に至りて絶無となるが故に、彼等は暫くにして之を否み、之を厭ふに至るなり。

四百四。又他に勝れて物學べりと自ら信せるものあり、此精靈は云ふ、世にありし頃、彼等は天界の歡樂を以て只神を讚美して之を光榮にするに在りとなし、而して活動の生涯とは之より外になきものと信せりと。されど天人彼等に告げて曰ふ、神を讚美して之を光榮にするは、活動の生涯となすべきものにあらず、神に讚美の要なく、又之を光榮にすべき要なしと。蓋し神の意旨は一切をして其用を遂げしめ、善行即ち仁惠の諸徳をなさしめんとするにあり。されどかの精靈は仁惠の諸徳中に天界の歡樂あることを會得し得ず、只これを以て奴僕の觀をなすに過ぎず。されど天人は此の如き善行を遂ぐる裡に充分なる自由の存するを證せり、何となれば自由なるものは内的情動より起るものにして、言ふべからざる歡樂の之に伴ふあればなり。

四百五。他生に入るものは大抵以爲らく、地獄の地獄たるは、天界の天界たるは一にして、何人にも同様なるべしと、されど其實天界にも地獄にも無限の變態あり、異様あり。甲の地獄は決して乙の地獄と同じきことなく、甲の天界は必ずしも乙の天界と一ならず、假令へば或は人間、或は精靈、或は天人、之を面貌の一事に見ても一として相同じからざるが如し。われ嘗て全く相似、相等しき二體を思惟したるだけにて、天人は怖れを生じて曰く、すべて全分の成るは數多の異物相倚り、相和する處にありて、而してその全分の性相は是等の諸事物が如何に相倚るかに由りて定まるべし。天界の各團體が個々に一をなし、また諸團體が全般に亘りて一をなすは此の如くにして然り、而してこの

一たるを得るは只主の愛によるものとす。天界における用もまた千態萬狀なり。各天人の用は決して相同じからず、故にその歡樂とする所も亦決して自他相等しきを得ず。且又一々の用に伴へる歡樂の數は無限にして、この無數の歡樂にまた萬殊の趣あり、されど是等のもの皆一定の順序に遵ひて相和合するが故に、互に相尊重すること、人體中の諸肢節、機關、臟腑が、各其用を遂ぐるに似たり、又殊に各肢節、機關、及び臟腑における各細胞、各纖維が其用を遂ぐるに似たり、是等の諸事物參差交互して序を亂さず、相互に他の福利を思はざるはなし、従ひて個々の福利を全體の中に求め、全體の福利を個々の中に收めざるはなし。是の如く、是等の事物の間に個體的及び全般的關係あるが故に、皆一體となりて活動す。

四百六。われまた時に外的生涯の情態につきて、新たに地上より來れる精靈と物言へることあり、われ曰く、天界の主は何人にして、天界は如何に統治せられ、其形式は如何なるかを知るは必要なる事なり。地上においても、他國土に來るものは、先づ其國の君主は何人にして、其統治は如何なるかなど、その國土に關して其他多くの事實を知るを最も緊要の事となす如く、今や永遠に生息せんとする天界に來りては、此の如き事を知るの要益、多きを加ふる也。故にわれらは次の事實を知らむを要す、曰く、天界を統治するは主なり、宇宙を統治するも亦然り、蓋しこれを主宰するものはまたかれを主宰すべければなり。されば汝等が今をる所の國土は主に隸屬するものなるを知るべし、而して此

國土の律法は永遠の眞理にして、其基礎をなせる法理は、汝等よろしく一切の事物に優りて主を愛し、又汝等の隣人を愛すること己れに優るべしと云ふにありと。精靈は之を聞けるも、何等の答をなさざりき、そは彼等世にあるとき、此の如きことを聞かざるにあらざりしも、之を信せざりければなり。彼等は天界に此の如き愛あり得べきかを怪しみ、又隣人を愛すること己れを愛するに勝り得べきかを怪しめり。されど彼等は又かく教へられぬ、曰く、他生にありては一切の善徳の増長すること極めて大なり、肉體の生涯にありて、己れの如く隣人を愛するを以て極度となす所以は、彼等は物質的事物の裡にをればなり、されどわれら一朝此の如き形骸を脱離するに至れば、その愛愈々純となり、遂に天人の如くなりて、その隣人を愛すること己れに優るを得るに至るべし。蓋し天界にては人に徳を施すとき之に伴ふ歡樂あれども、之を己れに施すときは絶えて此事なければなり、但し此徳の他人に及ばむことを願ふとき、従ひて他の爲めにとて之を行ふときを除く、これを隣人を愛すること己れに優ると云ふなり。又曰ふ、實に此の如き愛の存在し得べきことは、世上にて婚姻の愛に動かされ、わが配偶者の身の上に落ちかゝらんとする危害を除かんため、寧ろ其身を殺すものあるを見れば明白ならん。又親の子を愛するが如き、母は愛兒の食物を缺きて苦しむを見んよりは、寧ろ己れ之に代りて餓死なんとするを見れば明白なるべし。又眞實の友愛の情ある處には、朋友の難に遭はんとするを見るや、其身を以て之を助けんとするあり、又只社交上の友誼に止まりて必ずしも實情あらざる場

合にも、真心ある如く装ひて、己が最愛の所有品をも他に遺ることあり、此好意は必ずしも其心にあらざるにあらざる、只其口に止まるものならんも亦妨げざるべし、最後にまた、愛の性たる、己れの爲めにするにあらざる、只愛そのものゝ爲に他に事ふるを樂となすを察するときは、前に言へる如き愛、實に存在することを明らめ得べし、されど己れを愛すること他に勝れるものは、其肉體の生涯にあるや、只私利をのみ是れ謀れる爲め、此の如き事理を會し得ざるなり、况んやかの貪婪飽くなきものにおいてをや。

四百七。或者あり、其肉體の生涯にをれるとき他を凌ぎて威力を奮ひしより、他生においても亦此の如く人の主たらむと願へり。されど天人彼に告げて曰ふ、汝は今や異なる國土に來れり、此國土は永遠なり、汝が地上における主權は既に過ぎ去れり、汝が今居る所の世界にては、人は各その善と眞により、又主の慈恩によるの外、尊重せらるることあらず、而して主の慈恩を受くるは汝が世上にありし時の生涯如何に由れり、又此國土にては、地上における如く、人は其富力と國主の寵恩とによりて尊重せらるゝものとす、其富力とは善と眞とにして、國主の寵恩とは人間が地上における生涯の如何によりて主より享くる所の慈恩を云ふ。然るに今之に反して汝若し自ら主とならんとせば、是れ眞の主に對しての叛逆なり、そは汝は今や他の國主によりて主宰せらるゝ所の國土に來りたればなりと。彼の精靈之を聞いて心に愧ぢぬ。

四百八。天界と其歡樂とは、只大なるものとなるに在りと思へる精靈あり、われこれと物言ひしとき告げて曰ふ、天界にては極めて小さきを極めて大なりとなす、極めて小さきものには力なし、證覺なし、而して彼は此力と證覺とを己れによりて得んと願はず、只主より得んとのみ願ふ。此の如くにして極めて小さきものは極めて大なる幸福を有せり、極めて大なる幸福を有するが故に、彼は極めて大なるものなり。何となれば彼は一切の力を主より獲て、其證覺は一切のものに優ればなり。もし極めて大なる幸福を享くるを極めて大なるものとなさずば、何をか然りとすべき。力あるものが其力によりて、富めるものが其富によりて、求めんとするは、極めて大なる幸福を享けんとするにあらずして何ぞや。天人又彼等に告げて曰く、天界とは大ならむがために、小ならんを願ふことにあらず、かくせば是れ大を望み、大を貪るなり、天界はわが心の中より己れよりも他を善くせんと願ひ、其幸福を進めんため之に事ふれども、その報ひを願ふの私情あるにあらず、只愛の心よりする、これを天界と云ふと。

四百九。天界の悅樂は、其自性において、言語に絶せり、何となれば此悅樂は天人の生涯の最奥底にあり、隨ひて彼等が一々の思想中、一々の情動中にあり、かくて又彼等が一々の言語中、一々の動作中にあればなり。恰も其内分全く裕閑して、意に任せて歡樂と福祉とを受くるに似たり、此歡樂と福祉とは一々の纖維中に浸潤して遂に全身に充溢す。此悅樂を感覺し、知覺する模様は言語の盡く

す所にあらず。此悦樂は先づ最奥底に始まりて、之より其各部分に流れ入り、遂に外分に向ひて、傳播、増長せざることをなし。善靈の未だ天界に上らざるの故を以て此悦樂の何たるを知らざるもの、天人より放散し來る愛の圓相を見て、歡樂の情に充つるや、恍惚として酔へるが如かりき。天界の悦樂の何たるを知らむと願ふものは此の如きを経験することあり。

四百十。ある精靈、天界の悦樂の何たるかを知らむと願ひ、之を知覺するを許されたることあり、されど彼等は之に堪ふるを得ざりき、而かも此悦樂は天人の悦樂にあらず、僅に其最低度に及べるものなりき、(こは交通の理によりて、わが又知覺するを得たる所なり、)されば其微弱なる、殆んど之を冷かなりと云ふべきほどなりしも、精靈は之を以て天界に屬するものとせり、蓋しこは彼等のために、最も内的なる悦樂なりしなり。故に天界の悦樂には等差あるのみならず、又甲の最も内的なる悦樂となす所は僅かに乙の最下、或は中間の悦樂に及ぶものなるを見るべし。又人にして其最も内的なる悦樂を享くるときは、彼はおのが天界的悦樂中に在るものと云ふを得べし、彼もし之を超越して一層内的なる悦樂を得んとすれば、彼は却てこれが爲に苦痛に堪へざらんとすべし。

四百十一。或る惡しからざる精靈あり、定に入りて眠れるが如くなりしが、その時彼等が心の内分だけは昇りて天界に至れり、蓋し精靈は其内分の未だ啓けざるに當り、天界に導かれて、其處に住まへる天人の幸福に關して教へ諭さるることあればなり。彼等は半時間ばかり入定せる後、又もこの外

分中に回り來りたるが、その時彼等はその見たる所を想ひ起すを得き。彼等曰ふ、吾等は天界に行きて天人と俱なりき、吾等が見たる所、知覺したる所の事物は人をして驚殺せしむるものあり、その金銀珠玉の如くに輝きたるが、最も妙なる形式の裡に寓せられ、而してその形式の千態萬狀にして盡くす可らざる、只管驚愕の外なし、されど天人の樂しとする所は是等の形體そのものにあらず、是によりて表像せらるる所のものにあり、而して此物たる神的にして、言説すべからず、無限の證覺にみたり、天人は之を見て悦樂す、其外天界にある様々の事物はその數無限にして、人間の言語にては其百分の一をも盡すを得ず、もし強いて之を言はむとすれば、物質的思想の裡に墮在せざるを得ずと。

四百十二。他生に入り來るものは、大抵天界の福祉及び幸福の何たるを知らず、蓋し彼等は内的悦樂の何たるかを會得せず、只肉體及び世間に屬せる喜意と悦樂とよりして之を想像するに過ぎざればなり。故に彼等は己れの未だ知らざる所を以て有ることなしと思へり、されど肉體及び世間に屬する諸の悦樂は之を天界のに比ぶれば何等の價値あらず。善意を有するものにして、而かも未だ天界の悦樂を知らざるものは、之をして其の何たるかを知らしめ、會せしめんため、天人は先づ彼等を樂園の景色中に導き入る、而して此景色の美妙は到底想像の及ばざる所なり。其時彼等以為らく、天界の樂園は此處にあるべしと。されど天人は彼等に諭して曰はん、こは天界に屬せる眞實の幸福なるものにあらずと。かくて彼等はまた悦樂の内的情態は如何なるものなるかを知るを許さるべし、こは彼等

が心の最内底にて知覚する所なり。これより後彼等はその内底に徹して一種平和の情態を生ずべし、是時彼等其の誤れるを悔いて言ふ、此の如きは言語、思想の盡くす所にあらずと、彼等は最後に又其内底に徹して無垢の情態に導かるべし。此くの如くにして彼等は何をかまことの靈的、天的善となすべきかを知るに至るなり。

四百十三。天界とは何か、天界の悦樂とは如何なるものなるかを知らんため、われは屢々主の許しを享けて、永く天界の悦樂よりする歡喜の情に在るを得たり。故にわれはその何たるかを自家の實驗によりて知れども、これを記述せんはわが能くせざる所なり。されど二三の觀察によりて多少か其概念を傳ふべし。天界の悦樂とは無數の歡喜及び悦樂に對する一個の情動なり、これ等無數のものを概括して全般的のものを現じ、此等全般的の事物又は情動中に又無數の情動の調和せるあり、されど之を知覚するは其最も普遍なる處においてするが故に、その知覚は分明ならずして朦朧たり。われは又許されて此中にある無數の事物が天界の順序に従ひて流れ出で、排列せるさま、わが言語の説き盡くし得ざる處なるを知覚するを得たり。此順序はまた情動の最も微細なる點に至るまで行はるれども、之を知覚するときは只最も普遍なる事物として現前するに過ぎず、而して此の知覚の度は是等の情動を有する人の能量如何によるものとす。一言にて之を曰へば、各情動の全般的なるものには其中に最も完全なる順序によりて排列せられたる無限の事物あり、而して此等の事物は一として生命あらざるは

なく、自餘のものを動かすに必ずその内底よりす、蓋し天界の諸悦樂は内底よりして傳はり來ればなり。われ又此の如き歡喜及び悦樂は心臓より來ることく知覺せり、而してその之れより一切内底の緯を通じ、進みて緯緯の集團中に入りて傳播するや、その進行極めて柔かにして、之に伴ふ歡樂の情は頗る内的なり、各緯緯は歡喜及び悦樂そのものより成れるに似たり、知覺及感覺の量も亦之によりて同じく幸福に充ちて活躍するに似たり。肉體の快樂よりする歡喜と、是等の諸歡喜とを比するは、恰も濃密にして且つ辛辣なる塵埃を、清らかにして且つ頗る軟かなる微風に比せんが如し。われはまた吾樂しみをすべて他に譲らんと思ふときは、以前のよりも一層内的にして充分なる歡樂の、其跡に流れ入りて斷ゆることなく、彌々之を思へば、彌々流れ入るを見たり。而してわれは又この流入の主よりするものなることを知覺しぬ。

四百十四。天界にあるものは、みな生涯の春時に向ひて絶えず進行せり、されば天界に住むこと久しきを経るに従ひて、彼等が逢ふ所の春時は益々樂しくして幸なるものとなる、而して此情態は彼等が愛と仁と信との進歩及び等差に従ひて、永遠に増進するものとす。老い衰へて死せる婦人と雖、もし其世にあるとき主を信じ、隣人を愛し、婚姻の愛に厚かりしものは、その年の加はるに従ひて、また少時の花期に歸り、妙齡の美婦となる、而して其美なることは、吾視覺にて得たる美の概念の及ぶところにあらず。此の如き美妙の相は、彼等の衷にある善と仁との兩徳が自らの像相をこゝに現

前せるなり、その面上における至微の線と雖も仁愛の情と美とを現はさざるはなきが故に、此の如き婦人は仁惠の本然の姿なりと謂ふべし。故に彼等を一見して驚歎措く所を知らざるものありき。天界にありて活ける仁惠の姿は、仁惠自ら之を描ける如くにして、之を見れば天人の全身、殊にその面貌において、分明に仁惠の何たるかを見得べく、又顯然として之を知得すべし。此姿に對すれば其美言語の外にありて、見る者の心を其最も深き處より動かして仁愛の念にみたしむ。一言にて云へば、天界にて老ゆるは若やぐなり。世にありて主を愛し、隣人を愛せるものは、他生に往きてみなかくの如き姿を現す、其美言ふべからず。一切の天人は皆かくの如き姿を有せり、しかも其中に無数の變態あり、これによりて天界成る。

○天界は廣大無邊なること。

四百十五。天界の廣大無邊なることは、先章に説き現はせる數多の事由により明かなるべし、殊に天界は人類より成ること(三一一より三一七)、教會内に生れたる者のみならず、教會外に生れたるものも、亦天界に往くこと(三一八より三二八)、かくて地球の創造せられて以來、善を行ひたるものは一切天界にあることを明らめたるが故に、これによりて、天界の廣大無邊なるを知るべし。全世界に如何ばかり多衆の人民あるかは、此地球上における區域、分界、國土などに關して多少の知識あ

るものとすべて推知する所なるべし。多少計算に心あるものは、數千の人日毎に死し、數萬、數百萬の人年毎に死するを發見せん。此は數千年前の太古より始まれるところにて、是等の人は悉く其死後他界に來り、又絶えず來らむとするなり、他界とは即ち靈界の謂なり。されどこれらの人々のうちに既に天界の天人となりたるもの、及び將にならんとするもの、果して幾何なるかは今記するを得る限りにあらず。われきく、古代にては人間の想念、今日よりも尙內的且つ靈的にして、其情動も亦從ひて天界的なりしを以て、天人となり得るもの頗る多かりしが、世を経るに従ひ、人々次第に外的となりて、其想念は自然的となり、其情動亦從ひて世間的となれるが故に、天人となるもの漸く少なくなれりと、是によりて先づ此の地球上の住民だけにて成れる天界の如何ばかり多衆なるかを明らめ得べし。

四百十六。一切教會の内外に生れたる小兒は悉く主の養ひ給ふ所にして、而して彼等は遂に天人となるが故に、これによりて主の天界の如何に廣大なるかを明にすべし。何となればこれらの小兒だけにても地上に於る全人類の五分の一乃至四分の一に及ぶべければなり。如何なる處に生れたりとも、即ち教會の内と外とに拘らず、又其兩親の有信なると兇惡なるとに拘らず、一切の小兒は死後すべて主の攝受し給ふ所となり、神の順序によりて天界に教育せられ、善に對する諸情動を修習し、吸引して、之より眞に對する諸知識を得、その後智恵と證覺との圓滿なるに従ひて、天界に導かれ、天人と

なることは、上來既に見たる所の如し(三二九より三四五)。是故に、天地創造以來今日に至るまで、天界には小兒より生長せる天人だけにも如何に多衆なるかを推知し得べからむ。

四百十七。わが太陽系統中、目に見ゆる限りの惑星は各一個の地球なること、及び其外宇宙に散在せる無数の地球には皆住民あることを知らば、これより推して、主の天界の如何ばかり廣大なるかを明らむべし。此等の諸地球に關してはわれ別に一小冊子を著はして之を説けり、今其中より引用せんに、曰く、衆多の地球ありて、其上に住民あり、精靈と天人と亦この處より來ることは、他界に在るものよりよく知る所なり。蓋し眞理を愛し、隨ひて用を愛するものにして、吾地球以外の諸精靈と物語るを願ふときは、その願許さるゝことあり、而して彼等は之によりて宇宙には數多の世界あることを知るべく、又人類はわが地球のみに限られずして其他無数の地球にも存在することを知るべし。われ嘗て此事を吾地球より來れる諸精靈と言へることありき、其時曰ふ、苟も知識あるものは、彼が見聞覺知より推して、地球の數は一二にして已まず、且其上に住民あることをも會得すべし。何となれば惑星の如き尨大なる諸天體が(その中にはわが地球よりも大なるあり)只空々漠々として存在して、太陽の周圍を回轉し、其薄暗き光を以てわが世界を照さんためにのみ作られたりとは、單に道理より推しても、しか考ふるを得ず、必ずや其用の更に高大なる順序のうちに存するものあるべし。そも、[○]神格の宇宙を創造し給へる目的は、人類の存在せんため、及び之れよりして天界の存在

(人類は天界に往くものを保育する處なるが故に、)のために外ならざるを信するものは、而してこは何人も信せざるべからざる所也、また地球ある處、必ず人類あるべきを信せんと欲せざるも得ざるなり。吾人の目に見ゆる各惑星は、わが太陽系統の限域中にありて亦一個の地球なることは、次の理にて明かに知り得べし、即ち諸惑星はわが地球の如き物體より成るものにして、また太陽の光を反射し、これを望遠鏡にて見るときは光焰に耀ける星の如くならずして、暗黒の斑點處々に散在すること猶ほ地球の如し、又諸惑星は吾地球と同じく太陽を周ぐり、黃道に沿ひて進行するが故に、その上には年あり、春夏秋冬の四季あるべし。つぎに又吾地球の如く、惑星は各自の地軸によりて回轉するが故に、その上にはまた日あり、朝、午、夕、夜の區別あり。又惑星のうちには、衛星と呼びて、月の之を回るあり、わが地上の月の如く、一定の時を限りて其地球を回轉す。土星は太陽を離るゝこと遠きが故に、一種の大なる光帯ありて之を繞れり、この光は反射の光なれども土星のこれによりて照さること大なり。此等の事實を知れるもの、理性に基きて思惟せんには、如何にして是等の諸惑星をただ空漠無人の天體となすを得べきか。且つ我は此事につきて精靈と語れり、曰く、宇宙には唯一の地球のみ存在するにあらずして、此外數多の地球あるべきは、無数の星あり太空に滿ちて其極まる處を知らざるを見ても信せらるべし、而して是等無数の星は、一々その在る處において、又は其系統中において、一個の太陽にして、大小相同じからざれど、皆わが太陽に似ざるはなし。

此事實に就きて正當に思考するものは、此の如き廣大なる宇宙は、その全體をあげて、必ず或目的に達するまでの手段なること、而して其目的とは天地創造の終局の目的なることを推結せざるべからず、終局の目的とは即ち神格が天人及び人間と共に住まんとする天界の國土なり。何となれば見る限りの宇宙、即ち此の如き無數の太陽たる諸星の光に輝ける蒼穹は、諸の地球及び其上に住まへる人類の存在（天界の國土は此人類より成る）のために過ぎざればなり。是等の事實より推して、理の如く思考せん人々は、此の如き廣大なる目的の爲めに造られたる是の如き廣大なる手段は、只一地球の人類のみのためとは思ひ得ざるべし。無限なる神格より見れば、百千萬の地球及び其地上にをる住民を擧げて、ことごとく一小事の看あるべし、否、殆んど無有と同じかるべければ、此宇宙と云ふも、彼よりすれば何かあらん。

諸の知識を集むるを以て唯一の學問となし、之をまたなき楽しみとなせる精靈あり、此の如きは諸方を遊歴するを許さるゝが故に、わが太陽系統のみならず、他の太陽系統内に入りて知識を求むることあり。彼等曰ふ、住民を有せる地球の數は無限にして、曾に我が太陽系のみならず、此外に出でたる星斗闌干の天亦然らざるはなしと。是等の精靈は水星より來れるものなりき。之を計算せるもの言によるに、もし宇宙に一百万の地球ありて、各地球上に三億の人類住み、六千年の間に二百代の相續あり、各人又は各精靈を容るゝに三立方エルを以てするとも、此全數はわが地球が填塞せる空間

を充つるを得ず、僅に一惑星の衛星が填塞せる空處を充たして少しく餘りあるに過ぎざるべし、宇宙の廣きより見れば此の如き空處は極めて小なるものにして殆んど見難しと云ひ得べからむ、そは肉眼にては衛星は殆んど見得べからざればなり。宇宙の創造者に取りては、此の如きもの何かあらむ、彼は全宇宙を充たすとも、尙足りとはせざるべし、そは彼は無限なればなり。われ此事に就て天人と語れり、彼等曰ふ、吾等も亦此の如く思惟す、創造者の無限なるより見れば、人類何ぞそれ僅少なるや、されど吾等の思索は固より空間に基づくものにあらずして、皆情態よりするを知らざるべからずと。又曰く、此の如く思ひ運らすときは、たとへ萬に萬を疊ねて、考へ得る丈の數を以て世界の數となすとも主の眼より見れば、これ將た何かあらんと。（宇宙における諸地球、一、二、三、六、一二六を見よ。）

宇宙における諸地球、其住民、其處より來る精靈と天人とに關しては前に云へる小冊子を參考すべし。彼書中のことはわがために默示せられたる所にして、主の天界の廣大無邊なること、天界は皆人類よりすること、及び吾々の主は到る處天地の神と是認せらるゝことを世に知らさんためなり。

四百十八。主の天界の廣大なることは、又天界を其全般より見て一個の人に似たりと云ふによりて、これを明らむべし、天界はまた人間に屬する諸の事柄、大となく小となく、悉くこれと相應するものにして、而して此相應たるや決して充足の期あらざるなり。何となれば全身中の各肢節、各機

關、各臟腑との相應あるのみならず、又一々の個體中、至微のものに至るまで、其中にある小臟腑及び小機關と、其全分において、又その各局部において、一々の細胞、一々の纖維と皆相應あればなり、又管に此等との相應のみならず、また天界の内流を内に享くる機制的實質との相應あればなり、此に機制的實質と云ふは人の由りて以て内的活動を營むものにして、心の運用に服事せり、何となれば凡そ人の内底に存在するものは必ず形式を有せり、此の形式やがて是れ實質なればなり、蓋し實質を以て屬性となして、その裡に存在せざるものは、これ無有なり。天界一切の事物は人間一切の事物と相應することを説けるとき（八七より一〇二）見たる如く、是等のものは一として天界と相應せざるはあらず。而して此相應は決して充足の期あらざるなり、そは人身の各肢節に相應せる天人の諸會同、益、増加するに従ひて天界は益、圓滿となればなり。天界にては一切のもの唯一の目的を有して、皆一致して之に赴くが故に、天人の數彌、多くして天界の圓滿彌、増進す。此目的と云ふは一般の公利を指せるなり、此目的を主となすときは、各人に對しては公利より來る福利あり、全衆の上にては各人の福利より來る福利あり、その此の如くなるは、上に見えたる如く（一二三）、主は天界にあるものをしてすべてこれを己れに向はしめ給ひ、之によりてすべてを主と一體とならしめ給へばなり。多衆相協力し相合同する時は此に圓滿あり、殊に今云へる如くにして始まり、今云へる如くにして團結するときは、愈、此の如きことあり、こは少しにても光明ある理性を基として思惟するものゝ明かに見得る處とす。

四百十九。われは又許されて、天界における住民の區域と無住民の區域とを見たるに、無住民の區域の廣大なることはたとひ數萬の地球ありて、各地上の住民、吾世界の如く多からむに、これを以て此處を填充せんとするも、永遠に涉りて尙之を能くせざるべしと思はれたり。此事につきてはわが小冊子、「宇宙における諸地球」中第六十八節を見よ。

四百二十。天界は廣大ならずして、狭小なりと云ふものあり、彼等は聖言にある所言をその文字の義に解して、しか推測せるなり。即ち彼等が根據とする文句は、曰く、天界にては貧しきものゝみ攝受せらるべし。曰く、擇ばれたるものゝ外は攝受せられず。曰く、教會内の者のみ許されて、其外のものゝは許されず。曰く、天界は主の取なしをなし給へるものゝみの爲めに有り。曰く、天界充つるときは閉ぢらるべし、而して此時は豫め定められりと。されど彼等は天界の決して閉ぢらるゝ事なきを知らず、又豫め定まれる時あるにあらず、又一定の數に限られたることなきを知らざるなり。擇ばれたるものゝは善と眞とによりてその生涯を營むもの、貧しきものゝは善と眞との諸知識を有せざれども之を冀へるもの、此願の故に、又彼等を飢えたるものと云ふことを知らざるなり。

聖言を會得せざるによりて天界を以て狭小なりと思ふものは、又天界を以て或る一定の處に在るもの、而して人は此に來り集るものなりと想像す。されど天界が、多くの團體より成ることは上に見え

たり（四一より五〇）。彼等又以爲らく、天界は何人にも方便をからざる直接の慈恩によりて賜はるものなり、かくて天界に入るを許さるゝものは、此に攝受せらるゝものは、主の特寵を受けたるものなりと。殊に知らず、主は限りなき慈恩によりて、主を享くるものは何人と雖、皆これを天界に導き給ふことを。神の順序に遵へる律法を愛と信との誠と云ふ、此誠によりて生涯を營むものは、皆主の享け給ふ所なり。又主の慈恩とはかくの如く幼少の時より、世上に於ける人生の終焉に至るまで、及びそれより以後永遠に涉りて主のために導かるゝを云ふなり。故に知るべし、一人として天界の爲めに生れざるはなく、此世に在りて己れのうちに天界を享くるものは、死後また天界に攝せられ、然らざるものは天界より斥けらるゝことを。

精靈界

○何をか精靈界と云ふこと。

四百二十一。精靈界は天界にあらず、又地獄界にあらず、兩者の間に介在せる中程の位地、即ち情態これなり、こは人の死後先づ至る處にして、此處に在ること稍や久しき後、彼は世上にありしときの生涯の善否によりて或は天界に昇り、或は地獄界に墮落す。

四百二十二。精靈界は天界と地獄界との間にある中程の位地にして、又人間の死後における中程の情態なり。精靈界が中程の地位なることは、其下に地獄あり、其上に天界あるを見て明かなり、又その中程の情態なることは、人間此處に在る限りは、天界に在るにもあらず、また地獄に在るにもあらざればなり。人間における天界の情態とは善と真との和合にして、地獄の情態とは悪しきと偽りとが人間に在りて和合せるを云ふ。人靈のうちにある善、真と和合するとき、彼は天界に入る、そは今見たる如く此和合は即ち彼の裡にある天界なればなり。されど人靈のうちにある悪、偽りと和合するとき、彼は地獄に到る、そは此和合は即ち彼のうちにある地獄なればなり。此の如き和合は精靈界にあるとき行はる、人は此時中程の情態に在るが故に。智性と意志との和合と云ふも、真と善との和合と

云ふも同じきなり。

四百二十三。まづ智性と意志との和合及び此和合の眞と善との和合に似たることにつきて少しく言ふ所あるべし、そは此和合は精靈界にて行はるればなり。それ人は智性と意志とを有するものにして、智性は諸眞理を攝受し、且つこれによりて形成せられ、意志は善を受くる器となりて、また之によりて形成せらる。故に人の會得する所と此會得によりて思惟する所とを眞と云ひ、又人の志す所と此志よりして思惟する所とを善と云ふ。人は智性によりて能く思惟し、またこれよりして眞なるものと及び善なるものを知覺すれども、彼は意志によりて之を思惟することあらず、但し彼之を志して之を行ふときを除く。もし人此くして之を志し、之を行ふときは、眞理は彼の智性と意志との裡に存するが故に、また其人格の中にとすべし。何となれば人格は智性のみにてなるにあらず、また意志のみにてなるにあらず、兩者の相合を必要とすればなり、故に其意志と智性との中にあるものは、亦その人格の中にあるものにして、彼が所有となるを得るなり。智性のみの中にあるものは、其人格に伴へりと云ふべからむも、彼の中にとすべからず、此の如きは只彼が記憶中の一事、記憶中にある知識の上の一事にして、彼が獨居せざるべきとき、即ち他人と共なるべきとき、彼は此の知識につきて思ひ運らすを得べし。かくの如くなるが故に彼は此事に關して言説すべく、究理すべく、又之によりてその情動を詐り、身振りを装ひ得べきわけなり。

四百二十四。人は智性によりて能く思索すれども、之と同時にまた意志によりて思索し能はざるは、これ彼をして善に遷るを得せしめんがための方便なり。蓋し人の善に遷るは眞理に據るものにして、而して眞理は前に見たる如く、智性に屬すればなり。人の生るゝや、其意志より見れば、即ちその我のまゝなるときは、悪しきことのみなり、彼は只己れのみよからむことを願ひて他を顧みず、而して己のみよからむことを願ふものは、他の不幸を見て喜ぶ、其不幸却て己れの利となるときは、殊に然りとす、何となれば彼はすべて他人の利福、其の名譽たるを、財力たるを問はず、之を己れの有となさんことを願へばなり、されば彼が喜びは其成功に従ひて大なり。此意志を改めて、善に遷るを得せしめんため、人には諸眞理を會得するの力、賦與せられたり、此眞理によりて其意志より起る一切不善の情動を伏斷せんとするなり。故に人は智性によりて眞理を思惟し得、又之を言説し、之を行ふを得れども、もしその我よりして、即ち其心よりして眞理を志し、眞理を行ふ情態に入ることなれば、其意志によりて眞理を行ふを得ざるなり。此の如き情態に入るとき、その人が智性によりて思惟する所は即ち彼が信仰より來るものなるべく、而して其意志より思ふ所は、即ち彼の愛より來るものとなるべし、故に此時、信と愛と彼に在りて和合すること、猶ほ智性と意志と和合するが如きものあるなり。

四百二十五。故に智性中の諸眞理が意志中の諸善と和合せる限り、即ち人はかくして眞理を志して

之を行ふ限り、彼は天界ありとなすべし、そは上に言へる如く、天界とは善と真との和合せるを云へばなり。されど智性中の偽りと意志中の悪と和合せんには、そのとき彼は地獄ありと云ふべし、地獄とは偽りと悪しきとを和合せるを云へばなり。されど智性中の真未だ意志中の善と相和合せざる時は、彼を以て中程の状態にありとなす。今の世、人間は大抵此情態にをれり、彼は真理の何たるを知り、又知識の上、理性の上にて真理を思惟し得れども、彼が實地其身に行ふ所の真理に至りては、或は多く、或は少く、或は絶無なり、或は悪を愛する心、即ち偽りの信仰よりして真理に背ける動作をなすあり。故に人は天界と地獄界との何れかに適従するところあらんため、死後先づ精靈界に導き入れらる、天界に昇るべきものには此處にて善と真との和合行はれ、地獄界に投げらるべきものには此處にて悪と偽との和合行はる。何となれば天界にても、地獄界にても、不決定の心を有するを許さず、即ち智性に此を思ひて意志に彼を志すが如きを許さず、必ずや、其所志を了知し、其所知を志願せざるべからざればなり。されば天界にては、善を志すものは真を了知し、地獄界にては悪を志すものは偽を了知せり。是事由によりて、善きものには諸偽あることなく、真理のみありて其善と一致し、調和す、しかるに悪しきものには、真理なくして偽のみありて其悪と一致し、調和す、精靈界とは如何なるものなるかはこれにても明らめ得べし。

四百二十六。精靈界にをるものは頗る衆し、そは精靈界は一切のものが始めて會合する處にして、

此處にてまづ驗され、準備せらるればなり。彼等が此處にをるべき期限は一定せず、之に入るや、直ちに或は天界に上り、或は地獄界に投下せらるゝあり、或は此處にあること數週間なるものあり、或は數年なるものあり、されど三十年を超えて此處にあるものあらず。此く時限の等差あるは人の内外分の間に相應あるとあらざるによる。されど此精靈界において人は如何にして甲の情態より乙の情態に移り、かくして準備を全うするかは次章に説くべし。

四百二十七。人の死後、精靈界に来るや、主は直ちに彼等を明白に區別し給ふ。悪しき者の直ちに地獄界に於ける團體に赴くは、彼等の世にあるや、其所主の愛は此に所屬したればなり、又善きもの直ちに天界における團體に赴くは、彼等の世にあるや、其愛、其仁、其信は正に此に所屬したればなり。分割此の如く判然たれども、肉體の生涯にありしとき、朋友となり、知己となれるもの、特に夫婦、兄弟、姉妹となれるものは、其願ひに任せて、此精靈界において會談するを得べし。われは一人の父、六人の子と相語り、且つ之を認識せるを見たり、又其外親戚及び朋友と同伴せるものをも多く見たり、されど彼等は世に在るときは、其性情を異にせるにより間もなく、相分れ去りぬ。彼等一たび此處を去りて、或は天界、或は地獄界に行くときは、また相見ることなく、相識ることなし、但し同一の愛によりて同一の性情にをるものを除く。彼等の相見るや、天界又は地獄に於てせずして、只精靈界に於てする所以は、精靈界にをるものは肉體の生涯を送れるとき有したると相等しき諸状態

に交り導き入れらるべければなり。されど其後は彼等は所主の愛に等しき一定の情態に在りて、その互に相知るは其愛において相似たるに由るのみとす、何となれば上に示せる如く(四一より五〇)、相似たる者は和合し、相似ざるものは分離すればなり。

四百二十八。人間にありては、精靈界は天界と地獄界との中程の情態なるが故に、その位地また中程なり、其下を地獄となし、其上を天界となす、一切の地獄界は此精靈界の方面に對しては塞がれり、只僅かに岩間の罅隙に似たる穴あり、裂け目あり、又大なる門戸ありて之と通せるのみ、而して此門戸には守衛ありて、人の濫りに出入するを許さず。此許を受くるは緊急の必要あるときに限り、こは間もなく次に記すべし。天界も亦其四方は塞がれり、天界の團體に通すべき途もあらず、僅かに一條の狭き路あり、守衛之を守る。此等の出口及び入口は聖言に所謂る地獄及び天界の門戸なるものなり。

四百二十九。精靈界は山岳と岩石との間にある谷に似たり、此處彼處に曲折の處あり、又高き處あり、天界の團體に通せる諸門戸は、天界に入るべき準備を了へたるものならでは見るを得ず、他の者は之を發見することなし。精靈界より各團體に通すべき入口は唯一なり、途を上るに従ひて分れて數條となる。地獄に通せる門戸は此に入らむとするものために開く、その外のものを見るを得ず、其開くを見れば薄暗くして、恰も煤多き窠に似たり、斜めに下向して深坑に入る、此處にまた數個の戸

口あり。是等の窠孔より惡臭鼻を衝きて出で来る、善靈は之を嫌惡するが故に怖れて走り去れども、惡靈は之を樂しむが故に、好んで之を求む、何となれば世にある人がおのれの自性に屬する惡を喜ぶ如く、死後に至れば何人も亦その惡に相應せる惡臭を嗅ぐを喜ばばなり。此點においては彼等を貪婪飽くなき禽獸、即ち鳥、狼、豚の類に比すべし、彼等は腐屍、堆糞など嘔吐を催さんとするものを喜び、その臭を逐ひて集る。われ嘗て一個の精靈が、天界の氣息に遭へるとき、内邊の苦しみに堪へずして、一聲高く叫べるを聞けることあり、されど彼は其後地獄界の惡臭を嗅ぐ及びてや、悠然として心に之を喜びぬ。

四百三十。又各人に二個の門あり、一は地獄に向ひて開けり、それより来る惡と偽りとを容れんが爲めに開けるなり、一は天界に向ひて開けり、それより来る善と眞とを容れんが爲めに開ける也。惡と其偽りとに在るものは地獄門を開放せり、天界より流れ来る光明は上方の隙間より僅かに數條の線光を下すに過ぎず、彼が能く思惟し、究理し、言說するは、此光りによるものとす。されど善に在り、また隨ひて眞に在るものは、天界の門を豁開せり。蓋し人の理性心に達する途二つあり。高き途、即ち内の途は、善と眞とが、主より入り来る途なり、低き途、即ち外の途は、地獄界より惡と偽りとが忍び入る途なり、此中間に位して理性心あり、兩つの途之に向ふ。故に天界の光入り来る限り、人は理性的なるを得れども、之れを拒みて入れざれば、その人自らは如何ばかり理性的なりと思はん

も、その實性は既に亡べり。いま此等の事を記述するは、人をして彼は天界と地獄とに對して、如何なる相應を有するかを知らしめんとてなり。

人間の理性心はその成立のときに當り精靈界に相應す、其上にあるものは天界に相應し、其下にあるものは地獄界に相應す。天界に入る準備をなせるものには、其上方の事物開けをれども、下方の事物は閉ぢて惡及び偽りの内流を受けず、されど地獄に入る準備をなせるものには、下方の事物開けて上方の事物閉せるが故に、善及び眞の内流を受けず。これを以て後者は只脚底、即ち地獄を望むの外なく、前者は只頭上、即ち天界のみ仰ぎ得べし。頭上を仰ぐは主を望むなり、何となれば主は共通の中心點にして天界の事物皆之を仰げばなり、脚底を瞰むは主に背きて、反對の中心點に向ふなり、地獄の事物は皆此點を望み、此點に傾く（上を見よ、一二三及び一二四）。

四百三十一。上來言ふ所の精靈とは何れも精靈界の所住者の謂にして、天人とは天界の所住者の謂なり。

○人はみな其内分において一個の精靈なること。

四百三十二。此事項につきて思惟を回らしたるものは、たれも人の思索する所あるは、身體の所爲にあらずして、心靈の所爲なるを知るべし、何となれば身體は物質的なれども心靈は（此不滅につきて言をなせるもの頗る多し、）即ち人の精靈にして、精靈は全く不滅なるものなり。人の身體中にありて思索するは此精靈なり、そは精靈は靈的にして、靈なるもののみ能く靈的を攝受し、靈的に生息す、即ち思索し、意志するを得べければなり。故に體中に現はるゝ一切の理性的生涯は精靈に屬せり、一も身體に屬せるはあらず。何となれば先に言へる如く、身體は物質的なり、而してかく身體に屬するが故に物質的なるものは、人の精靈をして自然界にありて生涯を營み、用を遂げしめんため、精靈に附加せられたるもの、又殆んど附合せられたるものとも謂ひ得べければ也。世間における萬物は物質的にして、それだけにては生命あらざるなり。かくの如く物質的なるものには生命なく、只靈的なるもののみ生命あるが故に、人身中にて生命あるは其精靈にして、身體の之に服するは、猶は器物が、一種の活きて動ける力に服するが如しと謂ふべし。世には器物を以て、或は働き、或は動き、あるひは打つと云ふことあれども、實際是を以て器物そのものゝ活動となし、而して此器物を用ひて或は働き、或は動き、或は打つ所の人あるを信せざるは誤まれりとなすべし。

四百三十三。この身體中にありて活けるもの、生命ありて動作し、且つ感受するものは、皆たゞ精靈のみより來りて、自體よりせざるが故に、實際の人格をなすものは精靈そのものなることを知るべし、別語を以てすれば、人格そのものはまた一個の精靈にして、精靈と相似たる形式のうちにあるとなすべし。何となれば人の身體中にありて生命あり、知覺あるものは皆その人の精靈より來る所に

して、而して人の身體中にあるものは、頭部より脚底に至るまで、悉く皆生命あり、知覺あらずと云ふことなければなり。故にもし身體にしてその精靈より分離するときは、之を死となせども、實際の人格なるものは尙此に残留して且つ生命を有せり。われ嘗て之を天界より聽く、曰く、死せるものうちには、その復活するに先ち、尙棺車の上に横はるとき、冷却せる死體の裡にありながら思索を運らすことあり、また彼等は尙自ら生命を有せるものと思ふ外他念あらず、但し彼等はその身體に屬する物質的部分に對して毫も之を左右する力なきのみと。

四百三十四。人は何かの實質的所依なくしては思索し且意志するを得ず、人の能く此の如きを得るは實に此所依の實質に由り、又その中においてするものとす。實質的所依なくして而かも存在する如く思はるゝものは、其實は無有なり。次の事實を見て之を知るべし、即ち人はその視覺の所依たる眼根なくしては見るを得ず、又聽覺の所依たる耳根なくしては聽くを得ず、これ等の機關を離れて見聞することありと云ふも、是處あることなし、是の如きは實に無有なり。今想念は内視なり、知覺は内聽なり、このもの亦前者と同じく、實質の中に入り、實質によりて起るにあらざれば、有るを得ることなし。是等の實質は即ち機制的形態にして、諸官能の所依なりとす。是に由りて人の精靈は亦同じく一種の形態中にあるを知るべし。此形態、即ち人の身體なり、故に精靈は身體を離るゝ時と雖、身體に在りし時と同じく感受あり、感覺あり。眼にある生命、耳にある生命、一言にて云へば、人間が

有する諸感覺の生命は、すべて其肉體に屬せずして、是等の諸機關の中及び其至微至小の局部中に存せる精靈に屬するものとす。故に精靈は人間の如く見、聞き、且つ感するを得るなり、されど肉體と分離して後は、是の如き精靈の働きは自然的ならずして靈的なり。精靈が肉體中にありしとき有したる自然的感覺は、これと融合したる實質的部分より生ずる結果なり、されど其時においてすら人間は尙之と同時に想念と意志とによりて靈的感覚をも有しき。

四百三十五。わが今是等の事を言へるは、理性を具へたる人をして、人格をそのものより見れば元是れ一箇の精靈なることを信得せしめんがためなり、此精靈に附合せられたる肉體的形態は自然界、物質界にありて精靈に服事せんがためものにして人格そのものをなすにはあらず、僅かにその精靈の用を成就せんための器械に過ぎざる也。されど此事を道理によりてのみ推究するときは、之を會得せざる人多かるべければ、寧ろ之を経験の上より確むるに如かず、又既に反對の見解を確定したるものに至りては感覺上の譚説を基礎としてこの道理を究めんとするが故に、わが道理上のみ推究に對しては疑を挟むことあるべし。既に反對の見解を定めたるものは常に以爲らく、動物の生命あり、感覺あるは猶ほ人間の如し、されば彼等にもまた人間の精靈に似たる靈的一物なき能はず、しかも此の如きは其肉體と共に死し去るにあらずやと、されど彼等は動物の靈的方面は人間の靈的方面の如くならざるを知らざるなり、何となれば人間には動物が有せざる所の一箇内底なるもの存すればなり。即

ち人間の精霊中には神格の流れ入るあり、人間はこれによりて神格に向進し之と和合せんとする也。故に人間は神に關し、又天界及び教會における諸の神事に關して思索するを得べし、又是等の事物により、是等の事物において、神を愛するを得べし、かくして人間は能く神と和合するなり、而してこは動物の爲し得ざる所とす。然るに神格と和合し得べきものは離散するを得ざれども、そのこれと和合し得ざるものに至りては遂に離散の期あり。

人間が動物を超絶する所以は其内底にありと云ふは既に之を云へり(三九)、されど今記るしたる如き謬見を基として種々の諸を生ずることあり、これを一掃するの必要あるが故に、此にまた前言を繰返さざるべからず、此謬見は畢竟するに知識の缺乏と偏狭なる智性とより來る所にして、人をして此の如き問題に就き合理的結論に達するを得ざらしむる也。前きに述べたる所に曰く、「終りに臨み、是等三層の天界における諸天人につき少く密意を述べし。こは度のことわりを明めたるもの嘗てあらざりしが故に、何人の心にも未だ浮ばざりし所とす。即ち各天人及び各人間に最奥、即ち頭等の度、又は分と云ふべきものあり。主の神格はまづ、即ち直接に、此處より流れ入り、これより順序の度に從ひて、次に自餘の内分を整理す。この最奥、頭等の度を呼びて、主が天人及び人間に入るの門となすべく、又彼等のうちにおける主が特別の居處となすべし。人に此最奥、頭等の度あるが故に、人は人として畜生界を超出す、畜生界には此の如き度あることなし。是の故に人間は畜生界と異なり

て、その心及び稟性の上に一切の内分を有し、是等の内分によりて、主のために高められて、主に到り、主を信じ、主を愛し、かくして遂に主を見るを得、又智慧と證覺とを受けて、合理的言論をなし得る也。是の故に人間の生くるは永遠なり。されど此最奥において主が成し給へる施設と準備とに至りては、如何なる天人と雖、明かに之を意識する能はず、そは天人の思慮の及ぶ所にあらず、證覺の達せざる所なればなり。」

四百三十六。人間はその内分において一箇の精霊なることは、多くの經驗によりて、わが許されて知れる所なり、而してこの總てを此に書さんには多くの頁數を必要とすべし。わが諸精霊と物言へるは一箇の精霊としてなりき、また肉體に在る一箇の人間としてなりき。かく一箇の精霊となりて彼等と物言へるとき、彼等はわれを以て亦一箇の精霊に外ならず、而して彼等の如くまた人身を有せるものと思へり、彼等は能く吾内分を見たり、そはわれ一箇の精霊として彼等と物言へるとき、わが物質の肉體は彼等の見る所とならざりければなり。

四百三十七。人は其内分において精霊なることは、人死して身體と分離するとき、人格は尙依然として存するによりて明かなるべし。此事を確めんため、われは許しを受けて、生前わが知れる殆んど總ての人々と物言ふを得たり、此會談或は數時に涉り、或は數週乃至數月、或は數年にも及びぬ、こは要するにわれをして事實を確め、之を證據せしめむがためなりき。

四百三十八。此に附加すべき事は、人々の精霊は此肉體にあるとき既に諸精霊と交際することこれなり、されど彼等自身は之を知らず。即ち善人は精霊によりて天人の團體中に在り、悪人はまたこれによりて地獄界の團體中に在り、死後に至りてまた善悪各同一の團體中に入るものとす。此事は死後精霊界に来れるものために、屢々語られ、また證據せられたる所なり。人此世に住めるうちは、その思索は自然的なるが故に、精霊として其團體中に加はることあらず、されど其想念適然として肉體を脱離するものは、其時精霊のうちにあるを以て、或は各自所屬の團體中に現前することあり、此時彼を見るものは、容易くこれを他の諸精霊と分別するを得べし、何となれば彼は思ひに沈みつゝ黙然として徘徊し、他を顧みざることを、恰も之を見得ざるが如くなればなり、もし精霊のこれと物言ふことあれば彼忽然として消失す。

四百三十九。人はその内分において精霊なることを説明せんため、われはこゝに人は如何なる方法にて身體を脱離し、又如何にして其精霊に運ばれて他處に到るかを、經驗の上より説くべし。

四百四十。まづ第一項、即ち人は如何にして肉體を脱離するかと云ふに、此時人は睡眠にあらず、覺醒にあらざる一種の情態に入るものにして、此情態にあるときは彼は只自らは充分に覺醒せるものとのみ思へり。此情態におけるときの諸感覺は醒々として、恰も肉體の最も覺醒せるときに異ならず、視覺、聽覺、皆然らずと云ふことなし、而して此に特に奇とすべきは、其時に當り觸覺の精妙と

なること到底肉體覺醒時の觸覺の及ばざることこれ也。此情態にありて精霊及び天人を見るときは、彼等の生氣活するを認むべく、また彼等の言語をきくを得べし、尙奇とすべきは彼等に觸接し得ることこれなり、こは肉體に屬するもの少しも此間に入り來らざればなり。此情態を呼びて肉體脱離の時と云ふ、此時人はその肉體のうちに在るを覺えず、またその外に在るを覺えざるなり。わが此情態に導き入れられたるは三四回に過ぎざりき、こはわれをして此情態の何ものなるかを知らしめ、又これと同時に精霊及び天人には諸感覺あること、人間の身體を脱離して精霊となるべきにも亦此の如く諸感覺あることを知らしめん爲めなりき。

四百四十一。第二項、即ち精霊によりて他處に導かるとは何のことなるか、及びこは如何にして行はるかにつきては、われまた實地の經驗によりて之を知るを得たり、されどこは二三回に過ぎざりき。いま一例を記すべし。われ嘗てある市街を通行し、それより郊外に出でたることありしが、われはそのとき歩行しつゝ諸精霊と物語り居たり、わが眼は開けて平時に異ならず、われは只覺醒せりとのみ思へり、されど其實われは幻想の中にありしなり、途すがら森、河、宮殿、家屋、人間など種々の物體を見たれども、われは嘗て躓くことあざりき。されどかくして歩むこと數時の後、われは忽然として肉體に返り、その目に觸るゝ所、以前と趣を異にするを覺えたり。わが驚愕は一方ならざりき、而してわれは此状態は即ち精霊によりて他處に到るときに情態なるものに等しきを知覺せり。

此情態の繼續せるうちは、幾何の路程を歩したるかを知らず、又幾何の時間又は日数を費せるかを知らず、又更に疲勞の心地あるを覺えざる也。されどその人は未だ嘗て知らざる道筋をたどりながら尙豫定の場所に到りて誤らず。

四百四十二。されど此等兩個の状態、即ち内分を在る時の人の情態は、(精靈に在るときは情態と云ふも同じ)異常なり、そのわがために示されたるは、われをして其何たるを知らしめんがためなりき、蓋しこは教會内に知れざる所なればなり。而して諸精靈と物言ふこと、又彼等の位に入りて其一員となることは、過去數年間、肉體の全然醒覺せる時、わが親しく經驗するを許されたる所なり。四百四十三。人はその内分において精靈なることは、前きに第三百十一節より第三百十七節に至りて、天界及び地獄は人類より成ることを言へるときに説き及ぼせる所なり、こゝに示せる所を見れば、益々わが言を確め得べからむ。

四百四十四。人は其内分において精靈なりと云ふは、人の想念及び意志に所屬せる事物の上より見てしか云ふなり、何となれば是等の事物は人の内分にして、人をして人たらしむる所以なれば也、而して人は其内分以外に出づるを得ず。

○死後の蘇生及び永遠の生命に入る事。

四百四十五。もし人の肉體にして其精靈が有する所の諸想念と諸情動と(是は靈界より來るものなり)に相應して、その自然界における諸官能を全うし得ざるときは、之を呼びて死となす、肺臟の呼吸と心臓の鼓動止まるとき即ち此事あり。されど此時その人格は死せるにあらず、只此世にて用をなせる肉體の部分より分離せらるると云ふに過ぎず、人格そのものは猶活けり。かく云ふ所以は、人の人たるは肉體の故にあらずして其精靈の故なればなり、此精靈は人の中にありて思索す、而して人格とはこの思想と情動とを合せたるものと謂なり。故に人の死すると云ふはたゞ此世界より彼世界に遷つると云ふの義なるを明らむべし。是故にまた聖言の中に死と云ふは、其内的意義において、復活の謂、生命永續の謂なるを知るべし。

四百四十六。精靈と呼吸及び心臓の鼓動との間に内的交通あり、そは精靈の想念は呼吸と通じ、其愛より來る情動は心臓と通ずれば也。故に此等兩個の活動息むとき、靈と肉と直ちに分離す。肺臟の呼吸と心臓の鼓動とは精靈を繋げる命脈にして、之を壞てば精靈已れに歸る。かくて肉體はその精靈の生命より分離するが故に次第に冷却して遂に腐爛せざれば已まず。人間の精靈が呼吸及び心臓と内的交通をなす所以は、人間の生死に關する活動は、全般的に、個々に皆肺心兩機關に賴る所あればな

り。

四百四十七。人の精霊は分離後尙暫らく其體中に残りて、心臟の鼓動全く止むを待つ、而してこは人の死因如何によりて生ずる所なり、即ち或場合には心臟の鼓動永く繼續し、或る場合にはしかく永からざる事あるべし。此鼓動息めば人は直ちに甦へるべし、されどこは只主のみの爲し給ふ所とす。復び甦るとは、人の精霊其の肉體を脱離し靈界に導かるゝの謂なり、普通に之を復活と云ふ。心臟の鼓動息むまで其精霊肉體より分離せざるは、心臟は情動に相應すればなり、情動は愛に屬し、愛は人間生命の本體なり。蓋し愛によるが故に人には各生命の熱あり。而して此和合の繼續するうちは相應の存在あるを以て、精霊の生命尙體中にあるものとす。

四百四十八。われは如何にして人は甦へるものなるかを傳へ聞けるのみならず、また實地の經驗によりて、わがために示されたり。かくわが實驗し得たるはわれをして此途行を充分に會得せしめんとめなりき。

四百四十九。われ昔て肉體の感覺上より見て、人事不省とも云ふべき状態に導き入れられたることありしが、當時われは殆んど將死の人の如く見え、されどわが内的生涯とその想念とは其まゝに残り居たるにより、わが身の上に生せる出來事、及び死より甦る人の上に生ずる出來事は、之を知覺してわが記憶の中に保持するを得たり。當時わが肉體の呼吸は殆んどなきが如く覺えたれども、わが精

霊の呼吸は尙残りて、靜かに音なき肉體の呼吸と和合しき。此時心臟の鼓動は天國と相通するに至れり、そは天國は人の心臟と相應すればなり。われは又天國より來れる天人を見たり、遠く隔たれるものもありしが、わが頭邊には兩個の天人ありて座せり。かくてわがすべての情動は取除かれたれども、想念と知覺とは尙ありき。

此情態にあること數時の後、われを圍繞せる諸精霊は、われを以て死せりとなして退き去れり。われはまた香料を塗れる身體より來る如き芳香を嗅ぐを覺えぬ、蓋し天國の天人現前するときは、死屍に芳香あるを覺ゆればなり。諸精霊此香を嗅ぐときは近づくを得ず、人の始めて永生に入るとき、諸々の凶霊、その人の精霊を離るゝに至るはかくの如くにしてなり。わが頭邊に座せる天人は默然たりしが、只其想念はわが想念と交通しき。かくて彼等の想念攝受せらるゝとき、天人はわが精霊の其肉體より分離し得べき情態にあることを知る。想念の交通は天人がわが面を眺むるときに生ずるものとす、そは想念の交通はすべて此の如くにして天界に行はるればなり。かくわれに想念及び知覺の尙残り居たるは、われをして心靈の蘇生は如何にして行はるゝかを知らしめ、且つ記憶せしめんがためなりしを以て、われは天人の先づ吾が想念の如何なるものかを知らむとするを能く知覺せり、又われは天人のわが想念は將死の人が有する所の想念なるか（こは大抵永生の事に關せり）を確むるを知覺したり。其後われ之を聞く、人の精霊は肉體の末期に當りて抱持したる所の最後の想念をば死後暫らく

は保存すれども、時を経るに従ひて彼はもと世にありし時抱持したる諸想念の裡に還り來ると、蓋し此等の諸想念は彼が全般的情動、即ち所主の情動より來る所のものなり。われは特に許されて、わが心の内分、即ちわが精靈が肉體より牽かるゝが如く、又殆んど抽き出さるゝが如きを知覺し、且つ感受するを得たり、われ之をきけり、こは主の所爲にして、復活を行ふ方便なりと。

四百五十。天國の天人は特に甦へらむとするものに附き添ひて去るを欲せず、そは彼等は一切のものを愛すればなり、されど若しこの精靈にして永く天國の天人の群に伍し得べき情態にあらざるときは、彼等は遂に之を去らんと願ふ。此の如きことあるときは、天人、主の靈國より來りて、この精靈をして光明の用を得せしむ、何となれば彼は今只想念のみを有して、未だ見る所あらざればなり。われはまた此事の如何にしてなさるゝかを見得たり。即ち靈國の天人は精靈のために左眼の覆を鼻梁の方面に向ひて巻き上げたる如く見えたり、此は其眼睛を開きて視覺を回復せんためなりき。されど天人は實地にしか爲たるにあらず只精靈のみ實に此事ありしと知覺するに過ぎず。かく眼の覆ひ巻き上げらるゝと覺ゆるや、少しの光あり、されど尙暗し、人の始めて醒むるとき眼蓋の間より物を見るとき如し。われはこの薄暗き光を見て天界の色彩かと疑ひぬ。されど其後聞く所によればこの色彩は人によりて異なれりと。其次にわが面より何ものかを柔かに巻き上ぐる如き心地せり、此事あるとき靈的想念入り來ものとす。此の面より何ものか巻き上げらるゝ如きも亦一種の幻象に過ぎずして、自

然的想念より靈的想念に遷るを表象せんためなりと云ふ。天人は今將に甦へらんとする人より、愛に本づかざる想念の起り來らんことを恐れて、注意周到を極む。此時天人彼に告て、彼は一箇の精靈なりと云ふ。かく光を興へたる後、靈國の天人は此の新來の精靈が現在の状態にありて願ひ得べき一切の事を彼が爲に辨じ、又彼が會得する限り、他生の事物につきて彼に教ふる所あり。されども此精靈にその教を受くるの心なきときは、彼は諸天人の伍を去らむと願ふべし。諸天人にはこの精靈を捨て去るが如きことなけれども、彼自ら其伍を離れ去る、何となれば天人は一切を愛するが故に、此精靈のために好誼を盡くし、教訓を傳へて、之を天界に導かんと思ふの外他念なければなり、是れを彼等が最高の歡樂となす。されど此精靈此の如くにして自ら天人の群を離れんとするときは、善靈來りて彼を攝受し、彼これ等の精靈と共なる間は、彼等これがためにあらゆる好情を盡さずと云ふことなし。されど此精靈世にありたる頃、善靈の群に入るに足るべき生涯を送らざりしならむには彼はまた此等の善靈をも離れ去らんと願ふべし、此の如くにして、此精靈遂にその世にありし時の生涯一致するものを得て之と群居するにあらざれば、此の轉遷を休止せざるべし。此の如く自己の生涯に順適せるものを發見するに及びて、彼はこゝに亦在世中の生涯に似たるものを送らむとするなり、誠に不思議なることどもなり。

四百五十一。されど此の人間死後の生涯における第一期は二三日以上相續するものに非ず、而して

其後彼は如何にして甲の情態より乙の情態に遷りて、終に或は天界、或は地獄に赴くかは次に説くべし。これまたわが多くの經驗によりて知るを許されたる所なり。

四百五十二。われ嘗て死後第三日目の精霊と物言へることありき、上に記せる(四四九、四五〇)如き事項は此日に生せるなり。此中の三人は生前わが世にて知れるものなりしが、われ彼等に葬式の準備整ひて彼等の屍體今や埋められんとすと告げぬ。われ此く「彼等を埋む」と云へるとき、彼等之を聞きて驚惶一方ならずして曰ふ、「吾等は尙生けり、吾等が朋友は只その世にあるとき吾等のために役使せられたるものよみを埋めて可なるべし」と。其後彼等は尙世にありし頃、死後此の如き生涯ありと云ふことを信せざりしを思ひて、驚くこと甚しかりき、特に教會内の人にして之を信するもの極めて稀なるを見て、彼等は愕然たりき。世にあるとき、肉體は死すれども、靈魂の生涯の尙相續すべきを信せざりしものは、その死後尙生けるを見て、慚愧措く所を知らず。此の如き不信仰によりて決定したるものは、その同類と相集まりて自ら有信者より分離す。彼等は大抵地獄界における團體に赴くものとす、何となれば此の如くにして後等はまた神格を否定し、教會の諸眞理を蔑視したればなり。靈魂の永生を肯はざるものは亦天界及び教會の事物を肯はざるものなり。

○人は死後圓滿なる人身を有すること。

四百五十三。人間精霊の形式は人身なること、即ち精霊は其形式において尙人間なることは前數章に云へる所にて明なるべし、殊に各天人は圓滿なる人身を有せりと説ける章下に明かなるべし(七三より七七)、又人は其内分において一箇の精霊なること(四三二より四四四)、及び天界における天人は人類よりすること(三二一より三二七)より見てもまた明かなるべし。尙この事は、人の人たるは其精霊によりて其肉體によらざること、肉體の形式は精霊の形式に従ひて之に附加せられたるものにして、精霊は肉體よりせざること云ふことを見れば益々分明なるべし、何となれば精霊は自己の形式に従へる肉體を以て自ら蔽ふものなればなり。故に人間の精霊は身體の各局部にわたりて活動せり、至微のものど雖洩るることなし、而して此活動の微細親切なるや、もしわが身體に精霊の動かす所とならざるもの、即ち精霊の活動なき所あれば、此部分には生命なし。此事果して然るを知らんとすれば次の事實のみを見て足れりとす、即ち吾等が所有の想念と意志とは、この身體の各部分を全般の上より、個々の上より動かして權力至らざる處なく、一切のものは皆これを得て相協力す、もしこの協力に加はらざるものあらば、そはわが身體の部分にあらず、生命なきものとして外に投げ棄てらるべし。而して意志と想念とは人の精霊に屬して、身體に屬せざるなり。

吾人が人間の形態中に身體を離れたる精霊を見ず、又他人の精霊を見ることなき所以は、肉體的視覺の機關たる眼根が、此世において見る限りのものは、悉く物質的なればなり、物質的なるものは只物質的を見るのみ、靈的なるものにあらざれば靈的を見るを得ず。故にいま肉眼の物質的部分を蔽ひて、靈的部分との協同を絶つときは、此に始めて精霊の自相を見得べし、而して此自相は即ち人間の形態なり、かくして常に精霊界の精霊を見得るのみならず、尙肉體中にある人間の精霊をも見得べきなり。

四百五十四。人體が精霊の形式なる所以は、精霊の上より見て人は天界の形式に従ひて造られたるものなればなり。何となれば天界と其順序とに屬する一切の事物は亦人の心に屬する一切の事物中に集め收めらるればなり。故に人は智慧と證覺とを受くべき能力あり、蓋し智慧と證覺とを受くべき能力と云ふも、天界を受くるに足るべき能力と云ふも同じ事なり、そは天界の光りと熱とにつきて云へる所（一二六より一四〇）、天界の形式につきて云へる所（二六五より二七五）、天界は、全般より見ても、各部分より見ても、其形式上、概括して言へば、一個の人體に類せりと説ける章（五九より七七）を参照せば明かなるべし、而して此一個の人體に類せりと云ふことは、天界と其形式とは主の神的^〇人格よりするが故なり、こは第七十八節より第八十六節に説ける所とす。

四百五十五。理性を有せる人は原因、結果の連鎖を尋ねて事物を見るが故に、隨ひて諸眞理を秩序的に見るを得るが故に、如上の事項を會得すべからんも、理性を缺ける人に至りては之を會すること難かるべし。これには種々の原因あれども、其重なるものは、之を會得せんとの意志を缺くに在り、何が故に此意志なしと云ふに、是等の事項は彼等が自ら眞理と思へる諸々の虚偽と相容れざればなり。かくの如くにして之を會得せんとの意志なきものは、おのれが理性に達すべき天界の途を塞ぐものなり。されど此意志もし抵抗をやむれば、天界との交通は尙開け得べし（上を見よ四二四）。

人もし其意志だにあらば、眞理を會得して、理性的となり得ることは、多くの經驗によりてわがために證據せられたり。世にありし時、神格及び教會の諸眞理を否みて理性に乖戻し、非理の上に自信決定したる凶靈ありき、彼等屢々神の力によりて眞の光ある處に轉じ向はしめられたるとき、彼等は天人が爲せる一切の事物を會得し其の眞理なること、及び彼等の之を會得せることを告白せり、されど彼等またその己れに歸りて、我意をのみ愛するに至れば、直ちに何事をも會せず、前きに言へる所を否まざれば已まず。

われはまたある地獄の精霊の云へるをきけり、曰く、吾等はその所爲の惡しきこと、其所見の偽りなることを知り且つ覺ゆれども、われらは之を愛するの情、即ちわが意志に抵抗するを得ず、自ら惡しきを善となし、偽りを眞となす如くに思惟せざるを得ざるなりと。かくの如くにして惡よりする諸々の虚偽に在るものと雖、會得の力あり、隨ひて理性的となるに足ることを辨へ得べし、只彼等は其意

志なきなり、其意志なき所以は虚偽を愛すること真理に過ぐればなり、これ虚偽は彼等がをる諸惡に一致するに由る。之を愛すと云ふも、之を志すと云ふも同じ事なり、何となれば人は志す所を愛し、且愛する所を志せばなり。故に人は其意志にあらば、真理を會し得べき能力を有せりとすべし、かくてわが天界及び教會に關する靈的真理を、理性上の考察によりて確かむるを許されたるは、道理に稱へる推究によりて多くの人々の理性を塞げる虚偽を排除し、又かくして多少其眼界を濶大ならしめんがためなり。何となれば理性上の真理によりて靈的真理を確むるは、真理にをるものが有する特權なればなり。人もし光明ある道理によりて聖言の中に含める真理を見るにあらざれば、誰か能く文字の意義にのみよりて聖言を解すべき。同一の聖言にして、而かも多くの異端ある所以は、此の道理を缺けばならずや。

四百五十六。人間の精靈は、身體を離れて後も、尙一個の人間にして、人體と相似たる形態を有することは、多年の間日々の經驗にてわがために證せられたる所とす、何となればわが之を見聞せるは千度に及べるのみならず、われはまた諸精靈と此事につき語りて、世間の人は精靈の人間なることを信せず、之を信するものは學者之を愚かなるものとなすと曰へることあればなり。精靈は此の如き妄想の尙世間に行はるゝを慨けり、特に教會内に此事あるを慨きて曰ふ、此の如き所信は重もに學者より生まれり、彼等は肉體の感覺に屬せる事物によりて、靈魂の事を思惟して、以爲らく靈魂は只想念

上に在るものにすぎすと、而して彼等は想念を包藏し、涌起せしむる所の所主者を疎外して顧みざるが故に、彼等はこれを以て一種氣發性のものとなし、また純粹なるエーテルの如きものとなし、肉體の死すると同時に亦消散せざるを得すとせり。されど教會は聖言によりて靈魂の不滅を信するが故に、學者は止むを得ず靈魂を以て想念の如くにして多少生氣あるものとなせり。されど彼等はこれを以て人間の有する如き感覺性あるものとなさず、此感覺は其再び肉體と合するときにのみ有るべしと云ふ。復活に關する教説の基礎をなし、又最終の審判の時、肉體と靈魂と復た融和すと云ふ信仰に對してその基礎をなすは是説なり。既に是の如くなるが故に、學説と臆斷とによりて靈魂の事を思惟するものは、靈魂は精靈にして人體の形式を有せりと云ふを會得する能はず。

寔に今の世、精靈の何たるかを知るもの殆んど之れあらず、まして天人の如き、精靈の如き靈的存在は、其形式において人體に似たりと云ふをや。故に世間より來れるものは大抵其尙生けるを見、また生前と同じく依然として人間なるを見て愕然たらざるはなし。彼等は見聞し、言説し、又その身體には以前の如く觸覺ありて、總て生前と相異なるなきを見て愕然たらざるはなし(上を見よ、七四)。されど彼等自ら驚くことなきに至れば、彼等は次に何が故に教會は死後人間に此の如き情態あることを知らざるか、又天界及び地獄の事につきて知る所あらざるかを怪しむべし、彼等以爲らく、而かも世にありしほどのものは皆他生に來りて人間の生涯を營まざるはなきにあらずやと。彼等は又何が故に

此の如く教會の信仰に緊切なる事物が幻象によりて明かに人間に示されざるかを怪しめり。されど天界に聲あり、彼等に告げて曰ふ、此はなし難きにあらず、もし主の御意にだに稱ひなば、これより容易きはなし、只如何にせん、彼等は深く此等の事物に背きて自信決定したるにより、たとひ之を目に見るとも彼等は之を信せざるなり、又虚偽に在るものをして、幻象によりて確定する所あらんとするは危険なるわざなり、そは彼等はまづ之を信じ、後に之を否み、かくして眞そのものを潰すべければなり、眞を信じて後之を否むは汚瀆なり、眞を否むものは地獄界中の最も低き處、最も哀むべき處に投下せらるべし。主が次に言ひ給ふ所は、此危険を意味せるものなり、曰く、「彼等目にて見、心にも悟り、改めて、癒さざることを得ざらむがために、彼等其目を瞽し、其心を頑梗せり」と(約翰傳、第十二章、四〇)。又次の句は虚偽に在るものゝ尙ほその不信を止めざるを云へるなり、曰く、「アブラハム地獄にある富者に云ひけるは、彼等はモーゼと預言者なれば、之に聞くべし、されど彼等曰ふ然らず、父アブラハムよ、もし死より彼等に往くものあらば、悔改むべし。アブラハム言ひけるは、彼等もしモーゼと預言者に聞かすば、たとひ死より甦るものありとも之を信せざるべし」と(路加傳、第十六章、二九、三〇、三一)。

四百五十七。人間の精霊始めて精霊界に入るとき、(こは上に記せる如く、蘇生の後ほどなく起る所なり) 彼は尙ほ世間にありし時と相似たる面貌及び聲調を有せり、そは彼は當時尙外分の情態に

をりて、其内分未だ啓けざればなり。之を死後最始の情態となす。されどその後は彼の面貌轉化して終に全く以前のと相異なるに至るべし、何となれば彼が世にありし時其心の内分において主となりたる愛、即ち彼が情動の如何によりて、其面貌は次第に轉化し之と相似るに至るべければなり、蓋し彼の精霊は尙その身體中にあるとき此愛即ち情動を以てその生命となせしなり。人間精霊の面貌は其肉體の面貌と頗る相同じからず、後者は彼が父母より傳ふる所なれども、精霊のは彼が情動より來る、即ち精霊の貌は情動の肖像なり。而して肉體の死後精霊が現する所の面貌は即ち此肖像そのものなり、此時外分は除き去られて、内分のみ現はれ出づればなり、之を第三の情態となす。

われ嘗て世間より靈界に來りて未だ程へぬ精霊を見たる事あり、其時われは彼の面貌と音聲とにてその誰たるを認識したれども、其後再び之を見たるときは、相識らざりき。よき情動を有せるものは、其面美はしくなれども、惡しき情動に在るものゝ面は醜くし、何となれば人間の精霊は、其自性より之を見れば、情動そのものに外ならず、而してその面貌は此情動の外に現はれたるものなればなり。此く面貌の轉化するは、他生にありては、われにあらざる情動を詐り装ふを得ず、從ひてわが誠に有せる所の愛と相反せる面貌を装ふを得ざればなり。他生にあるものは皆其思想のまゝに言説し、その意志のまゝを面に現はし、また身體に現はすべき情態に在るが故に、一切精霊の面貌は其情動の形態なり、肖像なり、故に世間にて相知れるものはまた精霊界にて相識るを得べし、但し天界と地獄とに

は此事なし(上を見よ、四二七)。

四百五十八。偽善者の面貌は他の精靈よりも後れて變化す、その故は彼等の内分は常によりき情動を模するに慣れ居ればなり。故に彼等は久しくその本来の不美を暴露することなし、されど彼等が虚飾は次第を逐ひて取除かるゝが故に、その心所成の内分は亦彼等が情動本来の形態に従ひて變容すべし、是時偽善者は其本色を暴露して、を極むるに至る。偽善者とは天人の如く言説すれども、其内分には只自然界のみを是認して、神格を是認せず、従ひて天界及び教會の事物を否定するものを云ふ。

四百五十九。各人が死後に受くる所の人間的形態は、嘗てその内分において神の事物を愛し、之によりてその生涯を營みたる度の多少に比例して、美醜を別つものなることを知らざるべからず。何となれば各人の内分の啓かれ且容づくらるゝはその愛及び生涯の如何によるものなればなり。故に情動益々内的にして、天界に順適すること益々大なれば、其面貌は美を極めり、彼等は實に天國の愛そのものを以てその容となせり。されど神の眞理を愛すること稍や外的なるもの、従ひてその生を送ること亦外的なるものは、此の如く美はしからず、彼等の面貌の上に耀くは只その外分のみにして、内的なる天界の愛は此に耀かず、故に天界の形式そのものは亦此に現はれず。其面上には稍や朦朧なるものありて懸れり、このもの内的生命の照らす所ならずして活氣を缺けり。一言にて云へば、一切の

ものは内分に随ひて圓滿となり、外分に向ふに随ひて缺損す、美の損減も亦此の如し。われ嘗て第二天の天人の面を見たるに、其美はしさは、如何なる畫家ありてその技術を盡くすとも、其光明及び活氣の千分の一に比すべきものを、彼が彩色の上に發揮し得べしとは思はれざりき。されど最下天にある天人の面貌は多少之を描き得て眞を得べからむか。

四百六十。終に臨みて從來知られざりし密意を記すべし。主より起り來りて天界を成せる所の善と眞とは一として人間的形態を存せざるはなきなり、嘗に全體の上とその至大なるものごとにおいてのみ然るにあらず、亦各部分とその至小なるものごとにおいて、悉く然らずと云ふことなし。苟も主より眞と善とを攝受するものは、すべて此形態の動かす所となり、また天界に在るものは之を攝受するの度如何に従ひて人間的形態を具ふるものとす。故に天界は全般の上並びに個々の上より見て同一ならずと云ふことなく、天界全般の形式、各團體と各天人との形式は皆人間的形態なり(こは先きに第五十九節より第八十六節に至る數章中に示せる所なり)。こゝにまた附加すべき一事は、天人の想念に屬して天界の愛より來るものは亦悉く此形式中にあること是也、されど此密意は何人の智性にも容易に入らざる所なるべし、天人のみは天界の光明中にあるが故に明かに之を會得せり。

○人間は他生においても亦此世にありしときの如き感覺、記憶、想念、情動を有すること、及び死後此世に捨ておくは物質的形骸のみなること。

四百六十一。人の自然界より靈界に移るや、彼はその一切の所有、即ち人間として彼に屬せしものをすべて持ち去れども、只其物質的形骸のみ後に残しおくことは、多くの經驗によりて、わがために證據せられたるところなり。何となれば人の靈界即ち死後の生涯に入るや彼は自然界にありし時の如き身體を有すればなり、彼は何等の相違を知覺し又見得ざるが故に、打見たる處塵身と靈身とに何等の相違あるを知らず。されどその實此身體は既に靈的となれり、隨ひて物質的事物より分離せり、即ち純化せり。靈的なるものゝ相觸れ、相見るは、猶ほ自然的なるものゝ相觸れ、相見るが如くなれば、人一旦精靈となるも、彼は世にありし時の體中にありとのみ思へり、その嘗て死せることを知らざるなり。

精靈としての人間は亦世にありて感受せる如き内的並に外的感覺を有せり、即ち彼の見ること前の如く、聞くこと、言説すること亦前の如し、嗅ぐこと、味ふこと亦然り、觸るゝ所あれば彼は亦前の如く之を感すべし、また彼は舊の如く求むるところあり、願ふところあり、欲するところあり、彼は亦思索し、省察し、感動し、愛し、意志す、而して學問を好むものは亦舊の如く讀書し、著述す。一言にて曰へば、此世より他生に移ること、即ち此世界より彼世界に移ることは猶甲處より乙處に轉するが如し、何となれば彼は前きに人として其身に保てる一切の事物を、到る處に持ち行けばなり。故に人の死せりと云ふは、物質的形骸の死を云ふに過ぎずして、之がために自己を失ふことあらず。

彼は又自然的記憶を有てり、蓋し彼は極めて幼少の時より終焉の時に至るまで、世にありて其見聞せる所、讀誦し、學得し、思索せる所は、すべて己れに留收せずと云ふことなし。されど其記憶中にある自然的事物は靈界において再現すべからざるが故に、是等の事物は靜息せり、猶ほ此記憶をもととして思索せざるべきの如し。されど主の旨に稱ふときは、これ等の事物再び現出することあり。此記憶及びその死後の情態につきては間もなく後に至りて尙詳しく説くべし。

感覺上の人は死後此の如き情態あることを會得せざるが故に、亦之を信する能はず、彼は靈的事物に關してすら自然的に思惟するより外なきなり、故に彼が知覺せざる所、即ち彼の肉眼にて見、手に觸れざる處は、彼之を斷定して無有となす、約翰傳中のトーマスの如し（第二十章、二五、二七、二九）。何をか感覺上の人となすと云ふことは上に記せり（二六七及び其註を見よ）。

四百六十二。されど靈界における人間の生涯と、自然界の生涯とは大に異なれり、嘗に外的感覺と

之が情動のみならず、肉的感覺と之が情動につきても亦然り。天界にあるものは其知覺、即ち其見る所、きく所は一層精妙なり、又其思索も世にあるときよりは證覺に富めり、何となれば彼等は天界の光を以て見ればなり、而して天界の光は地上の光に超ゆること數度に上れり(一二六)、彼等の聞くは靈的空氣によれり、而してこは地上の空氣に勝ること數度の上であり(二三五)。是等の外的感覺の相違は猶ほ地上における青天白日と暗憺たる雲霧との如し、又日中の光明と黄昏との如し、何となれば天界の光明は神眞なるが故に、天人の視覺をして極微の物體をも知覺し、分別せしむればなり。

天人の外的視覺は又其内的視覺即ち智性に相應す、何となれば天人にありては此れと彼れとの視覺互に流入して其作動相一致すればなり、彼等が驚くべき鋭敏なる視覺を有するは是がためなりとす。彼等の聽覺は又其知覺と相應せり、此知覺は智性と意志とに屬す、故に彼等は言者の音聲と語句とをききて、その中にその人の情動と想念とを知覺すること、至微の點に至りても誤らず、其音聲中に情動の細目を知り、其語句中に想念の細目を知る(二三四より二四五)。されどこれ以外の諸感覺は視聽の兩覺の如くに精妙ならず、そは視聽の兩覺は智恵と證覺とを助けれども、他の諸覺には此事なし。もし兩覺此の如く精妙ならざらんには、彼等が證覺の光と歡喜とは取り去られて、種々の情慾及び身體より起る諸慾これに代はるべく、而して是等の諸慾を喜ぶものはその智性暗くして弱し。世上の人を見て正にその然るを知るべし、味覺に耽り、觸覺の誘惑に耽るものは、靈的眞理を會すること

鈍くして遅し。

天界の天人が有する内的感覺、即ち其想念と情動とに屬する感覺は、彼等の世にありし時よりも一層精妙にして圓滿なることは、天界の天人の證覺を説ける章下に明かなり(二六五より二七五)。地獄界にあるものゝ情態はまた彼等が世上にありし時と大に異なれり、何となれば天界の天人が其内外の感覺において、大に圓滿にして精妙なる如く、地獄にあるものは之に逆比例して此兩覺缺損して暗昧なればなり。されどこは尙下章に述べべし。

人此世を去るとき、一切の記憶を持ち行くことは種々の方法にてわがために示されたり、又われは記述に値すべき多くの事物を見聞せり、序を逐ひて其二三を述べべし。さる精靈、その世上にてなせる諸々の惡事と罪逆とを否定し、よりて自ら罪なきものと看られんことを願ひしかば、彼等が行爲は一々に暴露せられ、その幼時より終焉に至るまでの罪業悉く其順序に従ひて彼等の記憶中より算へ立てられたり。彼等は重もに行姦淫奔の徒なりき。

又よからぬ手段によりて他を欺けるあり、竊盜せるあり、是等詐僞及び偷竊の行爲は一々其次第を逐ひて計算せられぬ、而して是等の罪惡中には犯罪者の外殆んど何人も知らざるもの多かりき、彼等は皆之を是認せり、何となれば此等の犯罪は白日の下に運び出だされたる如く暴露し、當時彼等の心に抱ける思想、計劃、歡喜、恐怖など一々に再現し來りたればなり。

賄賂を貪りて法廷を賣りたる者も、亦此の如く其記憶に基きて、一々暴露せられ、己が就職の日より最終に至るまで剩すことなかりき。彼等は如何なる賄賂、幾何の賄賂を何の日に受けて、その時如何なる心を有し、如何なる目論見を抱けるかなど細大洩すことなく、一時に之を其記憶に上ぼし、視覚の前に現せり、其數數百を超えぬ。此の如き事數々行はれたるが、中につきて不思議に覺えたるは、是等の事項を書しおきたる彼等の覺帖まで、其面前に開かれて、一枚／＼に読み上げられたることこれなり。

處女を誘惑して之を辱かしめ、その貞操を破れるものも亦同一の審判に附せられき、彼等がこの罪逆を犯したる當時の狀景悉く其記憶より引き出されて、読み上げられたり。又彼等が辱かしめたる處女及び婦人の面貌までも、恰も其處に現前せる如く寫し出され、犯罪の場所、其時の言語、計劃皆あばき晒らされぬ。是等の事物は忽然として幻の如く現はれたり、而して此の如きこと數時に涉りて始めて已みき。

又人を誘ふことを輕視せるものあり、彼が行へる誹謗及び讒毀は悉く次第を逐ふて計へられ、其人が當時用ひたる言語はそのまゝに再現し、何人を誹謗して、何人の前に之を言へるかに至るまで、一々彼の面前に活現せられたり、是等の事は彼が世にありし時、心を用ひて隠屏せんとしたる所なりき。又親戚を欺きて其遺産を奪へるものありしが、彼も亦此の如くにして其罪に服し、判決を受けた

り、而して不思議なるは彼等の間に交換せる書簡及び文書まで読み上げられたるをわが聞けるにあり、此中には一句の誤りなかりきと云ふ。此の同じき人その前幾程もなく、私かに隣人を毒殺せることあり、此罪惡も亦此の如くにして顯にせられぬ。此人その足の下に穴を穿つ如く見えしが、之より墓を出づる如くに出で來るものあり、音聲高らかに彼に曰ふ、「汝は吾に何を爲せしか」と。かくて其時の光景細大となく顯れ出て、此犯人がなれ／＼しく物言へること、盃を勧めたること、又此以前に彼が私かに考へたること、是以後に起りたる事など洩らされたるはあらず。此の如く其罪を暴露せられたる後、彼は地獄に放たれぬ。

一言にて曰へば、一切の惡事、凶行、掠奪、僞巧、詐欺、悉く凶靈の前に明かに現出せられ、彼等の記憶中より將ち出さるゝが故に、彼等は其罪に服せざるを得ざるなり、又實に之を否定すべき餘地なし、何となれば一切の狀况暴露せずと云ふことなければなり。われは又天人が或人の記憶を看察し、點檢せるとき、われは其人が一ヶ月の中日々何事を思想せるかを誤りなく見得たることあり、是等の思想は日々彼の心にありし如く喚び起されしなり。

此等の例によりて、人は記憶をそのまゝに止め置くこと、世にあるときは如何に隠屏せることも死後現はれざるはなきこと、而して是は諸人の面前にて起ることを明かにすべし。主の言葉に曰く、「それ掩れて露はれざるものはなく、隠れて知れざるものはなし。是故に汝等幽暗くろきに語りしことは、光ひ

明るに聞ゆべし。密室にて耳語せることは屋上に播かるべし」と（路加傳、第十二章、二、三）。

四百六十三。人死して後、その生前の行動暴露するときに當り、之が檢校の職を司る天人は、其人の面を熟視し、それより全身にわたりて検査す、その検査は左右の手の指先より始まりて、次第に全體に及ぶものとす。われ之を見て不思議に思ひしかば、天人はわがために其理由を説明して曰く、人間の想念及び意志に關することは微細の點に至るまで悉く腦中に銘記せらる、そは腦髓は是等の事の發足點なればなり。而して是等はまた全身にも銘記せらる、蓋し想念及び意志に關する事項は其發足點を出でたる後、全身に擴がりこれを終極點となして、こゝに止まればなり。是の故に意志及びその想念より出でし記憶の中に銘記せらるゝものは、管に腦髓中に銘記せらるゝのみならず、亦全身の上に銘記せらると云ふべし、而して是等の事物はこゝにて身體諸部の秩序に従ひて排列せらるゝものとす。かくて人身の全體はその人の意志及びその想念をそのまゝに現露せり、即ち惡人はその自ら具ふる所の惡の權化にして、善人は善の權化なるや明白なり。故に聖言の中に「生命の書」と云へるは、人の想念及び意志はすべて、その人の全身に銘記せらるゝものにして、記憶中より之を喚び起すときは、こゝに現前すること猶ほ文書を讀むが如く、又此人の精靈を天界の光明中におくときは、一切のこと悉く眼前に現出するが如きを言へるや明かなり。

以上の事實に附加して、此に人の死後の記憶につき記すべき一事ありと云ふは、一旦人の記憶に入

れるものは、管に全般的の事物のみならず、最も微細の點に至るまで悉く留存して決して塗抹せられざること之なり、而してこはわがために確かめられたる所なり。われ嘗て天界にて或る書卷を見たるに、其中の文字世間の文字に似たり、天人われに告げて曰ふ、是等の書卷は著者の記憶より成るものにして、彼が世にあるとき書きたる書卷中のことば一字と雖此に缺けたるはあらずと。かくして最も微細なる事情にして人の世にあるとき既に忘却せられたるものもその記憶中より呼び起さるべし。天人この道理をわがために説けり。凡そ人には外的記憶あり、内的記憶あり、外的記憶は自然的人格に屬し、内的記憶は靈的人格に屬す。人の思想、意志、言語、所行、或はその見聞したる所まで、皆この内的、靈的記憶中に記入せられ、一旦記入せられたるものは決して抹殺せられず、何となれば此等の事物は之と同時に精靈そのものゝ上に記入せられ、又身體の諸肢節に記入せらるゝこと、上に言へる如くなればなり。故に人の精靈なるものは其意志に基ける諸想念及び諸行動によりて成るものとす。是等の事物は互に撞着するが如く見ゆるが故に、之に信じ難しとなすもの多かるべきをわれは知り、而かもこは眞まことの事實なり。故に人は決して其私かに思惟せる處、密かに行へる所を以て死後にも尙秘密に付し得べしと信すべからず、如何なる至小の事と雖も、この時に至れば青天白日の如く顯著なることを了せんを要す。

四百六十四。外的即ち自然的記憶は死後尙存すれども、其中にて純粹に自然的なるものは他生に再

現せず、只相應によりて自然的なるものに附合せる靈的事物のみ再現す。されど是等の靈的事物も、視覺上に現前するときは、全然自然界にありし時の如き形態を具ふ。蓋し天界にて見る萬物は世間の萬物と相同じ、たゞ其實性は自然的にあらずして靈的なりとす、こはさきに天界の表像及び影像を説ける章下に示しおけり(一七〇より一七六)。

外的即ち自然的記憶の中にて物質的なるものと、空間及び時間より來れる事物と、自然界に屬する其外一切の事物とは精靈に對してその用を遂ぐるごと、世に在る人に對するときと同じからず。何となれば人の世に在るや、外的感覺上のみより思索して、之と同時に内的即ち智性的感覺上より思索せざるが故に、其思索は自然的にして靈的ならざれども、他生にては精靈は靈界にあるが故に、其思索するや自然的ならずして靈的なればなり。靈的に思索すとは智性的又は理性的に思索するを言ふ。故に物質的事物に關せる外的即ち自然的記憶は其時靜息せり、但し人、世にあるとき、物質的事物を所依として其心に吸収し、これを理性的となしたるもののみは他生にて用をなし得べし。物質的事物に關せる外的記憶の靜息する所以は、靈界にては之を再現すべきやうなればなり。蓋し精靈及び天人は彼等の情動とその想念とより言説するによる、是等は皆心の所屬なり。故に此等の事物と相一致せざるものは彼等の言説し得ざる所とす、こはさきに天界の天人の言語及び彼等と人間との會談のことを言へる所に見て明かなるべし(二三四より二五七)。

是の事由により、人は死後或程度迄は理性的なり、此程度は彼が世にありし時、語學を知り、學術に長けたる知識の程度にあらずして、是等の事物によりて如何ばかり理性的となれるかを言ふ。世に在りし頃、學者と稱へられたる人々と、わが物言へることありき、彼等は希伯來語、希臘語、羅旬語の如き古代の語學に長けたれども、是等の言語にて書ける文義を會得し、これによりて其理性的能力を修養するを怠りき。此等の事物の中には、何等の語學を知らざるものと同様に愚昧なるあり、又魯鈍なるさへあり、されど彼等には尙一種自尊の氣ありて、自らは他に優りて證覺を有せりと思へり。

われは又其世にありける頃、人の證覺は記憶の大に比例すと信じて、無暗に多くの事物を記憶せるものと物言へることありき、彼等の言説は殆んど全く此記憶中より來れり、かくて彼等は自ら言説することなく、只他人のために喋々するのみ、彼は嘗て此記憶中の事物に基きてその理性を養はんとはせざりき。その中には魯鈍なるあり、又愚痴なるあり、眞理を見ても其果して眞なるかを會得せず、所謂る學者なるものが眞理を語るをきけば、これを以て直ちに眞理なりとなして、その實虛妄の理なるを解せず、何となれば彼等は自ら眞偽を甄別するの明なればなり、故に彼等は何事も理性的に看察することなく、只他の言ふ所を是れ信するに過ぎず。

われは又世間にて多くの著述をなし、各科の學術にすら指を染めて、學名嘖々たりし人と物言へることあり。彼等の中には眞理につきて其眞否を論究し得るものなきにあらず、又眞理の光りにをるも

のに向へば其眞實なることを會得するものもあり、されど彼等は尙之を會得するを好まざりき、故に彼等自有の虚偽の裡に在るときは、即ちその自己に還るときは、また之を否定したり。又或ひは無學の鄙人よりも賢ならざるがありがき。かくて同一の學者と呼ばるゝものにも、彼が著述し又筆記せる學術上の事物によりて其理性的能力を修養すると否らざるにより、相互に異同あるを見るべし。されど教會の眞理に反對して、學術上より思索し、虚偽の理によりて自信したるものは、理性的能力を養はずして、却て只論究の術にのみ長せり。世にはこの論究の能力を以て理性なりと信すれども、其實は理性を離る、何となれば此は自ら好む所によりて事物を決定する能力に過ぎざればなり、而してその之を決定するや、先入の思想を基とし、虚偽を基とし、眞理を見ずして、只非眞のみ見る。此の如き人は決して眞理を是認するに至らず、蓋し眞理は虚偽によりて見るべからず、而かも虚偽は眞理によりて見るを得べければなり。

人の理性は園庭の如し、花壇の如し、又新墾の田地に似たり、記憶はその土なり、學術的眞理及び知識は其種子なり、天界の光と熱とは之をして成長せしむ、此の兩者なくば發芽せず。人の光も亦然り、天界の光即ち神眞と、天界の熱即ち神愛との入り来るにあらざれば生長せず、理性的なるものは只此兩者より来る。天人は多くの學者が一切の事物を自然に歸し、かくして自ら其心の内分を鈍くし、眞理の光即ち天界の光によりて眞理の何たるかを見得ざるを悲しむこと切なり。故に此の如き學者は

他生にては論究の能力を取り去らる、彼等が此力を利用して魯直、善良なるものゝ間に虚妄の理を普及し、かくてこれを誘拐することなからんがためなり。彼等は又荒野に放たる。

四百六十五。さる精靈あり、肉體の生涯にありし時知れる事物にして今想ひ起し得ざるもの多しと云ひて怒り、且つこれがために失ふ所の樂しみ大なるを悲しめり。されど天人彼に告げて曰ふ、汝は何物をも失はず、汝は尙凡ての事をあげて知らずと云ふことなれども、汝が今を世界にては此の如き事物を想ひ起すを許さず、今や汝の思想及び言語は以前に比して優秀に且つ圓滿に近づかんと思へり、汝の理性的なるものは、また昔日の如く、かの粗にして暗き、物質的、肉體的なる事物の中に埋没せらるゝことなかるべし。これらの事物は汝が今をる所の世界にありては何等用ゆる所あらず、汝當にこれを以て足れりとすべし。汝は永遠の生命を養ふに足るべき諸用はいま悉く之を有せり、汝が福祉及び幸福を得べき道は只之によるの外あるべからず、故に此國土にて汝が物質的の事物は埋没し、静息して記憶中になきが如くなれども、これと共に汝の智慧も亦滅却すべしと信するは、一分の不覺なりと謂ふべし、然るに其實は汝の心をして外的人格、即ち肉體の諸感覺より脱離せしむれば、それに比例して汝は靈界及び天界に屬する事物の中に高めらるゝなりと。

四百六十六。他生にありては、時として、是等兩性の記憶の性相、彼處にてのみ見得べき形式をとりて、眼前に現することあり、何となれば人間より見れば只概念に過ぎずと思はるゝ所のものも、他生

に在りては形態を受けて眼前に現すること多ければなり。外的記憶は皮膚の硬くなれるに似、内的記憶は人間の脳中にある髄質の如きものと見ゆ、かくの如くにしてわれらは其性相を知るを許さるゝなり。肉體の生涯中只記憶力のみを發達して、其理性的なるものを修養せざりし精靈はその記憶頗る硬きが如く見え、又約筋に似たるものありて其裏を斑文す。虚偽をもつて記憶を充たしたるものは、毛ありてこれを蔽ふ、荒くして粗なり、その紛雜して序なきを示す。自己及び世間を愛するがために記憶を養へるものは、膠にて塗れる如く、骨質となる。所謂學術的なるものによりて神の奇跡に徹底せんと願へるもの、特に哲學によりて之をなさんとしたるもの、又此の如きものによりて説きささるゝにあらざれば、事物を信せざるものは、其記憶暗憊たり、光線を吸収すれども之を轉じて却て暗黒となす性質あり。人を欺きて偽善を事とせるものは、其記憶骨質となりて、黒檀の如く堅し、光線を反射す。されど愛の善と信の善とに在るものには此の如く硬きものなし、そは彼等の内的記憶によりて、光明外に傳はればなり、此外的記憶中の物象、即ち概念を以て其基礎となし、根底となして光線は此に留まり、此に受け收めらる、而して歡喜自ら其中に在り。何となれば外的記憶は順序の終極にして、此に諸善あり、諸真あるとき、靈界及び天界の事物は軟かに來りて此に留まり住めばなり。

四百六十七。此世にありて主を愛し、隣人を愛するものは、その身と共に、その身のうちに、天人の如き智恵と證覺とを有すれども、こは彼が内的記憶の奥底に深く潜伏せり。肉體的事物を脱離する

にあらざれば、彼は自ら此智恵と證覺とを少しも見ることを得ず、此脱離のとき來るとき、自然的記憶は昏睡して内的記憶のみ惶々たり、彼は遂に次第を逐ひて天人的記憶そのものに達すべし。

四百六十八。如何にして理性的なるものを修養すべきかを少しく示すべし。純粹なる理性的は眞理よりなりて虚偽よりならず。何となれば虚偽よりするものは理性的ならざればなり。眞理に三級あり、民文、道德、靈的是なり。民文上の眞理とは諸國土における法令及び政治に關す、概して曰へば正道と公法とに屬せり。道德上の眞理とは同侶の間及び社交的關係につき、各人の生涯に屬するものにして、概して摯實及び正義の事、殊に一切の德行に關せり。靈的眞理に至りては、天界及び教會の事物に係はり、概して愛の善及び信の眞に屬せり。

各人には又三級の生涯あり（上を見よ、二六七）。理性的なるものは民文上の眞理によりて第一級を開き、道德上の眞理によりて第二級を開き、靈的眞理によりて第三級を開く。されど此に知らざるべからざるは、かの理性的なるものと形成せられ、裕開せらるゝは、是等の諸眞理を知るの故にあらずして、之を其身に行ふにあることこれなり、之を其身に行ふとは、靈的情動によりて之を愛するの謂なり。靈的情動によりて之を愛するとは、じき事、直き事を、正しきが故、直きが故に愛し、實なること、義しきことを、實なるが故、義しきが故に愛し、善且眞なるを、善且眞なるが故に愛するの謂なり。肉體上の情動によりて之を行ひ、之を愛するとは、自己のため、名聲、尊貴、利益のために之

を愛するの謂なり。故に人もし肉體上の情動によりて如上の諸眞理を愛せば理性的となるを得ず、蓋し彼は其實之を愛するにあらずして、自己のみ愛し、眞理を使役すること主人の奴僕を使役するが如くなればなり。眞理を奴僕となすときは眞理はその人のうちに入り來らず、又生涯の第一級をも開くことなし、但一種の物質的形式によりて所謂學術的なるものとして、其人の記憶上のみ留存し、其處にて自我の愛、即ち肉體の愛と和合し了る。

これによりて人の理性化する模様を明め得べし、即ち天界と教會とに屬する善及び眞に對する靈的愛を有するものは、その第三級を開きて理性的となり、摯實及び正義を愛するものは第二級を開き、正道及び公法を愛するものは第一級を開きて各理性化する。第二と第三との愛はまた善及び眞に對する靈的愛によりて靈化すべし、何となれば靈的愛のうちに流れ入り、これと和合して、その印象を此に留むべければなり。

四百六十九。精靈及び天人に記憶あること猶ほ人間の如し、何となれば彼等の見聞し、思惟し、意志し、所爲する所は、みな其跡を留めて、彼等が理性を不斷修養する方法となるべければなり、而して此事永遠に續きて絶えず。故に精靈及び天人は眞と善とに關する諸知識によりて人間の如く亦益々智慧と證覺とに増進す。精靈及び天人に記憶あることは多くの經驗により、わが知るを許されたる所なり。何となれば彼等が他の諸精靈と俱なれるとき、彼等が嘗て公私の間に思惟し、作爲せる事物

をその記憶より喚び起すをわが見たればなり、われは又魯直にして善なるものが、其徳によりて多少の眞理を體得し、遂に次第に諸知識を吸収し、之により智慧を得、其後天界にまで上れるを見たり。

されど此に知りおくべきことあり、即ち此の如きものはその世にありし時善と眞とに對して有したる情動以外に出で、諸知識を吸収し、また之によりて智慧を吸収することあらず。何となれば各精靈及び天人の情動はすべての方面に涉りて、其世にありしときと同一なればなり。而して此情動は其後益々充足せられて圓滿となるべし、これ亦永遠に至りて息むことなし。凡そ物として永遠にわたりて益々充足せられざるはあらず、そは如何なるものと雖、無窮に變態を生ぜざるはなく、而して是等萬殊の事物によりて、豊富となり、増殖し、結實せざるはなければなり。すべて善なるものは窮まることなし、無極より來るが故に。精靈及び天人が眞と善との諸知識により、其智慧と證覺とをして益々圓滿ならしめて息むときなきは、天界の天人の證覺を説ける處(二六五より二七五)、教會以外の國民又は人種に屬せる天界の事を説ける處(三一八より三二八)、天界における幼兒の事を説ける處(三二九より三四五)につきて見るべし。又この圓滿の度は人が世にありし時、善と眞とに對して有したる情動の外に出でずして、之と相比例するものなることは、第三百四十九節を見るべし。

○人間死後の生涯は世に在りしときの如きなり。

四百七十。人の死後尙生命あるとは、聖言によりて基督教徒の皆知れる所なり、何となれば人は其行と業わざによりて審判せられ、酬らるるべしとは聖言の屢々説く所なればなり。善と本眞ほんしんによりて思惟するものは、何人と雖、此世にてよき生涯を送れるは天界に到り、よからぬ生涯を送れるは地獄に行くことを會得せざるを得ざるべし。されど惡にをるものは、彼が死後の情態は彼が在世の生涯の模様によると云ふを信するを願はず、何となれば彼以爲らく、殊にその病むや以爲らく、假令如何なる生涯を送れりとも、天界は慈恩のみによりて何人にも開かるべく、而してこは只其信仰に由るべしと、殊にしらす、信仰は生涯より分離し得べきものにあらざるを。

四百七十一。人はその行と業わざによりて審判せられ、酬らるるべしとは聖言の處々に云へる所なるが、今其中より下の句を引用せんに、曰く、「それ人の子は、父の榮光を以て、其使等と共に來らん、其時おの／＼の行に由りて報ゆべし」と（馬太傳、第十六章、二七）。曰く、「主に在りて死ぬる死人は福なり、靈も亦曰ふ、然り、彼等は其勞苦を止めて息まん、其功之に隨はん」と（黙示録、第十四章、一三）。曰く、「われ汝曹各々の業に従ひて與ふる所あらむ」と（黙示録、第二章、二三）。曰く、「われまた死にし者の、大となく、小となく、皆神の前に立つを見たり、其處に書ありて展く、死にしもの

は皆、その書に録せるところにより、その業に隨ひて審判を受くるなり。海その中に死人を出し、死と冥府と、其中の死人を出せり、彼等各々其業に循ひて審判を受けたり」と（黙示録、第二十章、一二、一三）。曰く、「われ速かに至らん、必ず應報あり、各人の所爲に循ひて報ゆべし」と（黙示録、第十二章、一二）。曰く、「わが此言をききて之を行ふものは、われ之を賢き人に譬へん、されどわが此言をききて之を行はざるものは、われ之を愚かなる人に譬へん」と（馬太傳、第七章、二四、二六）。曰く、「我をよびて、主よ、主よと云ふもの、悉く天國に入るにあらず、唯これに入るものは我天に在す父の旨を行ふもののみなり。其日われに語りて、主よ、主よ、主の名によりて救へ、主の名によりて鬼を逐ひ、主の名によりて多く奇跡を行ひしにあらずやと云ふもの多からむ。其時われ彼等に告げ、われ曾て爾曹を知らず、惡をなすものよ、吾を離れ去れと曰はん」と（馬太傳、第七章、二一、二三）。曰く、「然るとき、吾等は汝の前に飲食し、汝また我等の衝に救へたりと云ひ出さんに、主人これに答へて我汝等に告げん、われは爾曹を知らず、汝惡をなすものよ」と（路加傳、第十三章、二六、二七）。曰く、「われ彼等の行爲と、その手の所作に循ひて、これに報はん」と（耶利米亞書、第二十五章、一四）。曰く、「エホバよ、汝の目は人の諸の途をみそなはし、おの／＼の行に循ひて、その行爲の果によりて、之に報る給ふ」と（耶利米亞書、第三十二章、一九）。曰く、「われは彼等の途によりて之を罰し、彼等の所爲によりて之を報ゆべし」と（阿西亞書、第四章、九）。曰く、「エホバは吾等の途によ

り、吾等の所爲によりて、吾等を處置し給ふ」と（撒加利亞書、第一章、六）。主最終の審判につきて豫言し給ふとき、主は只所業の事をのみ言ひ給ふ、即ちよきわざを爲せるものは永遠の生命に入るべし、あじきわざをなしたるものは刑罰に入るべしとなり。（馬太傳、第二十五章、三一より四六を見よ。）尙此外處々に人の救済と所罰とにつきて言ふ所多し。知るべし、人の所業と所爲とは生涯の外的なるものにして、而して其内的生涯の性相はこのうちに顯然たることを。

四百七十二。されどその人の所爲と云ひ、所業と云ふは、只外部の形式に現はるゝのみを云ふにあらず、亦其内部の形式中にあるものをも云ふなり。何となれば何人も知る如く、人の所爲及び所業は一として彼が意志及び想念より起らざるはなければなり、もし此の如くにして起らずとせば、人の行爲なるものは只自動機械や影像などの運動と一般なるべし。故に人の所爲と云ひ、所業と云ふも、それだけにては一個の結果に過ぎず、必ずや其精神と活力とを意志及び想念の裡より得來らんを要す、かくて人の行爲は意志及び想念の外形に現はれたるものとなすべし。故に人の所爲又は所業を判断せんには、これを生ずる所の意志と想念との如何を見ざるべからず、もし想念と意志とよからんには、其所爲と所業とも亦よかるべし。もし想念と意志とあしからんには、たとひ外形の上にては一樣の看あらんも、其所爲と所業とは惡なりとなすべし。此に一千の人あり、同一様に行動するとせんに、即ち皆相似の行爲をなすことあらんに、これを其外に現れたる處よりのみ見れば、少しの相異なきに似

たり、されど之を其内より見るときは、意志の不同なるが故に、一々相同じきはあらざるなり。

例令ば朋友と交りて其行爲摯實に、正義なる場合を考ふるに、一人は只己れの爲めに、己れの名譽のために、此の如く見られんことを願ひて、其行爲摯實にし正義にするもあるべし、或は世間のため利益のためにするもあるべし、或は報償返酬のためにするもあるべく、或は友情のためにし、或は法令を懼れ、名聲、職掌の失墜を懼れ、或は他をして、よからぬにもせよ、己れに黨せしめんとするもあらん、或は詐欺のためなるもあらん、其他種々の動機あるべし、彼等はすべて其行動よりすれば善なるに似たり、朋友に對しては實情あり、正義なるは善きことなるが故に。されど彼等が此の如くなるは摯實及び正義ならんがためにあらず、即ち之を愛するが爲にあらずして、却て自己と世間とを愛するがために、其行爲摯實にし、正義にするものなるが故に、之を呼びて惡となすべし、彼等は自愛のために摯實と正義とを使役すること、猶ほ主人の奴僕におけるが如し、此等兩者もし彼に服事すること充分ならずば、彼は必ず之を侮蔑し、解備するに至るべし。

摯實と正義とを愛するが故に、之を行ふものは、外より見れば前者と異ならず。此等の人々の中には、或は信の眞、即ち恭順の念に基づきて此く行ふもあらむ、彼等はこれを以て聖言の命する所となせばなり。或は眞の善、即ち良心に基づきて之を行ふもあらむ、彼等はこれを以て宗教の原則となせばなり。或は隣人に對する仁の善に基づきて之を行ふもあらむ、彼等は隣人の爲めに善を謀らざるべ

からざるを信すればなり。或は主に對する愛の善に基づけるもあらむ、これ善の爲すべきは善なるが故なり。此の如きはまた摯實と正義との爲めに摯實と正義とを行ふもの也、彼等がこの二つを愛するはこれ主よりするが故なり、又主より來る神格。その中にあるが故なり、かくてこはまた神格の自體なるが故也。是等の人々の所爲及び所業は内的に善なり、故にまた外的に善なり、そは前に言へる如く人の所爲又は所業は、其由りて起る所の想念と意志との如何によればなり。是の二つのものなければ之を所爲と云はず、所業と云はず、唯無意の運動に過ぎずとなす。是等の事物によりて聖言の中に云へる所爲及び所業とは何の意なるかを明にすべし。

四百七十三。人の所爲と所業とは其意志及び想念に屬するが故に、又愛及び眞に屬すと云ふべく、從ひて之が性質を定むるものは愛及び信なりと云ふべし。蓋し人の愛と云ひ、人の意志と云ふも同一物なり、又人の信と云ひ、人の意志と云ふも同一物なり。人は其愛する所を欲し、その信する所を了知す、人もし其信する所を愛すれば、亦之を欲して、力の限り之を行ふ。愛と信とは人の意志及び想念の外にあらずしてその内にあるは何人も知る所なり、何となれば意志は愛によりて燃え、想念は信仰上の事項によりて耀げばなり。故に其思索中に證覺あるものは光明を有せり、彼等は眞を思索し、光明に隨ひて之を意志す、即ち眞なるものを信じて之を愛するなり。

四百七十四。されど人格を成すものは意志なり、想念はその意志より起り來る限り之に與かれり、

而して人の所爲又は所業は此等兩者より起り來るものとす。他の語にてまた此義を云へば、曰く、人格を成すものは愛なり、信は愛より起る限り之に與かれり、而して人の所爲及び所業は是等兩者より起り來るものなりと。故に意志又は愛を以て人格の自性となすべし、そは所依は能依に屬すればなり。依りて起るとは、知覺され、見得さるゝやう適宜なる形式をとりて起り現はるゝの謂なり。これによりて愛と相合はざる信仰とは如何なる信仰なるかを明らむべし、即ち靈的活力を缺ける信仰は知識にして信仰にあらざるなり。又之と同じく愛と相合はざる所爲又は所行は如何なるものなるかを明むべし、即ち惡を愛し、虚偽を信するによりて、活力ある如く見ゆる所爲及び所業は、死に屬して生に屬せざるなり。活力ある如く見ゆるを呼びて靈的死と云ふ。

四百七十五。人格はその人の所爲又は所業の上に全身を現露することを知らざるべからず。意志及び想念、又は愛及び信は人の内分にして、之を充足せんとするには、其外分たる行爲又は所業の上に現はれ出でんを要す、この外分は意志と想念とが究竟する終極點にして、このものなければ意志と想念とは充足せられず、即ち未だその存在を全うせざるなり、隨ひて人格中には尙未だ存在せざるなり。行動を缺ける想念及び意志は、(たとひ此の如き意志と想念とを有し得る人ありとするも、)器中に屏息せる火焰の如く遂に死滅をまぬかれず、又砂中の種子の如く嘗て成長することあらず、發育の力を藏しながら滅絶し去るべし。想念と意志と行動と、此三つの者全ければ火焰の如く熱と光とを四方に

發射すべし、又土中に蒔ける種子の如く、成育して樹木となり、花卉となるべし。之を志して而かも之を行はざるは、人たとひ之をよくすとも、そは意志にあらず、之を愛して而かも善をなさざるは、人たとひ之をよくすとも、そは愛するにあらず、只之を欲し、之を愛すと自ら思ふに止まれり、隨ひて此の如きは一個の抽象的思想なれば、皆人の知る如く、遂に消滅し、分散し去らむ。愛と意志とは人間行爲の本心なり、而して摯實、正義の事業はこれが軀體なり。靈的身體、即ち人間の精靈が有する身體はかくの如くにして始めて成るものとす、何となればこの靈體は愛又は意志に基づける所行を外にして出來上るべきものにあらざればなり（上を見よ、四六三）。一言にて云へば、人及びその精靈に屬する一切の事物は彼が所爲と所業とにあるものとす。

四百七十六。是に由りて今や人の死後に留存する生命とは何を云へるかを明かにし得べし、即ち此生命とは彼が愛及びこれよりする信なり、管に内に隠れたるを言ふのみならず、其所行に顯はれたるをも言ふ、かくて人の死後に留まるものは彼が所爲又は所業なり、何となれば此中に彼が愛及び信に基づける一切の事物を含有すればなり。

四百七十七。所主の愛は人の死後に留存し、又は永遠に涉りて轉化せず。人には皆多くの愛あり、されど是等の愛は皆その所主の愛に繋がれてこれがために統一せらる、或は此等の愛相集りて一個所主の愛をなすとも云ふべし。意志よりする事物にして所主の愛と一致するを總て愛と云ふ所以は、皆

その愛せらるる所なればなり。是等の諸愛は内的にして又外的なり、或は直接に所主の愛と和合するあり、或は間接に然るあり、或は近きあり、或は遠きあり、又或は種々の處方によりて之に隸屬せり。これらの愛を概括するときは恰も一王國をなすと云ふべし、何となればこれらはみな此の如き順序にて人のうちにあればなり、されど人自らは此順序につきて知る所あらず。他生にありては此に類するもの、その人のために現前すべし、蓋し彼が有する所の諸愛の順序に従ひてその想念と情動とに延長あればなり、もし彼が所主の愛にして天界の諸愛より成るときは、その想念と情動とは天界の諸團體に延長し、もし地獄界の諸愛より成るときは、地獄界に延長すべし。精靈及び天人の想念と情動とが諸團體のうちに延長を有することは、さきに天界の天人の證覺を説ける章、及び一切の會同及び交通が依りて成る所の天界の形式を説ける章にて見るべし。

四百七十八。以上述べたる事物は只理性的人物の思想力に訴ふる所なれば、是より感官上の知覺に訴へんため、是等を説明し且つ確むべき經驗を述べし。第一、人は死後、自有の愛、即ち意志そのものとなること。第二、人は其意志より見れば、即ち所主の愛より見れば、永遠に至るまで、おのが本來の自格を存すること。第三、天愛、靈愛をもてるものは天界に至り、この愛をもたずして、只肉愛、塵愛に在るものは地獄に至ること。第四、天愛に基づかざる信仰は永存せざること。第五、人間の生命そのものを示せる愛の活動は永存すること。

四百七十九。人は死後自有の愛、即自有の意志となることは、多様の経験の證據する所なり。天界はその全般を擧げて善の愛の異なるに従ひて諸種の團體に分たれ、而して天界に上りて天人となれる精靈はすべてその愛のある處如何によりてそれらの團體に編入せらる。精靈此に来るときは、恰もおのが家に歸るに似たり、おのが生れたる家に歸るに似たり、天人之を見て、そのおのれと相似たるものを求めて友とし交はる。彼もし此處を捨て他處に移るときは、かれは絶えず一種の逼迫を感じ、又そのおのれに似たる者の裡に歸らんとするの念を生ずべし、即彼はかくしてその所主の愛に歸らんと願ふなり。天界に於て同朋相結ぶは此の如くにしてなる、地獄界に於ても亦然り、但此處にありては天愛に反くことを喜ぶ精靈群をなせり。天界は諸團體より成ること、地獄界も亦然ること、各團體の相異は愛の相異によること、これらは既に上に見えたり（四一より五〇、及び二〇〇より二二二）。人は死後自有の愛となることは、すべて彼が所主の愛と一致せざるものは彼を離れ、彼より取り去らるゝを見れば、また明かなるべし。彼もし善靈ならんには、すべて彼の善と調和せず、合同せざるものはすべて彼を離れ、彼より取り去らるべく、かくして彼はおのが自有の愛に導き入れらるべし。凶靈の場合も亦然り。只凶靈より取り去らるゝは真理にして、善靈より取り去らるゝは虚偽なり、之を相違となす、されど皆終に自有の愛となるは一なり。こは人靈第三の情態に入るとき起るものとす、後に至りて説くべし。此事起るとき、人は絶えずその自有の愛の方面に向ひてその面を轉すべし、そ

の身は如何なる方向に轉することあらんも彼が自有の愛はその眼前に在らずと云ふことなし（上を見よ、一一三、一二四）。その所主の愛に繋がるゝ限りは、精靈を導きて何地にも至り得べし、彼は其事の成行を知りて之に抵抗せんと思へども、彼は遂に之を能くするを得ず。精靈は如何ばかりその所主の愛に背きて自由に行動し得べき餘地を有するかを試さること屢ありたれども、皆其效を奏せざりき。彼が所主の愛は鎖の如く、網の如し、彼はこれに束縛せられ、之に牽かるゝが故に、彼は決してこれと相離るゝを得ず。世における人も亦此の如し、彼等は其愛の導くまゝに動き、また其愛のため故に他の制する所となる、されど彼等一たび精靈となれば更に甚しきものあり、何となれば此時彼等は自有の愛にあらざるものを榜表し、またおのれに屬せざるものを假裝するを得ざればなり。人の精靈とはその所主の愛なることは、他生における一切の交感に現れて顯然なり、何となればもし甲の行爲又は言説にして乙が有する所の愛と一致すれば、乙の面貌全體現出して少しも隠れず、その愉快にして活氣にとめるを認め得べけれど、もし甲の行爲又は言説にして、之と相反するときは、乙の面貌全く轉變して暗愴となる、復見るべからず、遂には全く消え去ること恰も始よりこゝにあらざりしが如くなればなり。われは屢々何が故に此の如くならざるべからざるかを怪しみぬ、そは世間にては此の如きこと絶えてあらざればなり。されど天人われに告げて曰ふ、人間のうちにある精靈もまた此の如し、彼自ら轉じて他に向ふときは、また之を見得べからざるなりと。

人の精靈とはその所主の愛なりと云ふことは、各個の精靈皆その愛と一致するものを残らず攫取して己れが所有となさんとするを見て、また證據するを得べし。各人所主の愛は木質にして海綿の如く孔多きものに譬ふべし、此愛は其生長を促すべき液體をのみ吸収して其他はすべてこれを拒絶す。又之を譬ふれば各種の動物が己れに必要な食料を知り、その性格と一致するものをのみ求めて、その然らざるものを忌避するに似たり、何となれば愛は皆己に似たるものを取りて自ら養はんと願へばなり、即ち悪しき愛は虚偽をとり、よき愛は眞理をとるが如し。われ嘗てさる朴直なる善靈が眞と善とを凶靈に教へんとするを屢々見得たることあり、されどかゝる時は凶靈逃げ去りて其誨を受けず、自己の仲間に戻りてその愛と一致せる虚偽を見るに及びて始めて喜ぶこと甚し。われはまた善靈が眞理につきて互に物語れるを見たることありしに、此處にありし善靈は熱心に此會談を聴き居たりしが、凶靈の亦此處にありしものは何事にも意を留めず、恰も聞かざるに似たりき。

精靈界に幾多の途あり、(或は天界に通じ、或は地獄に通ず、皆何れかの團體に通せざるはなし。善靈は天界に通ずる途及び彼等自有の愛の善ををる天人の團體に通ずる途をのみ進み行きて、その外の途は彼等の眼に觸るるとあらず。されど凶靈は地獄に到る途及び彼等自有の愛の惡ををる地獄の團體に通ずる途をのみ進み行きて、此外の途にはその眼を觸るることなし、もし之を見ることあるも之を行くを好まず。靈界における此等の途は如實の影像にして、眞理又は虚偽に相應す、故に聖言にては

途を以て眞理又は虚偽を表はせり。此の如く經驗上の證據によりて、前きに道理によりて云へる所、即ち人は死後自有の愛、自有の意志となると云ふことを確め得べからむ。わがこゝに自有の意志と云へるは、各人の意志即ち是れ各人の愛なればなり。

四百八十。人は死後、其意志即ち所主の愛より見れば、永遠に至るまで本來の自格其のまゝなるとは、また多くの經驗によりてわがために證據せられたる所なり。われ嘗て二千年前に住める諸精靈と物言へるを許されたることありき、彼等の生涯は歴史によりてわが能く知れる所なるが、其時の彼等は尙依然として舊時の如く歴史に記述せる所と相違せざりき、即ち彼等が生涯の源泉となり、標準となれる自有の愛は今に至りて尙變らざる也。此外一千七百年前に住みて、歴史に知られたるあり、又四百年前に住めるあり、三百年前のものあり、乃至今日に至れり、而してわれは皆此等の人々と相語るを得たるに彼等は尙舊時と同一の情動によりて動けり、只異なる所は、彼等今は昔日の歡喜に相應せる諸事物を愛すること是なり。天人曰ふ、所主の愛は永遠に涉りて變異なし、各人皆其愛に基づきて其生を送る、蓋し人は自有の愛そのものなればなり。故に此所主の愛を取除くは精靈の生命を奪ふに等し、即ち彼等を滅ぼすなりと。天人又曰ふ、其理由は、人は死後、世間にあるべき如く、他の誨へを受けて改善するとあらず、何となれば自然的知識と情動とより成れる終極の平面なるものは靈的ならざるが故に、靈界にありては靜息して亦復び開くべからざればなり(四六四を見よ)。

而して人の心と性格とより成れる内分は、家の礎の上に立つが如く、此の平面上に据え付らるゝなり。故に人は世にありしとき有せる愛によりて永遠に其生を送るものとす。天人は世の人が所主の愛即是れ人の自格なることを知らざるを見て驚くこと一方ならず、又世に人は主より直接の慈恩によりて救はるるもの、即ち信のみにて救はるるものにして其生涯の如何に關せずと云ふことを信するもの多く、又神の慈恩は間接なること、世にあるとき、並びに死後の永生に至るまで、主の導き給ふ所となる、是れ神の慈恩と云ふこと、又罪惡の生涯にをらざるをば慈恩に導かると云ふこと、又信仰とは主より來る天愛より起る所の眞理に動かさるるを云ふこと、これらの事理を知らざるもの多きを見て、天人の驚きは一方ならざりき。

四百八十一。天界及び靈の愛にをるものは天界に來り、肉體及び世間の愛にをりて、天界及び靈の愛なきものは地獄に行くことはわれ親しく天界に來れる者と、地獄に投げられたる者を見て、明かにその然ることを知れり。何となれば天界に取り上げられたるものは天界及び靈の愛によりて其生を送れるものにして、地獄に投げ入れられたるものは肉體及び世間の愛によりて其生を送れるものなればなり。天界の愛とは只善なるが故に善を愛し、誠なるが故に誠を愛し、正しきが故に正しきを愛して、而して此愛より之を行ふを云ふ。かくて天界の愛にをるものは其性や善なり、誠なり、正し、即ちこれを天界の生涯となす。善き事、誠なる事、正しき事を、唯そのことの爲めに愛して、之を爲し

之を身に行ふものは、亦萬物に勝りて主を愛するものなり、是等の事は主よりするが故に。又彼等は隣人を愛するものなり、是等の事は即ち所愛の隣人なるが故に。されど肉體の愛とは善き事、誠なる事、正しき事を愛するに、そのことのためにせずして、己の爲めにするを云ふ、此の如きはその愛より來るべき名譽、尊貴、利益を求むるものなり。彼等は善き事、誠なる事、正しき事の裡に主と隣人とを求めず、只自己と世間とを喜びて虚妄の中に起臥せり、而して虚妄に基づける善き事、誠なる事、正しき事はみな惡なり、不實なり、不正なり、而かも彼等が善を愛すると云ふはこれらのことの爲にする也。

此の如く人々の生涯を定むるものはその愛なるが故に、人の死後、精靈界に入るや、直ちに彼は如何なる愛を有せるかを檢せられ、彼と相似たる愛にをるものと交際す、即ち天界の愛にをるものは、天界のものと交はり、肉體の愛にをるものは地獄のものと交はる。第一及び第二の情態を経過せる後は、彼等相分れて復た相見ず、相識らず、何となれば人は各々その自有の愛に還りて、其心の内分より、面貌、身體、言語の外分に至るまで、皆此愛となるべければなり。かくて如何なる人も、その外形に至るまで、自有の愛を現像せずと云ふことなし。肉體の愛を現するものは、粗にして暗澹、黒くして醜陋なり、天界の愛を現するものは、快活にして耀き、白くして美はし。此兩者は其想念と感情とにおいても亦全く異なれり。天界の愛を現せるものには智慧あり、證覺あれども、肉體の愛を現

せるものは魯鈍にして恰も痴呆に似たり。

天界の愛に在るものゝ想念及び情動の内分を徹して、之を見るを得ることあらんには、われらは彼等の内分の光の如くなるを認め、又或は光焰の如き光あるをも認むべし、而して彼等の外分は虹霓の如く様々の美はしき色彩を有するを認むべし。されど肉體の愛に在るものゝ内分は、閉塞せるが故に、只黒きものゝ如く見ゆ、或るは暗澹たる火の如く見ゆるもあり、是等は皆てその内分に險惡なる詐偽を宿せるものなり。其外分に至りては、色汚れて見るだに心地惡し。主の御心に稱ふときは、心と性格とより成れる内外分を併せて、此の如く靈界にて現前せしめ給ふことあり。

肉體の愛に在るものは天界の光明を見ることなし、此光明彼等には只黒暗々たり、而して地獄の光は炭火の光に似たれども、彼等は之を明かなる光となせり。天界の光明中にありては彼等の内視は暗くなり行き、遂に彼等をして發狂するに至らしむ、故に彼等は之を避けて洞穴及び窠孔に隠る、その淺深は彼等が悪より來れる所の虚偽の多少に比例せり。之に反して天界の愛に在るものは、天界の光明中に來ること益々高く、益々内的となれば、彼等の物を見るや益々分明にして美はしく、而してその眞理を知覺するや益々智的にして證覺あり。

肉體の愛にあるものは如何にしても天界の熱に堪ふるを得ず、何となれば天界の熱、即ち天界の愛なればなり。彼等は地獄の熱に住めり、此熱は己れを好まざるものを焼かんとする熱なり。此熱より

來る歡喜は他を侮蔑するにあり、仇敵、憎怨、報讐の情に燃ゆるに在り。肉體の愛に在るもの、こゝに住するとき其本來の生涯に入る、彼等は善そのものにより、及び善そのものゝために、他に善を行ふとは、何の事なるかを知らず、唯惡の心によりて善をなし、惡のために善をなすを知るのみ。

肉體の愛にあるものは又天界に來りて呼吸するを得ず、何となれば凶靈もし天界に導かるゝことあれば恰も人と相争へる如く、其呼吸逼ればなり。されど天界の愛にあるものは、天界に入ること益々内的にして、呼吸益々自在となり、生氣益々充足す。故に知るべし、天界の愛、靈の愛は人に在りては天界となることを、天界の一切は此愛の上に銘記せらるゝが故に。されど天界の愛、靈の愛なき肉と世間との愛は人に在りては地獄となる、地獄の一切は此愛の上に銘記せらるゝが故に。之を推して、天界及び靈の愛に在るものは天界に來り、肉體及び世間の愛のみありて、天界及び靈の愛を缺けるものは、地獄に行くものなることを知るべし。

四百八十二。天界の愛に基づかざる信は人と共に留存せざること、これまた多くの經驗にてわがために顯はになれり。もし此事につきてわが見聞せる事物を記さんとせば數卷の書を要すべし。肉體及び世間の愛に在りて、天界及び靈の愛を缺けるものには、何等の信仰なく、又何等の信仰をも有し得ざること、又彼等有する所のものは智識または一種の勸誘に過ぎざること、こはわが自ら證據し得る所なり、勸誘とは、もし此に一物ありて、此もの彼等自利の愛のために用を辨することあれば、彼

等は之を眞理なりと自ら勧誘して、之を信せんとするを云ふなり。自ら信仰なりと思へる多くの人、實に信仰あるものゝ處に導かれて、相互の間に交感を起さんとしたるに、彼等は遂に自ら信仰なきものなることを知覺せり。彼等其後自白して曰く、只眞理を信じ、聖言を信じたりとて之を信仰と云ふべからず、天界の愛によりて眞理を愛し、内底の情動によりて之を志し、之を行ふ、これを信仰となす。又彼等が所謂の信仰となせる一種の勧誘なるものは冬日の光に過ぎず、何となれば此光には熱なきが故に地上の萬物は霜に包まれて生氣なく、雪に埋れて起つと能はざればなり。此理由によりて、彼等が有せる勧誘的信仰の光なるものは、天界の光線に逢着するとき、忽ち消滅するのみならず、亦黑暗々となりて、何人も自ら見るを得ざるに至る。又之と同時に其内分も暗くなり行きて、彼等は何事をも會得する能はず、遂に虚偽のために發狂すべし。故に此の如きものゝためには、嘗て聖言より學べる所、教會の教説より學べる所、及び彼等が信仰に基づけるとなせる一切の諸眞理なるものは、皆取除かるべし、而して之に代ふるに、彼等はその生涯に屬する惡と相離れざる一切の虚偽を以て充たさるべし。何となれば一切のものは其人の愛に循ひて導き入れられ、之と一致して離れざる虚偽と抱合すればなり。此時彼等は眞理を憎み嫌ひて之を斥くべし、そは眞理は彼等が所住の惡より來る所の虚偽と相容れざるに由る。教説によりて信仰を得たりと口には稱へながら、その身に惡を行なへるものは、地獄に往生すること、こはわが天界及び地獄の事物につき、親しく經驗せる所によりて證據し

得る所なり。われは地獄に投げ落さるゝもの數千の多きに上るを見たり、此事につきてはわが小著「最後の審判及びバビロンの亡滅につきて」を見るべし。

四百八十三。死後に留存するものは愛の活動なり、從ひて人間の行爲なりと云ふことは、今經驗によりて示したる處、及び人の行爲及び所業につきて言へる所より、必然に來るべき結論なりとす。愛の活動とは所業と行爲とのことなり。

四百八十四。一切の所業と行爲とは道德上及び民文上の生涯に屬することを知らざるべからず、故にこは誠にして直きこと、正しくして公平なることに關すと謂ふべし。誠にして直きは道德上の生涯に屬し、正しくして公平なるは民文上の生涯に屬す。而してこの行爲の源泉となる愛には天界的なるあり、地獄的なるあり。道德上及び民文上の所業及び行爲にして、天界の愛に基づけるものは、天界的なり、何となれば天界の愛によりてなざるゝ所は主によりて爲さるゝなり、而して主によりてなざるゝ所は皆善ならざるはなければなり。されど道德上、民文上の行爲、所業にして、地獄界の愛に基づけるものは地獄的なり、何となれば此愛は自己及び世間の愛にして、之によりて爲さるゝ所は、人によりて爲さるゝなり、而して人によりて爲さるゝ所は皆それ自身に惡ならざるはなければなり。蓋し人はその自性即ち自我より見れば只惡のみなるによる。

○各人の生涯に屬せる歡喜は死後之に相應せる歡喜となること。

四百八十五。前章において各人能治の情動、即ち所主の愛は永遠に留存することを示したり、今はこの情動即ち愛に屬する諸歡喜は之に相應せる歡喜に轉化することを示すべし。相應せる歡喜に轉化すとは、自然的歡喜に相應せる靈的歡喜に轉化するの謂なり、かくの如き靈的轉化ある所以は人は其物質的形體にをるうちは、自然的世間に住めども、此身體を脫離するときは、靈界に來り、靈的身體をつくるを見て明かなるべし。天人には圓滿なる人間の相あること、死後の人間も亦然ること、而して彼を蔽へる身體は靈的なること、これらは既に上に見たるところなり(七三より七七、及び四五三より四六〇)、靈的事物と自然的事物との相應とは何なるかもまた上に説ける所なり(八七より一一五)。四百八十六。人の有する一切の歡喜はその所主の愛より來る、何となれば人はその愛する所以外に出で樂しむ所なければなり、かくて彼が他に勝れて愛する所は彼が特に喜ぶ所なり、そは所主の愛と云ふも他に勝れて愛する所と云ふも同じ事なればなり。此等の歡喜は一にして足らず、何となれば概して曰ふに、所主の愛の數あるほど歡喜あるべければなり。故に歡喜の數は人間、精靈、天人の數と同じきわけなり、そは甲の所主の愛は、すべての方面において、乙の愛と同一ならざるべければなり。人各其面貌を異にするはこれがためなり、面貌はその人の心の肖像なり。靈界にありてはその人の

の所主の愛の肖像なり。

又各人が有する個々の歡喜には無限の變態あり、又甲の歡喜と乙の歡喜とは全く相等しきことあらず、同じき事あらず、或は甲乙相續して起り、或は同時に起ることあらんも、彼と此とは決して相同じからず。されど人はおの／＼此等個々の愛を以て彼が自有の愛に歸せり、自有の愛とは即ち所主の愛なり、蓋し此愛は此等個々の歡喜より成るものにして、かくして之と相一致すればなり。此の如くにして一切の歡喜を全體より見れば皆一個の總括的所主の愛と關連せざるはあらず、即ち天界にては總てのもの主に對する愛と連關し、地獄にては自我の愛に連關す。

四百八十七。各人の自然的歡喜は死後轉化して靈的歡喜となること云ふ、此歡喜とは何か、又其性質は如何、是は相應の理によらずしては到底知り難き所なり。一般に相應の理の教ふる所によれば、曰く、自然的なるものにして、之と相應せざる靈的事物を有せざるはなしと、又個々につきて云へば、此理は此く相應する事物の何なるか、其性質の如何なるかを教ふるなり。故に今此智識を有して、又自己所有の愛の何たるかを知り、又彼が一切の愛を連結せる普遍的愛の何たるかを知らざること、先きに云へるが如くならば、かれは死後如何なる情態に移るべきかを確め得べく、また之を知り得べきわけなり。

されど此所主の愛の何たるかを知らずは自己をのみ愛するものと決して能くせざる所とす、何となれば